

筑波大学 社会貢献プロジェクト

2013-14

科学振興



国際



環境



文化・地域活性化



健康・医療・福祉



復興・再生支援



筑波大学社会貢献プロジェクト 2013-14

社会貢献プロジェクトとは

社会貢献プロジェクトは、筑波大学と社会との多様な形での連携活動を学内公募し、総合的に支援するもので、平成 16 年度にスタートしました。本プロジェクトは、特定の分野に限定することなく、地域との連携活動を自由に提案することを特徴としています。「科学振興」、「国際」、「環境」、「文化・地域活性化」、「健康・医療・福祉」、「復興・再生支援」等、内容は多岐に亘っています。

平成 21 年度からは、教員だけでなく学生も申請できるようにし、柔軟かつ自由な発想に基づく課題も増えてきました。平成 25 年度は、63 件の申請のうち、28 件を採択課題としました。

〈筑波大学社会貢献・地域連携 HP〉
<http://scpj.tsukuba.ac.jp/>

筑波大学社会貢献プロジェクト 2013－14

科学振興		
■ 筑波大学発　－おもしろふしぎ理科実験・工作隊－	数理物質系 准教授 小 林 正 美	4
■ 茨城県内の高校交流による数理モデルを用いた地域課題解決提案	システム情報系 教授 吉 瀬 章 子	6
■ スーパーサイエンスリーグによる未来の科学者の育成　～卓越した児童・生徒をさらに伸ばす試み～	生物学類長（生命環境系） 濱 健 夫	8
■ 学生によるサイエンスコミュニケーションの実践　～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT～	生命環境系 助教 Matt Wood	10
■ 大学院生による大学と社会の学術交流の推進	人間総合科学研究科 博士後期課程3年 角 谷 雄 哉	12

国 際		
■ 国際都市つくばの新しい国際化施策　一定住外国人児童に対する「職育」プログラム	人文社会系 准教授 明 石 純 一	14
■ 日本の難民問題への認知度向上・当事者への支援を通じて多文化共生社会の構築	社会・国際学群 国際総合学類4年 富 澤 麻 琴	16

環 境		
■ パーソナルモビリティ・超小型車両活用実験と交通エコ化可能性の検討	システム情報系 准教授 岡 本 直 久	18
■ 環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業	生命環境系 教授 田 村 憲 司	20
■ 「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの実践展開 2013	生命環境系 助教 丸 尾 文 昭	22
■ 食と緑の地域活動支援による魅力ある社会の創成	農林技術センター 教授 林 久 喜	24
■ 自然観察・昆虫採集を通した環境教育　つくバグ 2013　地域の生き物に目を向けてみよう！	生命環境科学研究科 博士前期課程2年 藏 満 司 夢	26
■ 観光資源・教育のための筑波山周辺の気候の実態調査	生命環境科学研究科 博士後期課程3年 加 藤 隆 之	28

文化・地域活性化		
■ つくば市の公務員宿舎一斉廃止による地域・都市への影響分析とまちづくり提案の検討	システム情報系 准教授 藤 井 さやか	30
■ 学生・住民協働によるキャンパスライフの向上をめざして　－筑波大学キャンパス GIS の構築－	生命環境系 教授 村 山 祐 司	32
■ 筑波大学大学院カウンセリングコース・キャリア・プロジェクト(TCCP)　－中小企業従業員のためのキャリア支援－	人間系 教授 岡 田 昌 毅	34
■ 児童生徒による「わたしの学校・地域」紹介 CM 製作プロジェクト　－大子町からの発信－	人間系 准教授 上 田 孝 典	36
■ 美術による復興支援　－「夏休みアート・デイキャンプ 2013」の実施	芸術系 教授 太 田 圭	38

■ 高校生アートライター大賞：芸術による高大連携事業	芸術系 教授 岡 崎 昭 夫	40
■ 伊豆半島ジオパーク構想における地域住民参加型自然体験活動の確立	生命環境系 助教 和 田 茂 樹	42
■ 地域への発信　－『筑駒人材バンク』を生かした地域貢献－	附属駒場中・高等学校 副校長 大 野 新	44
■ 文京ラグビースクール活動支援　～小学生へのラグビー普及活動の一環として～	附属高等学校 教諭 山 田 研 也	46
■ つくさか地域食育支援プロジェクト	附属坂戸高等学校 副校長 小 林 美智子	48

健康・医療・福祉		
■ みんなラボ病院プロジェクト　－みんなラボ研究員チームによる大学病院の使いやすさ調査研究－	人間系 教授 原 田 悦 子	50
■ 地域住民の要介護化予防支援体系の構築	体育系 教授 田 中 喜代次	52
■ 高齢者運動支援リーダーを中心とした健康づくりネットワークの醸成	体育系 准教授 大 藏 倫 博	54
■ ばらんすあっぷ大作戦　～デジタルデバイスを活用した小中学生への食育～	体育系 准教授 麻 見 直 美	56
■ 小学生低学年児童とその保護者向けの「命」をテーマとした教材製作とその普及	医学医療系 教授 大河内 信 弘	58
■ 医療職および一般市民に対する新国際標準蘇生(ガイドライン 2010)教育体制強化の支援	医学医療系 准教授 高 橋 伸 二	60
■ 発達障害児を養育中の家族のエンパワメントを促進するための取り組み	医学医療系 准教授 涌 水 理 恵	62
■ 急病時の子どもが医療機関を直ちに受診すべきか否かの判断を支援する携帯電話サイトの公開	図書館情報メディア系 教授 岩 澤 まり子	64
■ 視覚に障害のある乳幼児と家族等への子育て支援事業　～育児学級ミニ講座～	附属視覚特別支援学校 副校長 星 祐 子	66
■ 視覚障害アスリートに対する鍼灸マッサージによる競技支援	人間系 教授 宮 本 俊 和	68
■ 希死回生　～学生によるつくば地域自殺予防プロジェクト～	人間学群 心理学類4年 高 橋 あすみ	70
■ ゆめ花火	医学群 医学類6年 加 藤 愛香里	72

復興・再生支援		
■ 東日本大震災津波被災地域における民俗資料・文化財の調査及び保存活動	人文社会系 教授 古 家 信 平	74
■ 柔道の再興と学校必修化を支援する「東北3県柔道指導キャラバン」	体育系 准教授 増 地 克 之	76
■ 復興作業およびスポーツ振興を通じた被災地での支援活動	体育系 助教 奈 良 隆 章	78

社会貢献活動ポスター展示発表会 2014	80
----------------------	----

筑波大学発 ―おもしろふしぎ理科実験・工作隊―

数理物質系 准教授 小林 正美

1 概要

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

2 内容

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。それに加え、一般の方を対象とする企画（例えば、つくば科学フェスティバル、うしくみらいエコフェスティバル、我孫子市市民講座など）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

【主な自治体等との連携】

茨城県 つくば市教育委員会生涯学習課
エキスポセンター
県北生涯学習センター
水戸生涯学習センター
県南生涯学習センター
県西生涯学習センター
レイクエコー
桜川市岩瀬公民館
神栖市土合コミュニティセンター
神栖町平泉児童センター
潮来市牛堀公民館
常陸太田市西山研修所

千葉県 我孫子市教育委員会
我孫子市アビスタ
佐倉市根郷公民館

東京都 上野国立科学博物館



3 今後の展望

より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

【ポスター】

平成25年度社会貢献プロジェクト

筑波大学発 -おもしろふしぎ理科実験・工作隊-

小林 正美（物質工学域・准教授） 重川 秀実（物理工学域・教授） 中村 潤児（物質工学域・教授） 木島 正志（物質工学域・准教授）

背景と目的

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

成果

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。それに加え、一般の方を対象とする企画（例：つくば科学フェスティバル、うしくみらいエコフェスティバル、我孫子市市民講座など）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

平成25年度 出前講義一覧

4/25(土) 一井小	4/26(土) 科学学校南園
5/30(金) 一井小	5/31(土) 筑波大学
6/28(土) 筑波大学	6/29(土) 筑波大学
6/30(日) 筑波大学	7/1(日) 筑波大学
7/2(日) 筑波大学	7/3(日) 筑波大学
7/4(日) 筑波大学	7/5(日) 筑波大学
7/6(日) 筑波大学	7/7(日) 筑波大学
7/8(日) 筑波大学	7/9(日) 筑波大学
7/10(日) 筑波大学	7/11(日) 筑波大学
7/12(日) 筑波大学	7/13(日) 筑波大学
7/14(日) 筑波大学	7/15(日) 筑波大学
7/16(日) 筑波大学	7/17(日) 筑波大学
7/18(日) 筑波大学	7/19(日) 筑波大学
7/20(日) 筑波大学	7/21(日) 筑波大学
7/22(日) 筑波大学	7/23(日) 筑波大学
7/24(日) 筑波大学	7/25(日) 筑波大学
7/26(日) 筑波大学	7/27(日) 筑波大学
7/28(日) 筑波大学	7/29(日) 筑波大学
7/30(日) 筑波大学	7/31(日) 筑波大学
8/1(日) 筑波大学	8/2(日) 筑波大学
8/3(日) 筑波大学	8/4(日) 筑波大学
8/5(日) 筑波大学	8/6(日) 筑波大学
8/7(日) 筑波大学	8/8(日) 筑波大学
8/9(日) 筑波大学	8/10(日) 筑波大学
8/11(日) 筑波大学	8/12(日) 筑波大学
8/13(日) 筑波大学	8/14(日) 筑波大学
8/15(日) 筑波大学	8/16(日) 筑波大学
8/17(日) 筑波大学	8/18(日) 筑波大学
8/19(日) 筑波大学	8/20(日) 筑波大学
8/21(日) 筑波大学	8/22(日) 筑波大学
8/23(日) 筑波大学	8/24(日) 筑波大学
8/25(日) 筑波大学	8/26(日) 筑波大学
8/27(日) 筑波大学	8/28(日) 筑波大学
8/29(日) 筑波大学	8/30(日) 筑波大学
8/31(日) 筑波大学	9/1(日) 筑波大学
9/2(日) 筑波大学	9/3(日) 筑波大学
9/4(日) 筑波大学	9/5(日) 筑波大学
9/6(日) 筑波大学	9/7(日) 筑波大学
9/8(日) 筑波大学	9/9(日) 筑波大学
9/10(日) 筑波大学	9/11(日) 筑波大学
9/12(日) 筑波大学	9/13(日) 筑波大学
9/14(日) 筑波大学	9/15(日) 筑波大学
9/16(日) 筑波大学	9/17(日) 筑波大学
9/18(日) 筑波大学	9/19(日) 筑波大学
9/20(日) 筑波大学	9/21(日) 筑波大学
9/22(日) 筑波大学	9/23(日) 筑波大学
9/24(日) 筑波大学	9/25(日) 筑波大学
9/26(日) 筑波大学	9/27(日) 筑波大学
9/28(日) 筑波大学	9/29(日) 筑波大学
9/30(日) 筑波大学	10/1(日) 筑波大学
10/2(日) 筑波大学	10/3(日) 筑波大学
10/4(日) 筑波大学	10/5(日) 筑波大学
10/6(日) 筑波大学	10/7(日) 筑波大学
10/8(日) 筑波大学	10/9(日) 筑波大学
10/10(日) 筑波大学	10/11(日) 筑波大学
10/12(日) 筑波大学	10/13(日) 筑波大学
10/14(日) 筑波大学	10/15(日) 筑波大学
10/16(日) 筑波大学	10/17(日) 筑波大学
10/18(日) 筑波大学	10/19(日) 筑波大学
10/20(日) 筑波大学	10/21(日) 筑波大学
10/22(日) 筑波大学	10/23(日) 筑波大学
10/24(日) 筑波大学	10/25(日) 筑波大学
10/26(日) 筑波大学	10/27(日) 筑波大学
10/28(日) 筑波大学	10/29(日) 筑波大学
10/30(日) 筑波大学	10/31(日) 筑波大学
11/1(日) 筑波大学	11/2(日) 筑波大学
11/3(日) 筑波大学	11/4(日) 筑波大学
11/5(日) 筑波大学	11/6(日) 筑波大学
11/7(日) 筑波大学	11/8(日) 筑波大学
11/9(日) 筑波大学	11/10(日) 筑波大学
11/11(日) 筑波大学	11/12(日) 筑波大学
11/13(日) 筑波大学	11/14(日) 筑波大学
11/15(日) 筑波大学	11/16(日) 筑波大学
11/17(日) 筑波大学	11/18(日) 筑波大学
11/19(日) 筑波大学	11/20(日) 筑波大学
11/21(日) 筑波大学	11/22(日) 筑波大学
11/23(日) 筑波大学	11/24(日) 筑波大学
11/25(日) 筑波大学	11/26(日) 筑波大学
11/27(日) 筑波大学	11/28(日) 筑波大学
11/29(日) 筑波大学	11/30(日) 筑波大学
12/1(日) 筑波大学	12/2(日) 筑波大学
12/3(日) 筑波大学	12/4(日) 筑波大学
12/5(日) 筑波大学	12/6(日) 筑波大学
12/7(日) 筑波大学	12/8(日) 筑波大学
12/9(日) 筑波大学	12/10(日) 筑波大学
12/11(日) 筑波大学	12/12(日) 筑波大学
12/13(日) 筑波大学	12/14(日) 筑波大学
12/15(日) 筑波大学	12/16(日) 筑波大学
12/17(日) 筑波大学	12/18(日) 筑波大学
12/19(日) 筑波大学	12/20(日) 筑波大学
12/21(日) 筑波大学	12/22(日) 筑波大学
12/23(日) 筑波大学	12/24(日) 筑波大学
12/25(日) 筑波大学	12/26(日) 筑波大学
12/27(日) 筑波大学	12/28(日) 筑波大学
12/29(日) 筑波大学	12/30(日) 筑波大学
12/31(日) 筑波大学	1/1(日) 筑波大学

出前講義写真

お礼の手紙・感想文

今後の展望

今後も、より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

茨城県内の高校交流による 数理モデルを用いた地域課題解決提案

システム情報系 教授 吉瀬 章子

1 概要

茨城県内の県立高校3校から参加した6チーム36名の高校生を対象として、自ら発見した地域の課題を数理モデルで表現することにより、問題を明確化し、解決策の提案とその考察を行う事業を支援した。

具体的には、①大学教員が各高校へ出向いて数理モデルに関する講義を行ったのち、②高校生がテーマとなる地域の問題を提案、③8月に大学でモデル化合宿を行いソルバー（数理モデルの解を求めるソフトウェア）を用いて解決策を提案する枠組みを構築、④TAのサポートを受けながら高校生がデータ収集やモデル化の改良に取り組み、⑤紫峰祭において「高大連携シンポジウム」として成果を発表した。

2 内 容

①大学教員による数理モデルの出張講義

6月10日	(月)	16:00-17:00	下妻一高	問題発見・最適化モデルの講義 (吉瀬章子)
6月18日	(火)	16:30-17:30	竜ヶ崎一高	問題発見・最適化モデルの講義 (紫野麻衣子)
6月28日	(金)	14:00-15:00	日立北高	問題発見・最適化モデルの講義 (山本芳嗣)

②高校生によるテーマの提案

【日立北高等学校】

- 北茨城の観光地の訪問順をうまく決めて復興観光ルートのコストを最小にしたい
 - 交差点の選択と順序をうまく決めて津波避難経路の距離を最小にしたい
- 【下妻第一高等学校】**
- スクールバス停の位置をうまく決めて最寄りバス停の最遠距離を最小にしたい
 - イベントの訪問順序をうまく決めて「ふれあちゃん」の移動時間を最小にしたい

【竜ヶ崎第一高等学校】

- 沖縄観光地の選択をうまく決めて修学旅行の満足度を最小にしたい
- TDSアトラクションの順序をうまく決めて1日で乗れるアトラクション数を最大にしたい

③筑波大学モデル化合宿（8月9日～11日）

8月9日	(金)	10:00	筑波大学第三エリアF棟入口集合	
		10:30-11:30	3B213プレゼンテーション キックオフミーティング 稲垣敏之システム情報工学研究科長挨拶	
		10:30-10:35		
		10:35-12:00	「数理モデル」自己紹介 ・テーマ発表	
		12:00-13:00 13:00-16:30	学食 各自で購入	
		16:30 17:30	3F1102, 3F1115, 3F1122 3F1136, 3F1222, 3F1223 筑波大学第三エリアF棟入口集合 集合一バスで移動 チェックイン	
		18:00-19:00 19:00-21:00	筑波ふれあいの里 食堂 筑波ふれあいの里 大広間 夕食 グループ毎にモデル化(予備)	
	8月10日	(土)	7:00-8:00 9:00-12:00	筑波ふれあいの里 食堂 筑波ふれあいの里 大広間 朝食 FICO Xpress講義 プログラミング練習
			12:00-13:00 13:00-17:00	筑波ふれあいの里 食堂 各自で購入
			筑波ふれあいの里 大広間 予備:5人部屋8~12	グループ毎にモデル化 プログラミング
		18:00-19:00 19:00-21:00	筑波ふれあいの里 食堂 筑波ふれあいの里 大広間 高次夕食会 グループ毎にモデル化(予備)	
8月11日		(日)	7:00-8:00 9:00	筑波ふれあいの里 食堂 筑波ふれあいの里 朝食 集合一バスで移動
			10:00-13:00	筑波大 グループ毎に 会宿発表会用スライド作成
			13:00-14:00 14:00-15:45	3F1102, 3F1115, 3F1122 3F1136, 3F1222, 3F1223 学食 各自で購入 3B213プレゼンテーション ルーム 会宿発表会
			14:00-14:05 14:05-15:35 15:35-15:45	
			16:15-17:00	図書館前芝生 記念撮影 解散
			17:00	

④TAのサポートによるデータ収集とモデルの改良

【日立北高等学校】T A 4～6 名が、9 月 9 日、10 日、11 月 9 日、13 日、27 日、11 月 3 日に高校や資料収集のため北茨城各地を訪問した。

【下妻第一高等学校】ＴＡ４名が、９月１９日、１０月
２７日に高校を訪問した。

【竜ヶ崎第一高等学校】ＴＡ２～４名が９月７日、９日、１０月１３日、２７日、１１月３日に高校を訪問した。

⑤紫峰祭における「高大連携シンポジウム」

日時 2013年11月4日(月)13:00～16:00

会場 筑波大学第三エリア 3A204 教室

主催 筑波大学

共催 国立大学協会、茨城県教育委員会

後援 オペレーションズリサーチ学会、応用地域学会

3 今後の展望

平成 26 年度もこれらの 3 つの高校から事業の継続の要望があり、T A と共に取り組む予定である。

【ポスター】



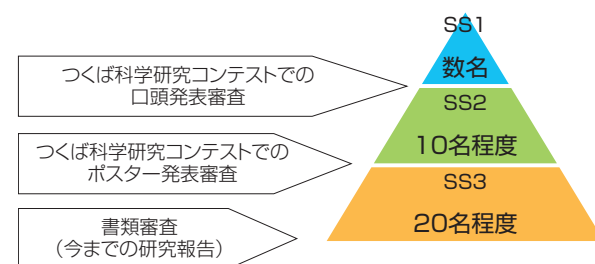
スーパーサイエンスリーグによる未来の科学者の育成 ～卓越した児童・生徒をさらに伸ばす試み～

生物学類長（生命環境系） 濱 健夫

1 概要

自主研究を行っている児童・生徒を全国公募し、教員による書類選抜を行いSS3生とする。それぞれの研究テーマにあった大学教員1名をチューター教員として、大学院生1名をティーチングアシスタントとして専属で張り付け、メーリングリストを使って個別研究支援を行う。年度末につくば科学研究コンテストを開催し、ポスター発表での審査をもとに、半数の生徒をSS2に昇格させる。SS2に昇格した生徒はさらに一年間、研究サポートを続け、口頭発表での審査をもとに数名をSS1に昇格させる。SS1生は高校卒業まで継続的にサポートを続ける。

夏休みには筑波大学菅平高原実験センターにおいてフィールド実習を行い、冬休みには筑波キャンパスにおいて、つくば市内の研究機関見学および大学生レベルの実習を行う。



2 事業成果の概要

- ・日本科学教育学会より「科学教育実践賞」を受賞
- ・「高校生科学技術チャレンジ2013」でSSリーグ生が文部科学大臣賞を受賞
- ・「日本学生科学賞」では中学生の部でSSリーグ生が文部科学大臣賞と環境大臣賞を受賞
- ・広島大学において、SSリーグ生が大学教員、大学院生を対象としたセミナーを行い、JSTニュース等で取り上げられた
- ・これまでのBS/SSリーグの取り組みをまとめ、日本科学教育学会の学会誌・科学教育研究に「次世代の科学技術人材の育成方法について」として、研究

論文を発表した。（科学教育研究, Vol37 no. 4 295-306, 2013.）

3 地方自治体等との連携

2014年3月16日には「第三回つくば科学研究コンテスト兼茨城県高校生科学研究発表会」を筑波大学主催と茨城県共催で行った。昨年に引き続き、小学生から大学生まで約180組もの発表が一同で行われ、500名以上の参加者となった。一般参加者にとっても、SSリーグ生の発表は非常に刺激になったようである。また大学教員から直接自分の研究に対するアドバイスを受けられるとして、高校生および高校教員からの評価は非常に高い。

この取り組みを今後も続けていくことで、SSリーグに参加している児童・生徒のみならず科学研究に興味を持つ一般の児童・生徒たちの発表および大学教員とのディスカッションの場を提供していく。



4 今後の展望

高校生科学技術チャレンジ2013で文部科学大臣賞を受賞したSSリーグ生は、アメリカで開催された国際学生科学技術コンテスト（Intel ISEF2014）においても優秀な成績をおさめた。マスコミ等でSSリーグについて、言及されることも多くなり、筑波大学がSSリーグを行うことの意義は非常に大きくなってきている。

【ポスター】

めざそう未来の科学者 SSリーグ (Super Science League)

SSリーグでは生徒の自主性を重んじ、小学生から高校生までの個人研究に対し、各生徒に合わせた個別指導を行っている

- ・各生徒に教員一名、大学院生TA一名をチューターとして配属
- ・メーリングリストによる継続的かつきめ細やかなサポート
- ・実習により大学レベルの教育体験とにSSリーグ生同士のつながりを形成
- ・研究機関訪問による最先端研究体験

■SSリーグとは？

筑波大学生物学類は平成20年に「未来の科学者養成講座」に採択され、「めざそう未来の生物学者！BSリーグ（Biological Science League）」を始めた。平成23年度からは、対象分野を広げ、物理学類・化学類・地球学類とともに「スーパーサイエンスリーグ～めざそう未来の科学者～」として、未来の科学者の育成を行っている。

■SSリーグのミッション

主体的に疑問を見つけ、研究課題を提案し、自ら考えたアイデア・手法によってその問題を解決する能力を有する独創的な研究者の育成

■SSリーグの特徴

【リーグ制】

三段階の選抜により真に熱意があり、科学的思考力のある生徒を見極めるために、リーグ制をとる。

【個別サポート】

生徒の独自研究テーマに合わせた教員と大学院生を配置し、個別にきめ細やかに研究をサポートする。生徒自身が、家庭や所属学校で主体的に研究を行うことが基本であり、教員や大学院生は主にメーリングリストを使って研究に対するアドバイスを行う。

【合宿形式の実習】

夏と冬に合宿形式の実習を行うことで、リーグ生の横のつながりを醸成。実際の研究施設で実験を行い、教員や大学院生と夕食を共にすることで、研究をすることの理解を深める。

【つくば科学研究コンテスト】

SSリーグの昇格審査を兼ねて、毎年3月に茨城県教育庁と共催で「つくば科学研究コンテスト兼茨城県高校生科学研究発表会」を開催。小学生から高校生まで500名以上が参加。科学研究を行う小学生から大学院生までが一堂に会する場となっている。

■取組の成果

「高校生科学技術チャレンジ2013」でSS1生の林靖人さんが文部科学大臣賞受賞。ISEF2014に派遣決定。日本学生科学賞中学生の部ではSSリーグ生の文部科学大臣賞および環境大臣賞を受賞。このほか、日本国内のコンテストにおいて、多数の受講生が素晴らしい成績を収めており、全国紙やNHK等でもSSリーグの取り組みが紹介されている。



菅平高原実験センターでのフィールド実習



つくばキャンパスでの化学実験



つくば科学研究コンテストの様子

学生によるサイエンスコミュニケーションの実践 ～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT～

生命環境系 助教 Matt Wood

1 概要

■被災地での活動

南相馬市の上真野小学校においてサイエンス講座を開催した。この講座は、科学の体験事業を通して子どもたちの興味と関心を深め、知的好奇心や探究心を育くむことを目的とした南相馬市の事業である。SCOUTのメンバー9名が小学校5・6年生37名と一緒に静電気の実験や分光シートを使った万華鏡作成など科学実験・工作を行った。

■科学遊びラボ

筑波大学と連携している太子町で、小学校低学年を対象にした「夏休み理科おもしろ実験教室」を開催した。怪人にさらわれたこびとを救出するストーリーとし、氷で鍵を作ったり、pHにより色が変わる水溶液を用いて暗号を解読するという実験を行った。参加した子どもたちはもちろん、見学していた保護者の方々からも大変好評であった。またつくば市内の児童館においても、科学遊びラボを複数回、開催した。

■筑波大学キッズユニバーシティ

4月の科学技術週間に行われた筑波大学キッズユニバーシティにおいて科学工作や科学実験を行った。



キッズユニバーシティでの実験

■ワークショップの開催

外部講師を招き、「伝える工夫」に関するワークショップを開催した。「伝える内容は？伝えるターゲットは？ターゲットにどのような影響を与えたいか？」と言ったことをワークシートに明示化し、最終的にどのような構成で「電子書籍化」していくかということ考えた。大学内外からの社会人の参加者と学生が一緒になって行うワークショップとなり、非常に盛り上がった。

2 事業成果の概要

筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ・

スカウト（SCOUT：Science Communication of the University of Tsukuba）として平成21年4月に活動を開始して以来学生メンバーは30名を超えている。

スカウトは、地域に対する社会貢献としての科学あそびラボを多数開催しており、学生たちのサイエンスコミュニケーション実践の場としての意味も非常に大きい。ここ数年サイエンスコミュニケーションの重要性が叫ばれるが、学生が実際に経験する場は少ない。その意味で子どもたちに対して科学を伝える「科学あそびラボ」は学生にとって非常によいトレーニングとなっている。

3 地方自治体等との連携

SCOUTは3カ月に1度程度のペースでつくば市内の児童館で科学実験を開催している。「筑波大学は近いけれども、実際の学生と触れ合う機会はほとんどない」という子どもたちがほとんどであるため、大学生・大学院生と一緒に科学実験をするのをとても楽しんでいる。子どもたちは科学に興味を持つと同時に、筑波大学に対しても親近感を覚えているようである。また保護者および保育園等の指導者の筑波大学に対する信頼度も高くなってきている。また夏休みには筑波大学と協定を結んでいる太子町において、科学実験教室を開催した。この際には「筑波大学の学生さんたちと一緒に実験できたのが嬉しかった」という意見も多く寄せられた。

4 今後の展望

今年度に入って、小学校での科学実験の依頼が相次いでいる。筑波大学内には同じように実験教室をおこなっている学生団体もあるが、教職員がかかわりきちんとした体制で行っている団体はSCOUTのみであり、大学の社会貢献事業への参加は今後も増えていくと思われる。

【ポスター】



SCOUTは2010年4月に「学生がサイエンスコミュニケーションを実践する場をつくる」「科学に対する関心を高める」「科学に興味をもつきっかけをつくる」ということを目標として設立されました。

<http://scout-tsukuba.com>

筑波大学社会貢献プロジェクト



■ 科学遊びラボ

筑波大学と連携している太子町で、小学校低学年を対象にした「夏休み理科おもしろ実験教室」を開催しました。

怪人にさらわれた「こびと」を科学の力を使って救出するというストーリーとし、氷で鍵を作ったり、pHによって色が変わる水溶液を用いて暗号を解きました。子どもたちは、とても楽しそうに実験をしていました。



このほかつくば市内の児童館においても科学遊びラボを複数回開催しました。

■ 筑波大学キッズユニバーシティ

4月の科学技術週間に行われた筑波大学キッズユニバーシティにおいて、色が変わるびんびんごまなどの科学工作を行いました。また植物の種子の中のデンプンを探る実験も行い、小さな子から保護者までたくさんの方々に参加してもらいました。



■ 被災地での活動

11月22日に筑波大学と連携している南相馬市の上真野小学校においてサイエンス講座を開催しました。この講座は、科学の体験事業を通して子どもたちの興味と関心を深め、知的好奇心や探究心を育くむことを目的とした南相馬市の事業です。SCOUTのメンバー9名が講師を務め、上真野小学校5・6年生の37名が参加しました。



静電気の実験や、分光シートを使った万華鏡作成などを行い、SCOUTメンバーと小学生が交流を深めました。

■ ワークショップ

外部講師をお招きして、「伝える工夫」に関するワークショップを開催しました。「伝える内容は？伝えるターゲットは？ターゲットにどのような影響を与えたいか？」と言ったことをワークシートに明示化し、最終的にどのような構成で「電子書籍化」していくかということ考えた。大学内外からの社会人の参加者と学生が一緒になって行うワークショップとなり、非常に盛り上がりました。



大学院生による大学と社会の学術交流の推進

人間総合科学研究科 博士後期課程3年 角谷 雄哉

1 事業の概要

本事業は、研究の最前線に立ち向かう大学院生らによって、筑波大学の特徴である学術研究の成果を社会へ発信し、地域社会と活発に学術交流を行える環境づくりを行うものである。具体的には、学園祭における、「院生プレゼンバトル」の開催、「学内研究企画広報」の実施、つくばエクスプレス駅構内で行う一般向けのサイエンスカフェ「駅前キャンパス」を開催した。

2 内容

「院生プレゼンバトル」：本企画では、研究の最前線で活躍する大学院生らが、自身の研究内容を一般の来場者に対して分かりやすく発表し、面白くて分かりやすいプレゼンに対して聴衆による投票を行う。発表者と聴衆の間の質疑応答も審査項目に含め、大学院生と地域社会の積極的な学術交流を促す企画である。当日は、学内外から多くの来場者があり、来場者と発表者の間で活発な議論が交わされた。



院生プレゼンバトルの様子

「学内研究企画広報」：本学学園祭には、院生プレゼンバトルのみならず、研究所公開から公開講座等まで様々な学術的な企画が存在する。しかしながら、これ

らの学内研究企画は、模擬店等の勢いの陰に隠れ、とりわけ学外からの来場者にとっては内容的にも物理的にも非常にアクセスしづらいことが例年問題視されていた。そこで、我々TGNは学内研究企画のみに焦点を絞った「学内研究企画専用パンフレット」を作成し、学園祭会場で配布した。

「駅前キャンパス」：その他、本事業では、つくばエクスプレス（TX）つくば駅構内で一般向けのサイエンスカフェ、「駅前キャンパス」を実施した。本企画は、大学院生を含む若手研究者が、夏休みにつくば市を訪れる観光客を対象に、最先端の研究内容を分かりやすく発表するものである。本企画は、TXつくば駅の改札の目の前で開催されることが大きな特徴で、つくば市を訪れた観光客に「つくば＝科学の街」を大きく印象付けることができた。

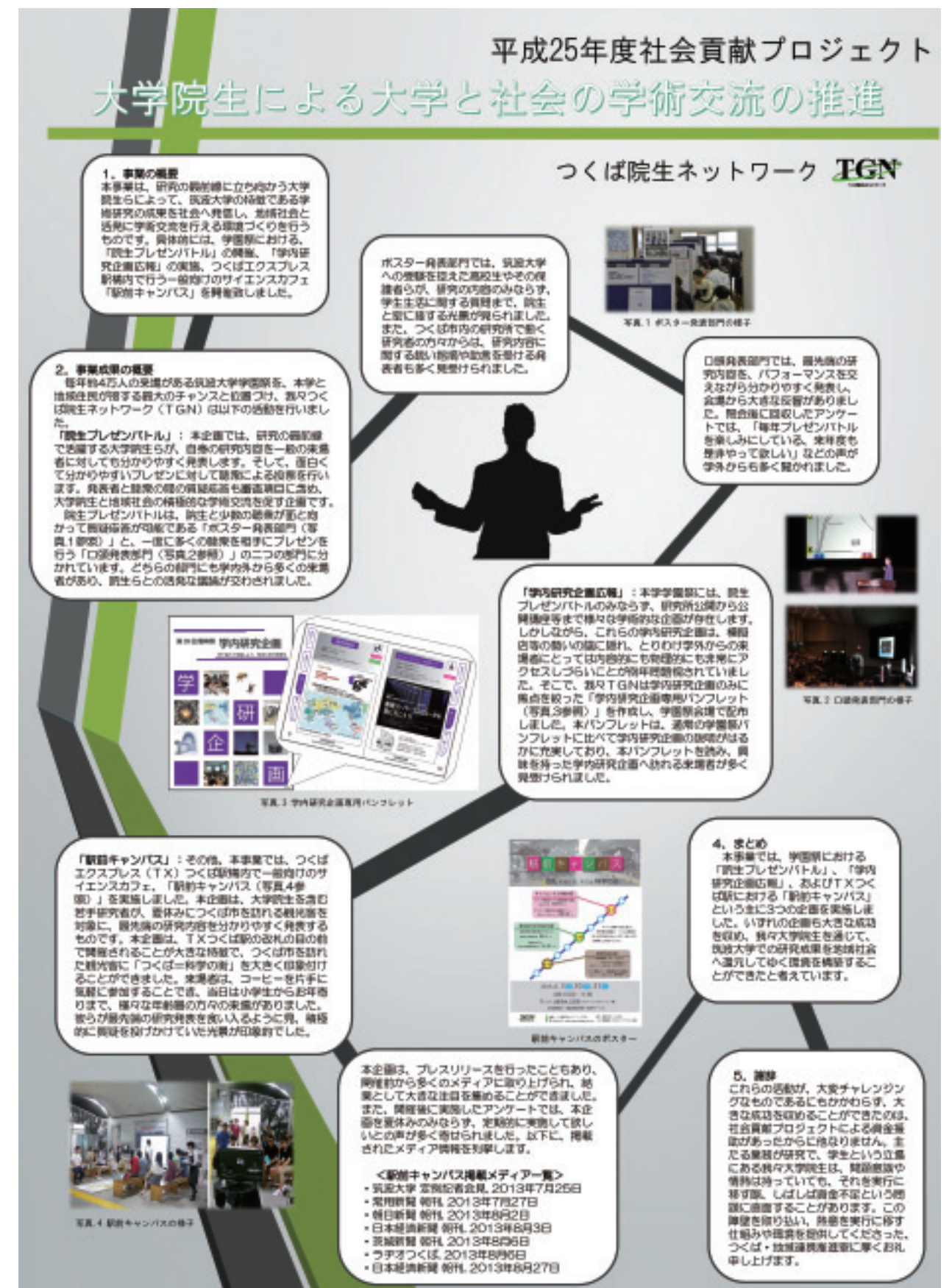


駅前キャンパスの様子

3 まとめ

本事業では、学園祭における「院生プレゼンバトル」、「学内研究企画広報」、およびTXつくば駅における「駅前キャンパス」という主に3つの企画を実施した。いずれの企画も大きな成功を収め、我々大学院生を通じて、筑波大学での研究成果を地域社会へ還元してゆく環境を構築することができたと考えている。

【ポスター】



国際都市つくばの新しい国際化施策 一定住外国人児童に対する「職育」プログラム

人文社会系 准教授 明石 純一

【ポスター】

1 概要

つくば市に居住する外国籍住民、おもに青少年や児童に対する職業教育(以下、職育)支援を実施した。彼(女)らに対して日本語教育やキャリアアッププログラムを提供するとともに、同事業の趣旨と目的を共有するグループ間のネットワーク化を積極的に進め、事業の効果的運営を試みた。2013年度は、大学(教員・学生)、自治体(茨城県、つくば市、常総市)、公立学校、大使館、NPO、企業、支援対象者との連携・協力体制をさらに強化し、「職育」活動を広範囲に展開した。

2 内容

第一に、日本語・日本社会学習コースを、前年度から継続して実施した(隔週日曜日・本学の教室を利用)。本学の学類生・大学院生がそれぞれの得意分野を活かして外国籍児童に教育支援を行うものである。結果的に、本学学生の異文化理解や国際交流の実践経験にもつながった。第二に、キザニア東京における就労体験実習の準備を行った。本件は、連携先の外国人学校のスケジュールに合わせる必要があったため、実際の体験学習は2014年4月にすれ込んでいる。第三に、「筑波大学おもしろふしぎ理科実験・工作隊」(代表:小林正美准教授)とのコラボレーション企画を、外国人児童向けに開催した。

上記三つの活動は、多くの外国籍児童の「学ぶ動機」と「働く意欲(想像力)」を長期的に高めることを目的としたものであり、地域の教育関係者から好評を得ている。

第四に、ワークショップを年度末に開催した(参加者約80名:右写真)。同事業が年度末に行っている恒例イベントであり、今回で四回目を数える。同イベントにはつくば市や茨城県内外から関係者を招き、筑波大学発の同事業を通じて得られた知見や課題の普及に努めている。また同イベントは、同事業を盤石にするために様々なステークホルダーから共感を引き出し、その結果として協力を取り付ける機会として位置づけられている。第五に、事業関係者により構成される連絡協

議会を定期的に関き、運営状況を点検した。時に専門家を招聘し、事業方針と内容に関する第三者評価を試みた。



ワークショップの開催風景(筑波大学1D棟)

3 今後の展望

平成22年度より採択されている同事業・活動への参加者数は、現在に至るまでのべ970名にのぼる。本プロジェクトを通じた大学の社会貢献は高い評価を受け、平成24年には「つくば・地域推進賞特別賞」、平成25年には「つくばエコシティ推進賞」を受賞している。

こうした実績を踏まえ、5年目を迎える平成26年度には、今までの活動を継承、そして安定化を図りつつ、事業を発展させていきたい。具体的には、昨年度に予定しながらも予算・人員上の制約から実現できなかったウェブサイトの構築を進める。同事業の取り組みを随時公開し、その成果と課題を学外に広めることで、多方面からフィードバックを得る。また、こうした事業展開の周知を、自治体、助成団体、企業等から財政支援を受けるための足掛かりとし、事業の持続性を高める。日本の地域社会における外国籍人口の増加は今後とも不可避であることから、大学発地域実践型の国際社会貢献モデルを示すことを引き続き目指していきたい。

平成25年度社会貢献プロジェクト 国際都市つくばの新しい国際化施策 一定住外国人児童に対する「職育」プログラム

明石 純一(人文社会系・准教授)
ウラノ エジソン(人文社会系・准教授)
西井 たか子(人文社会系・教授)
小野 正樹(人文社会系・准教授)

1. 概要

つくば市に居住する外国籍住民、おもに青少年や児童に対する職業教育(以下、職育)支援を実施した。彼(女)らに対して日本語教育やキャリアアッププログラムを提供するとともに、同事業の趣旨と目的を共有するグループ間のネットワーク化を積極的に進め、事業の効果的運営を試みた。2013年度は、大学(教員・学生)、自治体(茨城県、つくば市、常総市)、公立学校、大使館、NPO、企業、支援対象者との連携・協力体制をさらに強化し、「職育」活動を広範囲に展開した。

2. 内容

第一に、日本語・日本社会学習コースを、前年度から継続して実施した(隔週日曜日・本学の教室を利用)。本学の学類生・大学院生がそれぞれの得意分野を活かして外国籍児童に教育支援を行うものである。結果的に、本学学生の異文化理解や国際交流の実践経験にもつながった。第二に、キザニア東京における就労体験実習の準備を行った。第三に、「筑波大学おもしろふしぎ理科実験・工作隊」(代表:小林正美准教授)とのコラボレーション企画を、外国人児童向けに開催した(写真A)。



写真A: 理科実験・工作隊とのコラボ企画の風景
(つくば市にある外国人学校の教室)

この三つの活動は、多くの外国籍児童の「学ぶ動機」と「働く意欲(想像力)」を長期的に高めること

を目的としたものであり、地域の教育関係者から好評を得ている。第四に、同事業が年度末に行っている恒例のワークショップを年度末に開催した(参加者約80名:写真B)。第五に、事業関係者により構成される連絡協議会を定期的に関き、運営状況を点検した。時に専門家を招聘し、事業方針と内容に関する第三者評価を試みた。



写真B: ワークショップの開催風景(筑波大学1D棟)

3. 今後の展望

平成22年度より採択されている同事業・活動への参加者数は、現在に至るまでのべ970名にのぼる。こうした実績を踏まえ、5年目を迎える平成26年度には、今までの活動を継承、そして安定化を図りつつ、事業を発展させていきたい。日本の地域社会における外国籍人口の増加は今後とも不可避であることから、大学発地域実践型の国際社会貢献モデルを示すことを引き続き目指していきたい。

<プログラムを構成する活動>



日本の難民問題への認知度向上・当事者への支援を通じて多文化共生社会の構築

社会・国際学群 国際総合学類 4年 富澤 麻琴

【ポスター】

1 概要

日本の難民問題、とくにその根底に潜んでいる人権問題に、地域市民・学生が一体となって目を向けていくことによって、他を尊重する社会作りに貢献し、多文化共生社会の礎を築いていく。さらに、難民問題を的確に認識するため、牛久市にある東日本入国管理センターへ訪問し、難民当事者との関わりに主眼を置き、互いに尊重し合う関係を構築していく。その中で両者にとって、よりよい社会作りを目指していく。

2 内容

- ① **面会活動** 週に1回入国管理センターを訪問し、被收容者の方々と直接会話することにより彼らの精神的なケアとニーズの把握を行った。また、異文化理解にも繋がった。
- ② **翻訳サポート活動** 難民申請に必要な資料など、日本語で作成しなければならないものがあることがわかり、被收容者の方々からニーズが高く翻訳を無償で実施した。また、学生にとっては和訳の勉強となった。
- ③ **日本語学習サポート活動** 被收容者の方々の多くから、日本語を学習したいというニーズを確認し実施した。オリジナル教材の作成と、今年度は個々のレベルを把握し適切なサポートのためにテストを実施した。
- ④ **情報発信／啓発活動** ブログ、Twitter、Facebook等を用いて、活動の紹介・難民関連情報を公開したことで問題の啓発を行った。今年度HPを新規開設し、より一層情報発信に努めた。
- ⑤ **イベント企画** 難民問題の啓発や認知度向上、相互理解のために難民に関するイベントを以下の5つ企画した。より身近に感じてもらえるように、食文化を通しての企画、写真や当事者を書いてもらった絵画の展示、当事者との交流会を実施した。
 - ・シンポジウム「無国籍って？」
 - ・世界難民の日「あなたからクローバリーゼーしょん」
 - ・学園祭にて「CLOVER Cafe」を出店
 - ・テクノパーク桜まつりにて「Meal for Refugee」を出店

・啓発イベント「あなたの一歩で世界が繋がる～CLOVER 難民交流会 2013～」



難民交流会

これらのイベントにより、学生や地域の方々は難民や難民問題を知ることができ、当事者も日本や日本人を知ることになり、相互理解が促進され、以下の成果をあげた。

- ①難民の人達の日本に対するイメージの改善
- ②学生や地域住民の難民への知識向上
- ③地域と学生の交流促進によって、地域社会の活性化

3 今後の展望

地域との連携によって、イベントに参加してくれた高校生が面会活動にも参加をしてくれるなど輪の広がりを見せている。今後も取り組みを継続的に行うことで、より一層難民問題の認知度向上や異文化理解が促進され、多文化共生社会の構築への一歩になると考えている。また、他の学生団体や外部のNGOの方々とも協力・連携を強化していくことで、地域の活性化へも寄与していけると考える。



世界難民の日 イベント

平成25年社会貢献プロジェクト

課題名: 日本の難民問題への認知度向上・当事者への支援を通じて多文化共生社会の構築

代表者: 富澤麻琴(国際総合学類・学生)

日本の難民問題、とくにその根底に潜んでいる人権問題に、地域市民・学生が一体となって目を向けていくことによって、他を尊重する社会作りに貢献し、多文化共生社会の礎を築いていきます。さらに、難民問題を的確に認識するため、牛久市にある東日本入国管理センターへ訪問し、難民当事者との関わりに主眼を置き、互いに尊重し合う関係を構築していきます。その中で両者にとって、よりよい社会作りを目指していきます。

～実施内容～

①面会活動
週に1回入国管理センターを訪問し、被收容者の方々と直接会話することにより彼らの精神的なケアとニーズの把握を行いました。

②翻訳サポート活動
難民申請に必要な資料など、被收容者の方々から依頼された翻訳を無償で実施しました。

⑤イベント企画
難民問題の啓発や認知度向上、相互理解のために、難民に関するイベントを企画・実施しました。

③日本語学習サポート活動
被收容者の方々の日本語学習のサポートをするため、オリジナル教材の作成と、今年度は個々のレベルを把握し適切なサポートのためにテストを実施しました。

④情報発信/啓発活動
ブログ、Twitter、Facebook等を用いて、活動の紹介・難民関連情報を公開したことで問題の啓発を行いました。今年度HPを新規開設し、より一層情報発信に努めました。

～開催イベント～

学園祭にてCafeを出店
【CLOVER Cafe】

【無国籍って?】
—無国籍問題をテーマとしたシンポジウムを開催

【あなたの一歩で世界が繋がる～CLOVER難民交流会2013～】
—難民の方々との交流イベントを開催

【Meal for Refugee】
—地域のお祭りにて出店、難民の故郷の味をテーマにした料理を販売

—世界難民の日である6月20日に大学構内にて写真展を開催
【あなたからクローバリーゼーしょん】

パーソナルモビリティ・超小型車両活用実験と交通エコ化可能性の検討

システム情報系 准教授 岡本 直久

1 概要

つくば市はロボット特区の指定を受け、セグウェイなどのパーソナルモビリティ（以下 PM）の走行実験が展開され走行安全性の検証等が進められている。今後、これらの PM の普及過程を考慮した場合、個人所有よりもむしろ共同利用による活用方法が必要となる。そこで、本学つくばキャンパスをフィールドに、これらの新しいモビリティの活用と省エネ・環境負荷軽減への貢献の可能性を評価することを目的として、① PM 共同利用システム（シェアシステム）を構築し、②学内運送業務への活用可能性とエコ度の評価を行う。

2 内容

【メンバー】

システム情報系 准教授 岡本 直久
システム情報系 教授 鈴木 勉
つくば市環境生活部 課長 松本 玲子
環境都市推進課
つくば市経済部 主査 大久保剛史
産業振興課

1) 立ち乗り型 PM（セグウェイ）

- ・ロボット特区実証実験推進協議会への参画
- ・実験におけるロボットの歩行者親和性の分析(図1)

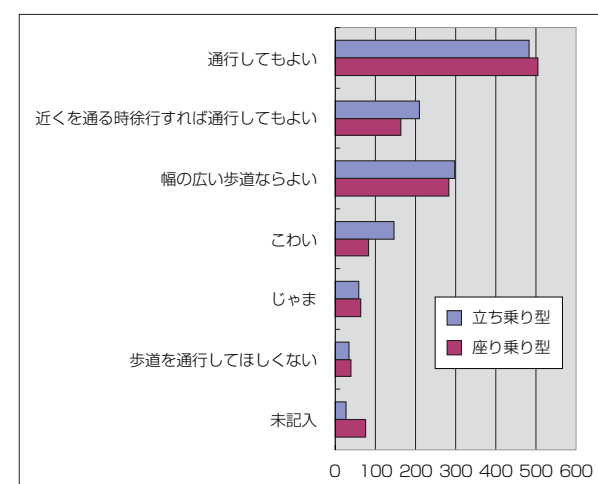


図1 PMに対する意識（つくば市調査より）

- ・想定していた車両が購入できなかった。
- 中古セグウェイを3月末に購入
- 次年度以降実験等を検討



図2 つくば市の道路網

2) 着座型 PM

- ・高齢者交通としての可能性の検討（システム情報系 石田東生教授との共同研究）
- ーモビリティ（外出機会）と生活満足度等との相関
- ー走行可能空間の確認（細街路のネットワークを最大限活用すれば、幹線道路を利用しなくても移動することが十分に可能）

3 今後の展望

- ・ロボット特区、パーソナルモビリティ社会実験への協力・貢献
- ー親和性、活用方法等の検討
- ・つくばモビリティ・交通研究会（つくば市・国総研・筑波大学）による各種交通調査データの収集
- ープローブカー調査データ、プローブパーソン調査

【ポスター】

平成 25 年度社会貢献プロジェクト パーソナルモビリティ・超小型車両活用実験と交通エコ化可能性の検討

代 表：岡本直久（システム情報系）

メンバー：鈴木勉（システム情報系）、松本玲子（つくば市環境生活部環境都市推進課）

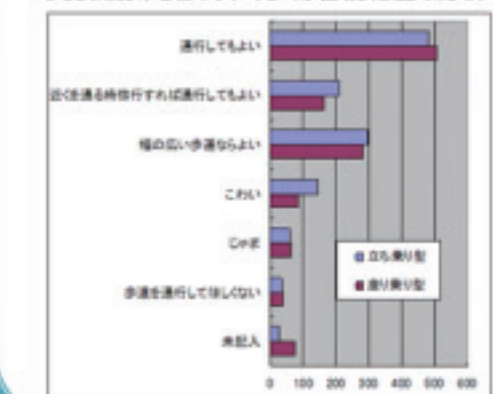
大久保 剛史（つくば市経済部産業振興課）

【概要】つくば市はロボット特区の指定を受け、セグウェイなどのパーソナルモビリティ(以下 PM)の走行実験が展開され走行安全性の検証等が進められている。今後、これらの PM の普及過程を考慮した場合、個人所有よりもむしろ共同利用による活用方法が必要となる。そこで、本学つくばキャンパスをフィールドに、これらの新しいモビリティの活用と省エネ・環境負荷軽減への貢献の可能性を評価することを目的として、①PM 共同利用システム(シェアシステム)を構築し、②学内運送業務への活用可能性とエコ度の評価を行う。



【立ち乗り型 PM(セグウェイ)】

- ・ロボット特区実証実験推進協議会への参画
- ・実験におけるロボットの歩行者親和性の分析



【着座型 PM】

- ・高齢者交通としての可能性の検討（システム情報系 石田東生教授との共同研究）
- ーモビリティ（外出機会）と生活満足度等との相関
- ー走行可能空間の確認（細街路のネットワークを最大限活用すれば、幹線道路を利用しなくても移動することが十分に可能）

【今後の展望】

- ・ロボット特区、パーソナルモビリティ社会実験への協力・貢献
- ー親和性、活用方法等の検討
- ・つくばモビリティ・交通研究会（つくば市・国総研・筑波大学）による各種交通調査データの収集
- ープローブカー調査データ、プローブパーソン調査



環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業

生命環境系 教授 田村 憲司

【ポスター】

1 概要

本プロジェクトは、環境に対する正しい知識と技能を身につけ、地域社会において環境教育や環境保全の指導者となる市民を育成する事業である。つくば市の水・土・生物などの自然環境、文化・都市環境を習得テーマとし、地域特性の高い環境教育を行う。本事業により認定を受けた環境マイスターはつくば市やNPOが実施する各種事業の中核となって活躍し、市民の環境意識向上及び環境保全活動への積極的な参加に努めることになる。



1級認定ポスター発表会の様子（2014. 2. 2）

2 内容

本プロジェクトでは、環境教育を実際に行なっている小中高の教員や環境行政に携わっている市職員、一般市民、各種NGO/NPOに対して、環境教育に必要な基礎的知識や情報、技術を継続的に習得してもらい、つくば市と相補的に効果的な環境教育・事業を展開することを目指している。この過程において、生命環境科学研究科の環境科学専攻と持続環境学専攻を中心とした大学院生が、インターンシップや講義・実習の補助を通して、個々の環境に関する視野を拡大し、グローバルに理解する資質を高めることも期待されている。今年度は、「私たちのまわりの環境化学物質とその動き」をテーマにして事業を実施した。具体的には、以下の日程で、行った。

第1回講義 私たちのまわりの環境と化学物質

（講師：松本宏）6月16日（日）

第2回講義 私たちのまわりの大気環境と物質の動態

（講師：植田宏昭・日下博幸）6月30日（日）

第3回講義 私たちのまわりの環境化学物質と環境リスク

（講師：梶山幹夫）7月7日（日）

第4回講義 私たちのまわりの環境と放射性物質

（講師：末木啓介）8月4日（日）

第5回講義 私たちのまわりの土壌環境と物質の動態

（講師：田村憲司）9月1日（日）

さらに、2014年2月2日（日）には、1級認定ポスター発表会がつくば市庁舎ロビーにおいて開催された。

今年度の成果としては、受講者数は、23名でそのうち、環境マイスター1級認定者が1名、2級認定者が4名、3級認定者が4名となり、認定証授与式を学長出席のもと、平成26年3月3日、学長室にて行われた。



認定証授与式（学長室にて 2014. 3. 3）

3 今後の展望

今後は、すでに環境マイスター1級認定取得者に対するスキルアップ講座（仮称）を行ない、市民の中核になるように、資質向上に努めていく予定である。

平成25年度社会貢献プロジェクト

環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業

田村憲司・松本 宏・植田宏昭・日下博幸・梶山幹夫・末木啓介・隈塚昭温・渡辺 守（生命環境系）

1. 概要

本プロジェクトは、環境に対する正しい知識と技能を身につけ、地域社会において環境教育や環境保全の指導者となる市民を育成する事業である。つくば市の水・土・生物などの自然環境、文化・都市環境を習得テーマとし、地域特性の高い環境教育を行う。本事業により認定を受けた環境マイスターはつくば市やNPOが実施する各種事業の中核となって活躍し、市民の環境意識向上及び環境保全活動への積極的な参加に努めることになる。



1級認定ポスター発表会の様子（2014. 2. 2）

今年度の成果としては、受講者数は23名で、そのうち、環境マイスター1級認定者が1名、2級認定者が4名、3級認定者が4名となり、認定証授与式を学長出席のもと、平成26年3月3日、学長室にて行なわれた。



認定証授与式（学長室にて 2014. 3. 3）

3. 今後の展望

今後は、すでに環境マイスター1級認定取得者に対するスキルアップ講座（仮称）を行ない、1級認定取得者が市民の中核的存在になるように、資質向上に努めていく予定である。

2. 内容

本プロジェクトでは、環境教育を実際に行なっている小中高の教員や環境行政に携わっている市職員、一般市民、各種NGO/NPOに対して、環境教育に必要な基礎的知識や情報、技術を継続的に習得してもらい、つくば市と相補的に効果的な環境教育・事業を展開することを目指している。この過程において、生命環境科学研究科の環境科学専攻と持続環境学専攻を中心とした大学院生が、インターンシップや講義・実習の補助を通して、個々の環境に関する視野を拡大し、グローバルに理解する資質を高めることも期待されている。今年度は、「私たちのまわりの環境化学物質とその動き」をテーマにして事業を実施した。具体的には、以下の日程で行なった。

第1回講義 私たちのまわりの環境と化学物質

（講師：松本 宏）6月16日（日）

第2回講義 私たちのまわりの大気環境と物質の動態

（講師：植田宏昭・日下博幸）6月30日（日）

第3回講義 私たちのまわりの環境化学物質と環境リスク

（講師：梶山幹夫）7月7日（日）

第4回講義 私たちのまわりの環境と放射性物質

（講師：末木啓介）8月4日（日）

第5回講義 私たちのまわりの土壌環境と物質の動態

（講師：田村憲司）9月1日（日）

さらに、2014年2月2日（日）には、1級認定ポスター発表会がつくば市庁舎ロビーにおいて開催された。

「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの実践展開 2013

生命環境系 助教 丸尾 文昭

【ポスター】

1 概要

本事業では、関東平野に典型的にある荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが協働して農村・都市一体型の維持管理ネットワークの構築に成功し、イモリ（絶滅が心配される水生動物）も棲める上質の自然環境を復元しながら、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの総合プログラムを実践している。本事業では、この「いもりの里」（地域の宝／サンクチュアリ）をモデル拠点として活用・維持しながら、周辺地域への拡充計画策定や周辺小学校での科学体験学習を支援する。

2 内容

平成21～23年度の活動を通じ、地域住民サイドからは「いもりの里」の継続活用と維持継承を望む声が、行政サイドからは類似の事業展開を探る声が強かった。そこで平成24年度からは、初期整備を終えた「いもりの里」をモデル拠点として本格的に活用・維持しながら、周辺小学校の科学学習支援や周辺地域への拡充計画策定支援・提言を実践している。

田植え・稲刈り・収穫祭等の様々なイベントや生命環境関連の様々な総合学習プログラムは、いもりの里協議会が中心となって、行政（まちづくり振興部、他）、教育委員会、幼稚園・学校、地域住民の協力も得ながら、年間12回程度開催している。

また、我々は、学術活動（環境・生物相調査および

放流したイモリの追跡と生態観察）を中心に、谷津田・里山で繰り広げるイベント・プログラムに参加・貢献するほか、周辺小学校の科学学習（イモリ飼育体験）の支援、周辺の荒廃した谷津田・里山の環境・生物相基礎調査を行い保全計画策定の支援を行っている。



図2. 稲刈り（9/22）



図3. イモリの学習会 幼生観察（筑波大、3/9）

3 今後の展望

周辺小学校での科学体験学習（イモリ飼育体験ほか）を平成24年度に取手市と計画調整を開始し、平成25年度より、いもりの里近隣の高井小学校から始めた。今後は、イモリネットワーク・ジュニアとして対象校を拡充し、「いもりの里」を生命環境教育の拠点としても発展させていく。また、世界で唯一のアカハライモリ・ストックセンターとしての役割（Nature Protocols 6:593-599, 600-608, 2011ほか）に記載）も益々重要になってくると思われ、平成25年度には、イモリ野外生態観察場を区画化して科学的な追跡調査を容易に行えるように改修し、繁殖環境の整備にも力を入れている。

4 その他

- 1) 新聞掲載（朝日新聞（4/29）、日本農業新聞（4/30）、読売新聞（10/20））
- 2) Tsukuba communications Vol.20（平成25年7月発行）TOPICS 地域貢献「井守も棲める谷津田・里山環境の復元および維持管理ネットワークの構築」
- 3) ポートフォリオはイモリネットワーク（Japan Newt Research Community）のWebページに随時掲載 <http://imori-net.org/>



図1. 星空の下の科学教室 公開講演会（8/4）

平成25年度社会貢献プロジェクト 「いもりの里」をモデル拠点とした 谷津田・里山の復元・維持管理ネットワーク の実践展開2013

丸尾 文昭（生命環境系・助教）、千葉 親文（生命環境系・准教授）、
中谷 敬（生命環境系・教授）、八畑 謙介（生命環境系・講師）

概要:
「いもりの里」事業では、関東平野に典型的な荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが協働して農村・都市一体型の維持管理ネットワークの構築に成功し、イモリ（絶滅が心配される水生動物）も棲める上質の自然環境を復元しながら、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの総合プログラムを実践しています。本事業では、この「いもりの里」（地域の宝／サンクチュアリ）をモデル拠点として活用・維持しながら、周辺地域への拡充計画策定や周辺小学校での科学体験学習を支援しています。

自治体等との連携・実施経費:
取手市役所まちづくり振興部（維持協議会の開催および事業に関する支援・アドバイザー）、取手市里山・谷津田保全「いもりの里」協議会（イベント開催と水田の維持管理）、取手市見沼・上高井地区農村環境改善推進協議会（イベント開催と山林の維持管理）と筑波大学生命環境系イモリ研究グループが連携し事業展開しています。また、イベント開催の広報活動等には、取手市をはじめ近隣自治体の教育委員会の協力を得ています。

いもりの里連絡協議会

平成25年度 年間行事

開催日	内容	参加人数
4月20日	取手いもりの里 谷津田・里山体験 どんぐり観察活動、いもり観察	52名
5月10日	取手いもりの里 谷津田・里山体験 稲刈り体験	66名
6月10日	取手いもりの里 生き物観察会	雨天中止
7月7日	取手いもりの里 生き物観察会	53名
8月4日	取手いもりの里 生き物観察会	71名
8月22日	取手いもりの里 谷津田・里山体験 稲刈り体験	73名
10月20日	取手いもりの里 谷津田・里山体験 稲刈り体験	49名
11月23日	取手いもりの里 生き物観察会 ひまわり・のり花観察会	19名
12月10日	取手いもりの里 谷津田・里山体験 稲刈り体験	23名
1月20日	取手いもりの里 生き物観察会	18名
2月10日	取手いもりの里 生き物観察会	14名
3月9日	イモリの学習会、イモリの飼育体験、イモリ幼生の観察会	22名

1) 新聞掲載（朝日新聞4/29、日本農業新聞4/30、読売新聞10/20）
2) Tsukuba communications Vol.20（平成25年7月発行）TOPICS 地域貢献「井守も棲める谷津田・里山環境の復元および維持管理ネットワークの構築」
3) ポートフォリオはイモリネットワーク（Japan Newt Research Community）のWebページに随時掲載 <http://imori-net.org/>

食と緑の地域活動支援による魅力ある社会の創成

生命環境系（農林技術センター） 教授 林 久喜

【ポスター】

1 概要

食と緑に関する知と技が結集した農林技術センターに勤務する人的資源を活かして、魅力ある社会の創成につなげていくことを目的とした。本年度は従来の様々な活動に加えて、大学病院と連携したダイケアプログラムを新たに運営して、つくば特別支援学校支援と共に、社会への活動支援を実践した。

2 内容

- (1) 雑穀を用いた食育：つくば市立栗原小学校と松代小学校で、5年生を対象に年間を通して実施した。
- (2) 筑波実験植物園における生物多様性区の展示支援：筑波実験植物園の生物多様性区における祖先種の展示に関連して支援した。
- (3) サクラソウ里親制度の推進：サクラソウ里親の会を指導して、5月に見学学習会を実施した。平成26年1月24・25日には、市民、学生、教職員が参加し、のべ79人が参加してサクラソウの芽分け作業を実施した。
- (4) さくらそう展の開催：平成25年4月20日～29日に筑波実験植物園においてさくらそう展を開催し、広く一般に公開した。
- (5) ソバ研究会の開催：第14回ソバ研究会を、平成26年3月15日に、「攻めの農業ーソバでどう攻めるかー」をテーマとして開催し、160名が参加した。
- (6) 酪農教育ファームの実施：高校生のための酪農実習、現職教員のための牧場実習、教員希望者のための牧場実習を開催して、牛とミルクやニワトリと卵について実習教育を行った。
- (7) 大子西中学校における総合学習支援：筑波大学と地域連携協定を締結している茨城県大子町において、大子西中学校3年生の総合学習を一年間にわたって指導すると共に、第15回関東甲信越へき地教育研究大会において研究授業の実施を支援した。
- (8) 科学技術週間における青少年科学教育の推進：4

月20日(土)に、「食と緑の体験教室」を実施し、青少年に対し科学教育の魅力を伝えた。具体的には、そば、押し花、家畜、自動トラクタ、炭の5教室を開催し、210名が参加した。

- (9) 公開講座「自家製チーズ作りを楽しむ」の実施：9月28日・29日、11月2日・3日および12月14日・15日の3回実施した。3回の公開講座合計で47名が参加し、ゴーダ風チーズとモツァレラチーズ作りに取り組んだ。
- (10) 公開講座「庭と農地の安全な管理作業」の実施：5月11日に初めて、企画立案から運営、講師担当、実施まで技術職員のみで公開講座を実施し、募集定員一杯の申込みがあった。
- (11) 筑波大学東日本大震災復興支援プログラム：「広域被災地の農業復興に向けた放射性物質の移行モニタリングと芝生等被覆作物における土壌中の放射性物質の物理的・生物学的除染と減量化」で、多様な農作物の放射性移行係数を明らかにして短期的かつ効果の高い土壌除染方策を検証した。
- (12) 青森県営農大学校におけるIT授業支援：農林技術センターで実施しているSEICAシステムを利用した農産物の生産履歴の開示と販売振興を単元とし、授業を教員が、実習を技術職員が主体で実施した。本活動を通じ、技術職員の教育力向上も達成できた。
- (13) 茨城県立つくば特別支援学校のデュアルシステムを実施し、合計4名の生徒を受け入れた。
- (14) 農業ダイケアプログラム
筑波大学附属大学病院と連携して精神神経科で実施するダイケアプログラムのうち、リワークコースの患者を対象とした「農業ダイケアプログラム」を10月から実施した。

3 今後の展望

平成26年度も引き続き農林技術センターが一体となって関係機関と連携しながら筑波大学社会貢献プロジェクトとして、「食と緑の地域活動支援による魅力ある社会の創成」を実施していく。

平成25年度社会貢献プロジェクト

食と緑の地域活動支援による魅力ある社会の創成

林 久喜(農林技術センター・生命環境系・教授)・米川和範(農林技術センター・技術専門官)
横山和人(農林技術センター・技術専門職員)・齋藤 明(農林技術センター・技術職員)

大学の持つ幅広く深い知力や高い技術力に期待する社会の声は益々高まっています。食と緑に関する知と技が結集した組織である筑波大学農林技術センターに勤務する人的資源を地域活動支援に活かすことで、魅力ある社会の創成につなげていくのが本プロジェクトの目的です。
本プロジェクトは小・中学校における総合学習や営農大学校における専門教育の指導、科学技術週間を通じた青少年育成、国立科学博物館筑波実験植物園活動支援、公開講座や地方自治体等からの要請に基づく地域振興活動並びに研究会の開催などを通じて、食育活動、環境教育活動、教育の場の提供、技術指導、教育プログラム開発など、食と緑に関連した様々な活動を支援・展開しました。



自然観察・昆虫採集を通した環境教育 つくバグ 2013 地域の生き物に目を向けてみよう！

生命環境科学研究科 博士前期課程2年 藏満 司夢

【ポスター】

1 概要

子どもたちにとって自然を体感することは、彼らが将来環境問題や生物多様性問題を考えるために欠かせない経験である。その一方で自然環境、社会環境の変化等の理由によって子どもたちの自然体験活動の機会の減少が問題視されつつある。そこで本課題では、生物学を専攻する学生を中心としたメンバーが茨城県南部に住む子ども達を対象に、昆虫を題材にした自然観察教室等を開催し、自然体験の場を提供した。

2 内容

この活動は生物系の学生を中心に構成される「つくバグ」という学生団体によって行われたもので、2010年度から毎年行っている。4年目となる2013年度は、7月に初めての試みとして、夜間の昆虫観察会を行った。この観察会はつくば市豊里ゆかりの森にご協力いただき、同公園内の雑木林で行った。また、8月には茨城県東海村の市民活動「東海村の環境調べ隊」に協力する形で同村の小中学生約40名を対象に昆虫観察会と昆虫の生態に関する講演を行った。その他、11月の筑波大学学園祭では昆虫の生体、標本、写真の展示を行い、2,000名以上の方にご来場いただいた。活動の詳細は下記の通り。

1) 夜バグ 2013 夜の昆虫観察会

日付 2013年7月20日
場所 つくば市豊里ゆかりの森
内容 ライトトラップ、
樹液に集まる昆虫観察
参加者数 8名

2) 東海村の環境調べ隊 夜の虫観察会

日付 2013年8月3日
場所 茨城県東海村中丸コミュニティーセンター
内容 夜の雑木林探索、
昆虫の生態に関する講演
参加者数 約40名

3) 秋バグ 『大昆虫展 ～日本のむし大集結～』

日付 2013年11月3・4日
場所 筑波大学
内容 昆虫の生体、標本、写真の展示
参加者数 約2,000名



夜の昆虫観察会の様子1



夜の昆虫観察会の様子2

3 今後の展望

つくバグは2013年度で4年目となった。参加者には活動開始当初からのリピーターも多い。参加者には毎回新たな発見をしてもらうためには、活動内容が重複しないように工夫を凝らす必要がある。2013年度は新しい取り組みとして夜間の昆虫観察会を行ったが、今後も新たなアイデアを取り入れ内容を充実させたい。

平成25年度社会貢献プロジェクト
自然観察・昆虫採集を通した環境教育
つくバグ2013 地域の生き物に目を向けてみよう！
藏満司夢、徳嶋賢彰、小長谷達郎、中村篤史、山口芽衣、上原拓也（生命環境科学研究科）、
小嶋佑果、戸原森彦、井戸川直人、矢野更紗、佐藤深作、長澤亮（生命環境学群）

1. はじめに ～つくバグって？～

地球環境への関心が高まりつつある一方で、子どもたちが身近な自然に触れる機会は減りつつある。そんな現状を打破すべく立ち上がった、生物学系の学問を学ぶ十数名の学生で構成される2009年に発足した団体である。活動内容としては、地域の子どもたちを対象とした年に数回の昆虫採集を中心とする自然観察教室や標本作成教室を行っている。またこの活動が、子どもたちが身近な自然に目を向けるきっかけとなることを目指している。



2. 活動報告 2013年度

夜バグ2013 夜の昆虫観察会 ～やさしい夜遊び～



日付 : 2013年7月20日
場所 : つくば市豊里ゆかりの森
参加者 : 8名
内容 : ライトトラップ
樹液に集まる観察



秋バグ2013 大昆虫展 ～日本のむし大集結～



日付 : 2013年11月3・4日
場所 : 筑波大学
来場者 : 2,000名以上
内容 : 昆虫の生体、標本、
写真の展示



夜の虫観察会 with 東海村の環境調べ隊



日付 : 2013年8月3日
場所 : 茨城県東海村中丸コミュニ
ティーセンター
参加者 : 約40名
内容 : 夜の雑木林探索、
昆虫の生態に関する講演

日本生物教育学会での活動報告



日付 : 2014年1月11-12日
場所 : 筑波大学大会館
学会名 : 日本生物教育学会第94回大会
発表題目 : 大学生による昆虫を題材とし
た環境教育

3. 今後の展望

つくバグは2013年度で4年目となった。参加者には活動開始当初からのリピーターも多い。参加者には毎回新たな発見をしてもらうためには、活動内容が重複しないように工夫を凝らす必要がある。2013年度は新しい取り組みとして夜間の昆虫観察会を行ったが、今後も新たなアイデアを取り入れ内容を充実させたい。

4. 謝辞

2013年度のつくバグは、つくばアクションプロジェクトの承認企画として行われました。上記の活動にご協力くださいました、つくば市豊里ゆかりの森の皆さま、東海村の環境調べ隊の林京子様に御礼申し上げます。

観光資源・教育のための筑波山周辺の気候の実態調査

生命環境科学研究科 博士後期課程3年 加藤 隆之

【ポスター】

1 概要

筑波山には、古くから斜面温暖帯をはじめ、数多くの興味深い気象現象が存在している。このような現象は、観光資源としての魅力を持つだけでなく、自然の教科書としても十分に活用可能であると考えられる。しかしながら、筑波山の気候について、地域社会への普及・啓蒙活動はあまり多くはない。本課題では、筑波山における集中観測等による気候の実態調査や解説のためのシミュレーションを実施し、それらの成果を冊子として刊行する。作成した冊子を地域向けに配布することで気象教育や筑波山のPR活動にも貢献するものと考えられる。

2 内容

筑波山特有の気候の調査のため、サーモカメラ等の気象観測機器を使用した集中観測を実施した。

また、専門用語や数式を少なくした上で一般の方に興味を持ってもらうための解説を行うため、各種、実験や数値シミュレーションを行った。それらの成果は12ページのカラー冊子にまとめ、刊行した。(図1参照)



図1：刊行した筑波山の気候についての冊子（抜粋）

つくばを訪問する観光客や筑波山の登山者等に筑波山の独特の気候を知ってもらうため、本冊子を筑波山神社、薬王院、筑波山観光鉄道株式会社、つくば市観光物産課やTXつくば駅の観光案内所、筑波大学計算科学研究センター等に配布を依頼し、内容についての承諾をもらった上で、一般への配布を行っている(図2、3参照)。

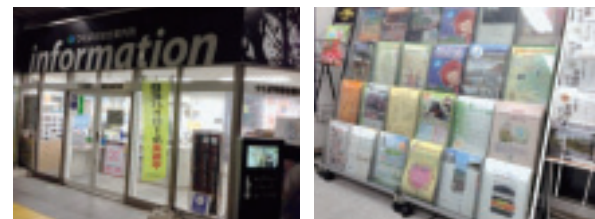


図2：TXつくば駅のつくば市総合案内所にて本冊子が取り扱われている様子（写真右：下段右下）

一方で、筑波山測候所より10分間隔で取得されている気象観測データのリアルタイムアーカイブシステムの開発と一般向け公開HPを開発し、筑波山の観光客やパラグライダーの方等にいつでもリアルタイムデータが閲覧できるような環境を整備した(注)。気象教育や観光向け冊子の配布と同時に、本HPの認知度をより高めるため、筑波大学計算科学研究センターの広報等とも協力し、普及活動を実施している。

注：システム開発については「筑波山プロジェクト」

により実施された。

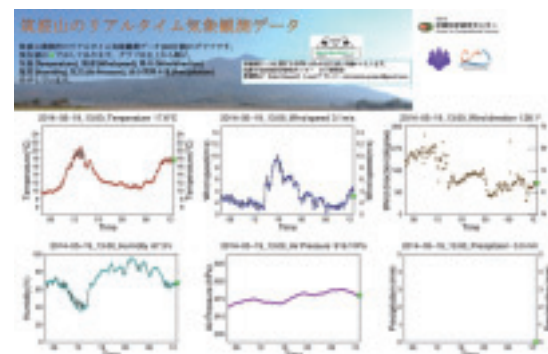


図3：一般向けに公開している筑波山リアルタイムデータのHP

3 今後の展望

今後、2014年7月25日には神奈川県立柏陽高等学校の生徒約50名がサマーキャンプのため、筑波山を訪問し、その際に筑波山測候所の見学会を実施する(現在、本冊子をサマーキャンプ前の事前学習に使用することについて高校側の承諾が得られている。)この見学会では本冊子やリアルタイム観測データを活用した、実践での気象教育を行う予定である。

また、リアルタイムデータの観光案内所におけるモニター設置等についても取り組みたいと考えている。

平成25年度社会貢献プロジェクト

観光資源・教育のための 筑波山周辺の気候の実態調査



代表:加藤 隆之
(生命環境科学研究科博士後期課程3年)

はじめに

筑波山では、古くから斜面温暖帯をはじめ、数多くの大気現象が存在している。このような現象は、観光資源として十分な魅力を持ち、また自然の教科書としても活用可能であると考えられる。しかしながら、地域社会への普及・啓蒙活動はあまり多くない。本課題では、筑波山における集中観測等による気候の実態調査や解析のためのコンピュータによるシミュレーションを実施する。それらの成果を冊子として刊行することで、地域向けの気象教育を行うだけでなく、筑波山のPR活動にも貢献するものと考えられる。

①筑波山における気候の実態調査

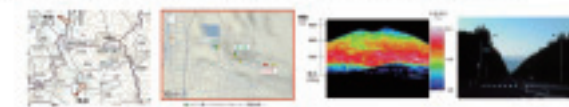


図1：筑波山周辺でのサーモカメラ等の気象観測機器を使用した観測を実施。(斜面温暖帯等の観測に成功)

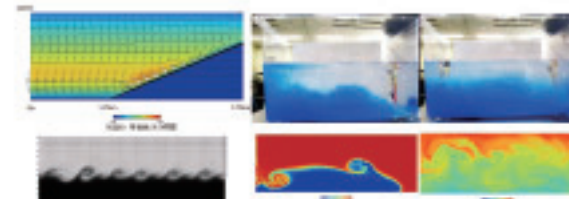


図2：現象理解のための数値シミュレーション等を行い、一般向けの冊子での解説に必要な各種、実験を実施。

③一般向け筑波山測候所リアルタイムデータHPの公開と普及

10分間隔で測候所より送信される気象観測データのリアルタイムアーカイブシステム及び、一般向け公開HPを構築し、筑波山の観光客やパラグライダーの方等にいつでもリアルタイムデータが閲覧できるような環境を整備した(注)

→認知度をより高めるため、筑波大学計算科学研究センターの広報等と協力した上で、気象教育向け冊子の配布と同時に宣伝・普及活動を実施。

注：システム開発については「筑波山プロジェクト」により実施された。

資料：筑波山における野外観測及び数値シミュレーションの研究を行うにあたり、先端学際計算科学の創成・推進・基盤事業（計算科学による先端技術の創成）（筑波山プロジェクト）の支援を受けました。

筑波山リアルタイムデータHP http://ksk.ccs.tsukuba.ac.jp/~mtsukuba/data/mt_tsukuba_realtime.png

②一般向け向け冊子の作成と配布

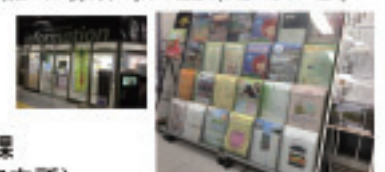
●筑波山の実態調査の成果を一般向けの冊子「知ってる筑波山? ~身近な気象を知ろう~」というタイトルで刊行(1000部印刷:12ページ)



現在、本冊子は下記の場所等に配布している。

- ・筑波山神社
- ・薬王院
- ・筑波山観光鉄道株式会社
- ・つくば市観光物産課
- ・TXつくば駅(総合案内所)
- ・筑波大学計算科学研究センター
- etc...

●その他
・神奈川県立柏陽高校の筑波山サマースクール(2014年7月25日予定)において、現地にて本冊子を使用した解説や筑波山測候所の見学会を実施予定



つくば市の公務員宿舎一斉廃止による 地域・都市への影響分析とまちづくり提案の検討

システム情報系 准教授 藤井さやか

【ポスター】

1 概要

財務省の国家公務員宿舎の削減計画により、つくばでは約3,000戸が2年以内に一斉廃止されることとなり、つくばのアイデンティティの喪失、地域コミュニティの崩壊、乱開発の助長、国家資産売却への悪影響等、地域や都市への多岐に渡る影響が懸念される。本課題では、都市計画を専攻する教員と大学院生が、宿舎一斉廃止が地域・都市に及ぼす影響を多面的に分析し、混乱の緩和策、つくばの特色ある景観や教育環境の維持、今後のまちづくりについて、大学院演習で調査分析を実施し、その成果報告をシンポジウムで発表した。

2 内容

公務員宿舎の一斉廃止は、国、つくば市、居住者、市民にとって、非常にセンシティブな問題であり、かつ早急の検討が必要な問題であった。つくば市はつくば中心市街地再生推進会議を立ち上げ検討を開始し、本課題はこの動きと並行して、大学の中立的立場でこそ実施できる調査分析を担当し、今後のまちづくりのあり方を考える材料を提供することを目的とした。調査分析は、システム情報工学研究科・生命環境科学研究科共通開講科目「都市空間のフィールドワーク演習（以下、FW演習）」の演習課題として、5つのテーマに分かれて調査分析を行った。担当は以下の通り。

- ・全体統括：藤井さやか（システム情報系准教授）・山本幸子（同助教）・大澤義明（同教授）
 - ・建築環境：渡辺俊（システム情報系教授）
 - ・緑地環境：村上暁信（システム情報系准教授）
 - ・住環境：山本幸子・藤井さやか
 - ・防犯：樋野公宏（連携大学院准教授（独）建築研究所）
 - ・人口動向影響：鈴木勉・堤盛人（システム情報系教授）
- 調査はエコプロジェクト推進経費や科研費・基盤研究(A)老朽化する都市インフラの選択集中整備に関する理論・実証研究（代表大澤義明教授）の支援を受けた。

本課題で行った調査分析の結果は、平成25年7月6日に実施したシンポジウム「公務員宿舎のこれまで、

これから～宿舎一斉廃止を考える～」(つくば国際会議場)で発表した。調査結果の概要は以下の通りである。

- ①筑波研究学園都市の建設理念は現在の都市環境にも継承され、居住者は住環境や緑地環境を高く評価している、
- ②老朽化した住宅や設備の評価は低い、
- ③先行して処分・開発された街区の空間変化が著しい、
- ④大規模廃止街区での犯罪不安が高い、
- ⑤大規模な人口移動による小学校・商業施設等への影響が懸念される、
- ⑥同じ地区内での居住継続の希望が高い。



シンポジウム当日の様子

3 今後の展望

本課題と並行して市のつくば中心市街地再生推進会議は平成25年12月11日に最終報告書をまとめ、つくばらしい環境の喪失や価値の低下、コミュニティや学校運営への影響、治安悪化等を懸念し、これまでの環境を継承しつつ更新を図るルールづくりや環境の激変を抑える処分方式の導入等の提言を行っている。今後の処分ではより具体的な課題が出てくることが推測されるが、今後も大学ならではの貢献を続けていきたい。

平成25年度社会貢献プロジェクト

つくば市の公務員宿舎一斉廃止による 地域・都市への影響分析とまちづくり提案の検討

藤井さやか(システム情報系准教授)・山本幸子(同助教)・大澤義明(同教授)・渡辺俊(同教授)・村上暁信(同准教授)・鈴木勉(同教授)・堤盛人(同教授)・樋野公宏(連携大学院准教授・独)建築研究所)

1. プロジェクトの背景

筑波研究学園都市の建設が閣議了解されて50年目を迎えた。「陸の孤島」といわれた筑波研究学園都市には約7700戸の公務員宿舎が建設され、移転生活を支えてきた。建設から約40年の間に宿舎地区では緑豊かな都市景観やユニークな教育環境が育まれ、つくばのアイデンティティ形成に寄与してきたが、近年、建物老朽化や空室増加が進み、6年をかけて約2000戸の宿舎を順次廃止し、まちが更新されつつある。このような中、昨年11月末に財務省は全国の公務員宿舎の削減計画を発表し、つくば市内では追加で約2500戸の宿舎が2年以内に廃止されることになり、つくばのアイデンティティの喪失、地域コミュニティの崩壊、乱開発の助長、国家資産売却への悪影響等、地域や都市への多岐に渡る影響が懸念されている。

2. 取り組み概要

そこで、筑波大学システム情報系社会工学域都市計画分野では、都市計画を専攻する教員と大学院生が、宿舎廃止の影響と問題について検討を行うことになった。まちづくりに関する大学院演習の一環で、廃止対象を含む現存宿舎約5000戸の居住者アンケート調査を含む調査研究を実施し、公務員宿舎の都市計画理念の確認、住宅・住環境評価、先行宿舎廃止地区での変化と問題、今後の人口・施設への影響予測を行った。またこの調査報告と今後のつくばのまちづくりを考えるシンポジウムを開催した。

3. 実施体制

講義及び研究プロジェクトが連携して調査に取り組んだ。

大学院講義	・システム情報工学研究科社会システム工学専攻開講 ・「都市空間のフィールドワーク演習」 ・講義担当者 藤井さやか・山本幸子
科学研究費	・平成25年度科学研究費基盤研究(A) ・「老朽化する都市インフラの選択集中整備に関する理論・実証研究」 ・研究代表者 大澤義明
学内資金	・筑波大学社会貢献プロジェクト／研究代表者 藤井さやか ・エコシティ推進経費事業／研究代表者 鈴木勉

4. シンポジウムと調査結果

本プロジェクトの調査結果を報告するシンポジウムを開催し、専門家・市民・行政担当者など約200名の参加があった。シンポジウムと調査結果の概要は以下の通り。

日時：2013年7月6日(土)13:00-16:30
会場：つくば国際会議場(エポカル)中ホール300
プログラム：
13:00-13:10 挨拶(清水一彦副学長・藤川昌樹社会システム工学専攻長)
13:10-13:20 趣旨説明(藤井さやか)
13:20-13:30 調査概要説明(山本幸子)
13:30-14:25 大学院生による調査成果発表
14:25-14:45 休憩
14:45-16:20 パネルディスカッション「公務員宿舎のこれまで、これから」
・都市計画事務所長・渡辺俊氏
・日本開発環境研究所理事・小堀晴治氏
・リビタ常務取締役・内山博文氏
・筑波大学システム情報系教授・谷口守氏
・コーディネーター：筑波大学システム情報系准教授・藤井さやか
16:20-16:30 まとめとお礼(システム情報系社会工学域長大澤義明)

学生・住民協働によるキャンパスライフの向上をめざして ー筑波大学キャンパス GIS の構築ー

生命環境系 教授 村山 祐司

【ポスター】

1 概要

フィールド調査により、筑波大学キャンパス内の自然環境、景観、交通、建物・施設、騒音や人の流れなど多種多様な地理空間情報の収集に努め、「筑波大学キャンパス GIS」を完成させた。GIS、GPS、RS の技術を統合して、デジタルマップのプラットフォームを構築し、このシステムを当研究室（空間情報科学分野）のサイト上で閲覧可能にした。筑波大学を初めて訪れる外国人研究者や留学生にも資するため、国際版も作成した (<http://land.geo.tsukuba.ac.jp/campusgis/>)。本プロジェクトでは、構築した WebGIS を活用して、学内および隣接地域における景観や騒音、居住環境の問題点・改善点などを探った。学生や地域住民への聞き取り、インタビューなども行い、快適で過ごしやすいサステナブルな環境整備をめざして活動を行った。

2 内容

下記の地理空間情報をフィールドワークにより取得し、データベース化するとともに、GIS の技術を駆使して空間可視化を行った。



取得した主なデータは、ベンチ、ごみ箱、レストラン・コンビニ、落書き、歩道のダメージ、バス停・時刻表、点字ブロック、抜け道、樹木、放射線量、自転車置き場、放置自転車、建物分布、クラブ活動、ジョギングコース、自転車道の傾斜、人の流れ、携帯電話の電波、騒音、水たまり、学生寮の居住人数、ペデ

傾斜度、街灯、街灯の照射範囲、AED、建物案内板、屋外非常用電話、自動販売機、携帯電話基地局、サテライト、避難場所、建物、駐車場、交通事故、建物別受講学生の人数などである。これらのデータは、当研究室で開発した「データ収集システム」を用いて収集した。



毎月、収集したデータを空間可視化し、学生・院生とともにミーティングを開き、キャンパスライフ向上の方策を検討した。フィールドワークで生じた問題点や課題、火災ゴミや不燃ゴミの放置がどのような場所で発生するのか、これらを減らすにはどんな対策が考えられるかなど、忌憚なくディスカッションし、意見を交換した。交通事故の発生要因の解明、街灯の新たな設置場所の提案、避難ルートの設定、キャンパスガイドツアー（一般向け、高校生向け、留学生向け）の構築などを行った。開学前、開学時のキャンパス周辺の土地利用、地形図、空中写真などをオーバーレイする機能も付加し、環境教育にも資するようになった。

3 今後の展望

今後はボランティアベースで、新たなデータを追加し、キャンパス GIS をより高度化することが課題である。時の経過とともにデータが古くなるので、適宜更新していくことが重要である。また利用者からの声に耳を傾けるとともに、彼らの意見を反映したキャンパス GIS にバージョンアップしていくことが大切である。

平成 25 年度社会貢献プロジェクト 学生・住民協働による キャンパスライフの向上をめざして ー筑波大学キャンパス GIS の構築ー 村山祐司¹⁾、橋本 操²⁾、村上将太²⁾、森本健弘³⁾

1) 生命環境系・教授, 2) 生命環境科学研究科・院生, 3) 生命環境系・講師

1. 概要

フィールド調査により、筑波大学キャンパス内の自然環境、景観、交通、建物・施設、騒音や人の流れなど多種多様な地理空間情報の収集に努め、「筑波大学キャンパス GIS」を完成させた。GIS、GPS、RS の技術を統合して、デジタルマップのプラットフォームを構築し、このシステムを当研究室（空間情報科学分野）のサイト上で閲覧可能にした。筑波大学を初めて訪れる外国人研究者や留学生にも資するため、国際版も作成した (<http://land.geo.tsukuba.ac.jp/campusgis/>)。

本プロジェクトでは、構築した WebGIS を活用して、学内および隣接地域における景観や騒音、居住環境の問題点・改善点などを探った。学生や地域住民への聞き取り、インタビューなども行い、快適で過ごしやすいサステナブルな環境整備をめざして活動を行った。

本プロジェクトの推進にあたっては、エコシティ推進グループから経費の支援を受けました。記して感謝します。

2. 内容

フィールドワークにより取得した地理空間情報をデータベース化するとともに、GIS の技術を駆使して空間可視化を行った。さらに、定期的に、収集したデータを空間可視化し、学生・院生とともにミーティングを開き、キャンパスライフ向上の方策を検討した。

■取得した主なデータ

ベンチ、ごみ箱、レストラン・コンビニ、落書き、歩道のダメージ、バス停・時刻表、点字ブロック、抜け道、樹木、放射線量、自転車置き場、放置自転車、建物分布、クラブ活動、ジョギングコース、自転車道の傾斜、人の流れ、携帯電話の電波、騒音、水たまり、学生寮の居住人数、ペデの傾斜度、街灯、街灯の照射範囲、AED、建物案内板、屋外非常用電話、自動販売機、携帯電話基地局、サテライト、避難場所、建物、駐車場、交通事故、建物別受講学生の人数・・・など

■データの収集方法

当研究室で開発した「データ収集システム」を用いて収集した (<http://land.geo.tsukuba.ac.jp/file/152812/analyst/0001>)。

調査者は手持ちのスマートフォンやタブレット端末を持ち、現場でインターネットを通じて WebGIS を立ち上げ、位置情報を取得しながら、調査結果を入力する。

■分析・ディスカッション

収集したデータを空間可視化し、学生・院生とともにミーティングを開き、キャンパスライフ向上の方策を検討した。

＜課題＞

- ・フィールドワークで生じた問題点や課題の検討
- ・火災ゴミや不燃ゴミの放置場所、これらを減らす対策
- ・交通事故の発生要因の解明
- ・街灯の新たな設置場所の提案
- ・避難ルートの設定
- ・キャンパスガイドツアー（一般向け、高校生向け、留学生向け）の構築・・・など

開学前、開学時のキャンパス周辺の土地利用、地形図、空中写真などをオーバーレイする機能もキャンパス GIS に付加し、環境教育にも資するようになった。



3. 今後の展望

今後はボランティアベースで、新たなデータを追加し、キャンパス GIS をより高度化することが課題である。時の経過とともにデータが古くなるので、適宜更新していくことが必要である。また利用者からの声に耳を傾けるとともに、彼らの意見を反映したキャンパス GIS にバージョンアップしていくことが大切である。

筑波大学大学院カウンセリングコース・キャリア・プロジェクト (TCCP) — 中小企業従業員のためのキャリア支援 —

人間系 教授 岡田 昌毅

【ポスター】

1 概要

キャリア支援のニーズは近年の雇用不安を背景にその重要性がますます高まっている。しかしながら、人材育成や支援環境が整備されている大手企業従業員への支援は一定程度整備されてきてはいるものの、中小企業やそこで働く個人への支援体制はほとんどに整備されていないのが現状である。一方で、働く個人を支援する人の質的向上が課題であり、そのための継続的な支援システムの整備と学習機会が求められている。そこで、本プロジェクトでは具体的な活動内容として、以下の3点を中心に施策を推進している。主に中小企業などで働く個人を対象に、①直接的な支援として『キャリア相談室』を運営、②キャリア形成について学び自分のキャリアについて考える機会を提供する『働くことを考えるワークショップ』と、③その個人を支援する立場にある人事や人材育成担当者を対象に『キャリア支援者セミナー』を定期開催し、これらの活動を通して中小企業で働くひとの支援と活性化を目指す。

2 内容

平成 23 ～ 25 年度の活動概要は次の通りである。

講座名	回数	参加者
『働くことを考えるワークショップ』	3	32
『Tsuku-場フォーラム』 (オープニングイベント含む)		
①「カウンセリングの原点と本質」 渡辺三枝子氏 (立教大学) 他4名	1	229
②「組織の中で自分らしくあるために」 金井篤子氏 (名古屋大学教授)	1	124
③「はたらく大人のアイデンティティとキャリア発達」 岡本祐子氏 (広島大学)	1	125
『イブニング・レクチャー』		
①「ポジティブ心理学とキャリア開発」 小玉正博 (筑波大学教授)	2	86
②「働くひとの心理学」 岡田昌毅氏 (筑波大学教授)	1	124
③「人と組織のつながりを見直す」 石隈利紀 (筑波大学副学長) 他2回	3	214
『キャリア・プロフェッショナルを考える会』 (行政、学校、企業の3領域開催)	3	51

- ①直接的な支援として『キャリア相談室』の体制整備を進め、平成 25 年 1 月に新規開設した。
- ②『働くことを考えるワークショップ』を開催した。試行実施(1回)の後、本格実施(2回)し、文京区の広方誌からの応募者を含め、計 32 名が参加した。
- ③『キャリア支援者セミナー』を開催した。「Tsuku-場フォーラム(3回)」、「イブニング・レクチャー(6回)」、「キャリア・プロフェッショナルを考える会(3回)」を開催し、計 985 名が参加した。



3 今後の展望

本当に支援を必要としている人に的確かつ効果的な支援が提供できるよう、さらなる施策の検討・推進が必要である。具体的には、①調整中の中小企業家同友会との連携を具体的な施策として立ち上げる、②『働くひとのためのキャリア相談室』を有効に機能させ、中小企業等で働く個人の悩みの緩和やつまずきの解消、働く意識の向上に繋げる、③『キャリア支援者セミナー』、『キャリア・プロフェッショナルを考える会』など、キャリア支援者にとっての学びと交流の場として定着させることを目指す。

平成 25 年度社会貢献プロジェクト 筑波大学大学院カウンセリングコース・キャリア・プロジェクト(TCCP) — 中小企業従業員のためのキャリア支援 — 岡田昌毅 (人間系教授)

1. 概要

キャリア支援のニーズは近年の雇用不安を背景にその重要性がますます高まっています。しかしながら、人材育成や支援環境が整備されている大手企業従業員への支援は一定程度整備されてきてはいますが、中小企業やそこで働く個人への支援体制はほとんどに整備されていないのが現状です。一方で、働く個人を支援する人の質的向上が課題であり、そのための継続的な支援システムの整備と学習機会が求められています。そこで、本プロジェクトでは具体的な活動内容として、以下の3点を中心に施策を推進しています。主に中小企業などで働く個人を対象に、①直接的な支援として『キャリア相談室』を運営、②キャリア形成について学び自分のキャリアについて考える機会を提供する『働くことを考えるワークショップ』を定期開催、③その個人を支援する立場にある人事や人材育成担当者を対象に『キャリア支援者セミナー』を定期開催しています。これらの活動を通して働くひとの支援と活性化を目指しています。

2. 実施内容及び成果

平成 23～25 年度の活動概要は次の通りです。

講座名	回数	参加者
『働くことを考えるワークショップ』	3	32
『Tsuku-場フォーラム』(オープニングイベントを含む)		
①「カウンセリングの原点と本質」 渡辺三枝子氏 (立教大学) 他4名	1	229
②「組織の中で自分らしくあるために」 金井篤子氏 (名古屋大学教授)	1	124
③「はたらく大人のアイデンティティとキャリア発達」 岡本祐子氏 (広島大学)	1	125
『イブニング・レクチャー』		
①「ポジティブ心理学とキャリア開発」 小玉正博 (筑波大学教授)	2	86
②「働くひとの心理学」 岡田昌毅氏 (筑波大学教授)	1	124
③「人と組織のつながりを見直す」 石隈利紀 (筑波大学副学長) 他2回	3	214
『キャリア・プロフェッショナルを考える会』 (行政、学校、企業の3領域開催)	3	51

働くひとの
キャリアを
応援します!



児童生徒による「わたしの学校・地域」紹介 CM 製作プロジェクト — 大子町からの発信 —

人間系 准教授 上田 孝典

【ポスター】

1 概要

茨城県大子町は、少子化により学校統廃合が進められている。こうした背景のなかで、申請者は地域密着の少人数教育をより豊かにする様々な事業を、大子町教育委員会と連携して進めてきた。本プロジェクトは、連携事業をより充実させる独自の活動として、本学の学生と大子町の小中学生が協働して地域や学校を題材にした CM 製作を行う。その一連の過程を通じて、改めて子どもたちが、自らの暮らす地域に目を向け、自らの通う学校の良さを認識し、郷土への愛着と誇りを培う価値観の再構築と視野の拡大を図ることを目指す。

2 内容

7月25、26、29日にわたり、さはら小学校の児童から希望者約20名を募り実施した。シナリオづくりや絵コンテの制作、撮影、編集を学生と協力しながら行い、4本の映像作品を制作、その後、保護者や教職員に向けて上映会を行った。

2月1、2、8、9、16日、3月1、2日の全7回で、旧上岡小学校の廃校舎を会場に、町内全中学校から希望者を募集し、「みんなの楽校」企画を実施した。「みんなの楽校」はCM制作を行う「ショートフィルムをつくろう」と学習支援を行う「寺子屋」の2本立てとし、それぞれ町内から約10名の中学生の参加を得た。最終日には保護者や教員、地域の住民など約40名を集め、上映会を実施した。

本事業は、大子町教育委員会とさはら小学校からの全面的な理解と協力を得て実施した。また「みんなの楽校」では、参加者募集にあたってチラシの配布など町内全中学校の校長や教職員の協力により実施できた。

講座名	回数	延べ人数
さはらのCMをつくろう！	3	100
みんなの楽校（寺子屋）	7	80
みんなの楽校（ショートフィルムをつくろう）	7	50
みんなの楽校（上映会）	1	40



3 今後の展望

本年度は、天候による実施スケジュールの変更や活動の時間的制約などから、子どもたちよりも学生がする作業が多くなってしまった。今後は、子どもたちの自主性を引き出しつつ、子どものアイデアや発想を活かせる工夫を学生と考えていきたい。また作成した作品の発信についても、ポータルサイトへの掲載も含め検討したい。さらに今年度実施した学校だけでなく、町内全小中学校での実施を展望していく。

平成 25 年度社会貢献プロジェクト

児童生徒による「わたしの学校・地域」紹介 CM 製作プロジェクト

— 大子町からの発信 —



人間系 准教授 上田 孝典
人間系 特任助教 池谷美衣子
人間総合科学研究科 教育学専攻一年 橋田 慈子
人間学群 教育学類四年 近藤 雄介ほか

茨城県大子町は、少子化により学校統廃合が進められている。こうした背景のなかで、地域密着型の少人数教育をより豊かにする事業を、町の小規模校や教育委員会と連携して進めてきた。本プロジェクトでは、筑波大生と大子町の小中学生が協働で地域や学校を題材にした映像 CM を製作する。製作プロセスの中で、子どもたちが自らの暮らす地域を振り返り、その魅力に気づくことをねらいとする。

#さはらのCMをつくろう！

実施期間：2013年7月25日、26日、29日

参加人数：児童・教員・保護者 約20名 学生・教員 8名

全校生徒50名弱の小規模校であるさはら小学校で、地域や学校の魅力をPRするCMを制作しました。色鉛筆をつかってカラフルな絵コンテに仕上げたり、小学生らしい発想が多々見られました。小学校の先生方からは「今回参加した誰もが、楽しみながら自分たちでアイデアを出し合い、練り上げ、撮影や編集を協力して行うなどして、とても素晴らしい作品ができました」との感想をいただきました。

#みんなの楽校プロジェクト

実施期間：2014年2月1、2日、8、9日、16日、3月1、2日

参加人数：学生・教員 9名 中学生約10名・地域住民多数

本プロジェクトは2001年に楽校になった上岡小学校を会場に町内全中学校からの希望者で実施。楽校の活用方法の一つとして大子町の学校をテーマにした映像製作事業「ショートフィルムを作ろう」とマンツーマンでの学習支援事業「寺子屋楽校」の2本立て企画。学生は勉強だけでなく、生徒たちから進路や生活面でのアドバイスにも応じ、相互の交流から距離が縮まった。

<感想>勉強の事をとても分かりやすく教えてくれて分からなかったところも分かりけこう楽しかったです。(中1男子)



↑「ショートフィルムを作ろう」の様子

美術による復興支援 —「夏休みアート・デイキャンプ 2013」の実施

芸術系 教授 太田 圭

【ポスター】

1 概要

本事業は、小中学校および高等学校の図画工作や美術教育の減少化を危機として捉えた本学の芸術分野が行う支援活動の一つである。6回目を迎えた今回は、「制作と鑑賞」を柱にした3プログラムを実施した。特に今回は、創造的復興プロジェクト週末アートスクールと連携して震災被災地（福島県）の小学生を招待した。また障がいのある中学生も受け入れて実施した。

2 内容

(1)実施内容

【アート・デイキャンプ】（絵の制作）

実施日 7月27日(土)、28日(日)

参加者数 2日間で約400名

【アートたんけん隊】（作品鑑賞 / アトリエ見学）

実施日 7月27日(土)、28日(日)

参加者数 両日とも15名

【アート・デイキャンプ2013展】（コンクール展）

期間 8月21日(水)～8月29日(木)

会場 筑波大学総合交流会館多目的ホール

審査委員長 山本文彦（洋画家、本学名誉教授）、

審査員 玉川信一（洋画家、芸術系長、教授）、
藤田志朗（日本画家、芸術専門学群副学
群長、芸術系社会貢献推進室長、教授）

【アート・デイキャンプ2013展 授賞式】

実施日 8月21日(水)

会場 筑波大学大学会館国際会議室

【アート・デイキャンプ2013展 受賞作品展】

期間 9月10日(火)～19日(木)

会場 つくば市役所1階情報コーナー

(2)成果

小中高生の参加者は年々増加し、平成25年度は2日間で400名を越えた。コンクール展には328点の応募があり、「つくば市長賞」が新設された。また、昨年度の実施に対して「つくば・地域連携推進賞2013優秀賞」、の受賞、平成25年度学群教育に係る学長表彰、参加者からの本学芸術専門学群合格者誕生等、6年間の継続的な実施によって、本事業の評価は高まりつつある。

(3)地方自治体との連携等

運営と経費の両面において、つくば文化振興財団およびつくば市教育委員会と連携している。

3 今後の展望

現代社会では「こころの問題」が話題になっているが、子どもの頃からの図画工作や美術、音楽などによる「情操教育」の減少が遠因ではないだろうか。毎年の実施を望む保護者や地域の声に応えつつ、将来を担う子どもたちの人間形成の一助となれればと願っている。

平成25年度社会貢献プロジェクト

美術による復興支援 夏休みアート・デイキャンプ2013の実施

代表者：太田 圭（芸術系・教授）

分担者：石崎和宏（芸術系・教授） 玉川信一（芸術系・教授） 内藤定壽（芸術系・教授）
藤田志朗（芸術系・教授） 田島直樹（芸術系・准教授） 福満正志郎（芸術系・准教授）
仏山輝美（芸術系・准教授） 程塚敏明（芸術系・准教授） 山本浩之（芸術系・准教授）
協力者：小野裕子（芸術系・助教） 宮城正作（芸術系・特任研究員） 大学院学生 芸術専門学群学生

背景：小学校の図画工作、中学校の美術、高等学校の芸術（美術）では、授業時間数の関係から、長い時間をかけて物を観て描くことや、実物の作品を鑑賞するといった、表現力、創造力、感受性などを育む経験をするのが少なくなっている。この現状を危機として捉え、微力ながらも美術教育を支援する事業として平成20年から続けている。

目的：筑波大学で芸術に関わる人的資産（教員・学生）と、芸術資産（学内の展示作品）を活用した「制作と鑑賞」のプログラムを通して、創造的で自由な心を持つ子どもたちの人間形成に寄与するため。特に今回は、震災復興地の子どもへの支援と交流を踏まえて実施した。

実施内容：本事業は、「制作」と「鑑賞」のキーワードに基づいた3つのプログラムで構成され、つくば市、つくば文化振興財団、本学芸術系社会貢献推進室が主催し、つくば市教育委員会が後援した。

①「アート・デイキャンプ2013」(7月27日、28日)
体芸エリア5C棟大石膏室を主会場とした作品制作プログラムで、ダビデやニケなどの大型石膏像のほか、鉢植え植物、季節の果物などの静物をモチーフとして写生した。特に今回は、「筑波大学創造的復興プロジェクト週末アートスクール」と連携し、震災被災地（福島県）の小学生を受け入れた。また、障がいのある子どもも受け入れた。

②「アート・デイキャンプ2013展」(8月21日～8月29日)
アート・デイキャンプで制作した作品によるコンクール形式の展示会を開催し、応募作品の中から優秀作品を表彰した（審査委員長：山本文彦筑波大学名誉教授・洋画家。審査員：芸術系教員2名）。小中高生による作品と特別参加の保護者や未就学児の作品328点を本学総合交流会館多目的ホールに展示した。（内訳：小学生259点、中学生26点、高校生10点、その他未就学児と保護者43点）

③「アートたんけん隊」(7月27日、28日)
本学の屋内外に展示されている芸術作品を鑑賞するプログラムで、2日間で30名が大学院生が用意した「鑑賞探検ツール」（目隠し鑑賞クイズ、なりきり鑑賞）や、アトリエ見学を行った。

成果：①参加者は年々増加し、今回は過去最高の参加者！
②コンクール展で「つくば市長賞」新設！、昨年に続いて受賞作品の一部がつくば市役所1階ロビーに展示！
③平成25年4月、参加者の中から本学芸術専門学群学生が誕生！
④平成25年7月、「第2回社会貢献報告会」において、「つくば・地域連携推進賞2013優秀賞」を受賞！
⑤平成26年3月、「平成25年度学群教育に係る学長表彰」として受賞！

現代社会では「こころの問題」が話題になっているが、子どもの頃からの図画工作や美術、音楽等による「情操教育」の減少が遠因ではないだろうか。本事業の真の成果が出るのは先のことであるが、毎年の実施を望む参加者や保護者、地域の声に応えつつ、将来を担う子どもたちの人間形成の一助になればと願っている。



5C棟の大石膏室での制作風景



アートたんけん隊の様子



5C棟大石膏室での制作の様子



アートたんけん隊の様子

高校生アトラライター大賞：芸術による高大連携事業

芸術系 教授 岡崎 昭夫・齊藤 泰嘉・直江 俊雄

1 概要

高校生によるアートに関するエッセイのコンテスト、第5回高校生アトラライター大賞を開催し、優秀作品を顕彰することによって、言語活動を通じた芸術教育の振興という観点から我が国の教育に貢献する。本学大学院生・学群生が学生選考委員として運営に参加し、本学発の芸術支援事業として、全国高等学校との連携を深める。



表彰式・学長あいさつ
(2014年2月15日、本学5C棟)

2 内容

実施経過

2013年4月

第5回高校生アトラライター大賞募集開始

2013年10月15日

受け付け終了

応募総数 1,023 編

2013年10月

第一次選考を行い、100 編を選出

2013年11月

第二次選考を行い、24 編を選出

2013年12月

最終選考会議を開催し、第二次選考通過者

から大賞、優秀賞、学校賞を決定

2014年2月15日

表彰式を開催

回数	実施年度	応募総数	大賞	優秀賞	学校賞
第1回	H17	171	3	24	7
第2回	H19	214	3	23	7
第3回	H21	371	4	24	9
第4回	H23	491	3	19	7
第5回	H25	1,023	3	21	7

成果

前回開催時の2倍を超える応募があり、全国の高等学校との教育を通じた連携を、大きく前進させることができた。

応募方法を多様化し、様々な学校からの参加を促す取り組みを行った。これらの成果を、公式ホームページ (www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~awa/) を通して発信し続けている。

本学教育との関連では、新設した専門科目「芸術支援学演習」等を通して、学生が一層積極的にコンテストの運営に参加する中で、学習を深めることができた。

外部連携

従来からの文部科学省後援に加えて、全国高等学校美術工芸教育研究会の後援を今回初めて導入し、同研究会を通じた広報など、実質的な連携を拡げることができた。

3 今後の展望

参加した全国の高等学校教員から毎回強く要望が聞かれる「毎年開催」(現在までは隔年開催)の実現に向けて、こうした社会からの期待の高まりに応える体制をどのようにつくっていくか、真剣に検討すべき時期に来ていると考える。

【ポスター】

平成25年度社会貢献プロジェクト

高校生アトラライター大賞 芸術による高大連携事業

代表者 岡崎 昭夫 (芸術系・教授)

分担者 齊藤 泰嘉 (芸術系・教授)

直江 俊雄 (芸術系・教授)



学生による選考会議



表彰式
学長あいさつ



表彰式
受賞作品展示



表彰式
記念撮影
担当教員・指導教員
選考委員代表



1. 概要

高校生によるアートに関するエッセイのコンテスト、第5回高校生アトラライター大賞を開催し、優秀作品を顕彰することによって、言語活動を通じた芸術教育の振興という観点から我が国の教育に貢献する。本学大学院生・学群生が学生選考委員として運営に参加し、本学発の芸術支援事業として、全国高等学校との連携を深める。

2. 実施経過

2013年4月 第5回高校生アトラライター大賞募集開始。
2013年10月15日 受け付け終了。応募総数1023編。
2013年10月 第一次選考を行い、100編を選出。
2013年11月 第二次選考を行い、24編を選出。
2013年12月 最終選考会議を開催し、大賞、優秀賞、学校賞を決定。
2014年2月15日 表彰式を開催。

3. 成果

回数	実施年度	応募総数	大賞	優秀賞	学校賞
第1回	平成17年度	171編	3編	24編	7校
第2回	平成19年度	214編	3編	23編	7校
第3回	平成21年度	371編	4編	24編	9校
第4回	平成23年度	491編	3編	19編	7校
第5回	平成25年度	1023編	3編	21編	7校

前回開催時の2倍を超える応募があり、全国の高等学校との教育を通じた連携を、大きく前進させることができた。

応募方法を多様化し、様々な学校からの参加を促す取り組みを行った。これらの成果を、公式ホームページ (www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~awa/) を通して発信し続けている。

本学教育との関連では、新設した専門科目「芸術支援学演習」等を通して、学生が一層積極的にコンテストの運営に参加する中で、学習を深めることができた。

外部連携としては、従来からの文部科学省後援に加えて、全国高等学校美術工芸教育研究会の後援を今回初めて導入し、同研究会を通じた広報など、実質的な連携を拡げることができた。

4. 今後の展望

参加した全国の高等学校教員から毎回強く要望が聞かれる「毎年開催」(現在までは隔年開催)の実現に向けて、こうした社会からの期待の高まりに応える体制をどのようにつくっていくか、真剣に検討すべき時期に来ていると考える。

伊豆半島ジオパーク構想における 地域住民参加型自然体験活動の確立

生命環境系 助教 和田 茂樹

【ポスター】

1 概要

観光業の低迷に喘いでいる伊豆地域は、その状況打破に向けて世界ジオパークへの登録を目指している。世界ジオパークは、UNESCO によって公的に認定されるもので、自然と人間活動の共存・発展が不可欠である。本プロジェクトでは、新しい観光の形として注目されている自然体験を、地域住民が主導的に実施できるようサポートし、観光客の増加とそれに伴う地域経済の活性化を目指すものである。

2 内容

本プロジェクトでは、海と山の両方が豊かな伊豆という場所を生かし、6月から3月まで月1回の頻度でイベントを実施した。特に、「伊豆半島ジオパーク推進協議会」、「伊豆海洋自然塾」、「下田海中水族館」と継続的に連携し、伊豆半島の特異な地形や生物相を基にして、様々な活動を実施した。これらの活動は26年度に実施される「世界ジオパーク」への認定における産学民連携の活動実績となっている。

- 1) 塩とジオの話：ジオパーク推進協議会の鈴木雄介氏の講演と、塩づくり職人による海塩作り体験を行った。
- 2) 稲生沢川源流探し：下田の主要河川である稲生沢川の源流へ登り、海と山の繋がりを体験した。
- 3) 海と山のジオ合宿：南伊豆の子浦で合宿を行い、シーカヤック体験や海岸地形のジオツアーを実施した。
- 4) 水族館磯観察：下田海中水族館の協力のもと、磯の生物を使った水槽レイアウト法を講義していただいた。
- 5) 海からジオツアー：伊豆半島有数の景勝地である堂ヶ島で、船舶を貸し切って海から地形を観察した。
- 6) フナムシ講座：海岸常在動物であるフナムシについて、宮本洋志博士に講演いただき、身近な生物の不思議を体験した。
- 7) 爪木崎ジオウォーキング：爪木崎の依磯を中心に、

解説を交えながらのウォーキングを行った。

- 8) 海の仕組みとサンゴの話：筑波大学出張講義として、和田茂樹助教とアゴスティーニシルバン助教の2名で、海洋大循環やサンゴについて講義した。
- 9) 冬の磯観察：水族館の磯を冬に再度訪れ、季節に違いに応じた自然の移り変わりを体験した。

講座名	実施日	参加人数(人)
塩とジオの話	6/30	44
稲生沢川源流探し	7/14	32
海と山のジオ合宿	8/24-25	18
水族館磯観察	9/21	28
海からジオツアー	10/20	15
フナムシ講座	11/24	31
爪木崎ジオウォーキング	12/15	11
海の仕組みとサンゴの話	1/19	17
冬の磯観察	2/1	10
閉講式	3/16	23



稲生沢川の源流
わさび田が広がっている



伊豆半島ジオパーク推進
協議会鈴木雄介氏の講演

3 今後の展望

本プロジェクトのイベントでは、専門家による講義実習だけでなく、一部のイベント（海と山のジオ合宿、海からジオツアー、爪木崎ジオウォーキング）では、市民が自ら講師となり、イベントを完遂させた。今後、これらの活動が自立的な自然体験活動を活発化させていくことと考えられる。

平成25年度社会貢献プロジェクト

伊豆半島ジオパーク構想における 地域住民参加型自然体験活動の確立

和田茂樹(生命環境系・助教(下田臨海実験センター))
伊豆半島ジオパーク推進協議会(伊東市)、伊豆海洋自然塾(下田市)



【はじめに】

観光業の低迷に喘いでいる伊豆地域は、その状況打破に向けて世界ジオパークへの登録を目指している。世界ジオパークは、UNESCOによって公的に認定されるもので、自然と人間活動の共存・発展がカギとなる。本プロジェクトでは、新たな観光の形として注目されている自然体験活動を、地域住民が主導的に実施できるようサポートし、観光客の増加とそれに伴う地域経済の活性化を目標とする。

イベント名	人数
塩とジオの話	40人
稲生沢川源流探し	32人
海と山のジオ合宿	18人
水族館磯観察	28人
海からジオツアー	15人
フナムシ講座	31人
爪木崎ジオウォーキング	11人
海の仕組みとサンゴの話	17人
冬の磯観察	10人
閉講式	23人



塩とジオの話
鈴木雄介氏による
海の水の話



源流探し
源流の林とわさび田



ジオ合宿
スノーケリング体験
左は講師を務める市民



水槽レイアウト講座
水族館の都築氏による
生物の見せ方講座

【内容と今後の展望】

一年を通して、伊豆地域特有の山と海の両方の自然を生かしたイベントを実施した。この中で、一部のイベント(「海と山のジオ合宿」、「海からジオツアー」、「爪木崎ジオウォーキング」)は、他のイベントを受講した市民が自ら講師となり、自立的な自然体験活動を完遂することに成功した。これらの活動は、26年度に実施される「世界ジオパーク」認定への挑戦において、産学民連携の活動実績の一つとして貢献している。

地域への発信 ー『筑駒人材バンク』を生かした地域貢献ー

附属駒場中・高等学校 副校長 大野 新

1 概要

本校が筑波大学の附属学校として培い育てきた学校文化を、地域の方々の生涯学習に資することを目指し、地域住民を対象とした公開講演会2回と、公開講座からなる「第7回筑駒アカデミア」を開催した。

2 内容

・公開講演会の講師には、筑波大学および本校 OB など豊富な人材を活用し、地域住民のニーズに答えることを考えて講演内容を設定している。

(1) 2013年9月14日

東京大学准教授 川島真氏（本校卒業生）
「日本と中国、そして台湾」

(2) 2013年12月14日

筑波大学教授 鈴木石根氏
「藻から燃料をつくる」



・公開講座は、本校教員と生徒が講師となり、地域の小学生から社会人までを対象にした内容を設定している。今年度は以下の11講座を開講した。

	講座名
1	点と線で生物を描く
2	ワインから見える世界史 その1
3	Brush Up Your English ー英語でコミュニケーション・入門編ー
4	はじめよう！ ジャグリング
5	人と人をつなぐブラインドサッカー
6	将棋を楽しむ
7	筑駒LBC（3・1・1 弁当箱法実習）
8	環境地図をつくろう
9	いろいろな多面体をつくろう
10	高校生といっしょに実験してみよう
11	化石のレプリカを作ろう

講座1～3は社会人対象講座、講座7、8は親子参加型講座



公開講座「点と線で生物を描く」

・公開講演会と公開講座の参加者の合計は約420名であった。アンケートから2回以上参加されたリピーターが半数以上であることがわかった。中には10回以上も参加している方もおり、この事業が地域の方々に認知され、好評をいただいていることが確認できた。

3 地方自治体等との連携

本校が2つの区の境界上に位置するため、世田谷区と目黒区の両区のエデュケーション委員会と連携しており、世田谷区教委から共催、目黒区教委から後援を頂いている。

また目黒区教委から区教委主催講座のコーディネートを求められ、2009年度から毎年実施している。

4 今後の展望

アンケートでは、事業の継続を望む意見が多く寄せられており、今後も継続実施することで、大学が果たす役割の一端を筑波大学の附属学校として担い、筑波大学および本校が生み出す教育成果を、地元に対して還元していくことができると考える。

公開講座の中には、生徒も講師役として主体的に関わっているものがあり、「教える」ことが自身の学びとなることに生徒が気付く格好の場ともなっている。

【ポスター】

平成25年度社会貢献プロジェクト

地域への発信 ー『筑駒人材バンク』を生かした地域貢献ー

附属駒場中学校・高等学校 地域貢献プロジェクトチーム
代表者：大野 新（附属駒場中学校・副校長）

概要

目的
附属学校として60余年培った学校文化
→ 本校関係者による公開講座などの形で
地元（世田谷区・目黒区）へ恩返しする

経緯
2007年「筑駒人材バンク」発足、社会貢献プロジェクト採択、以来7年連続で実施

実施体制・地方自治体との連携

支援・共催・後援団体

- ・ 本学（社会貢献プロジェクト、附属学校教育局）
- ・ 地元区教委（世田谷区教委、目黒区教委）
- ・ 本校同窓会・若葉会（人材バンク事業委員会）

実施内容

公開講演会：講師…本学教員、本校卒業生
A 2013年9月14日実施
東京大学准教授 川島真氏（本校卒業生）
「日本と中国、そして台湾ー歴史から見る現在・未来」

B 2013年12月14日
筑波大学教授 鈴木石根氏
「藻から燃料をつくるー微細藻類を活用したバイオマス生産への取り組みー」

公開講座：講師…本校教員・生徒
2014年3月29日実施、11講座を開講

いろいろな多面体をつくろう

点と線で生物を描く

筑駒LBC・1・1弁当箱法実習 化石のレプリカをつくろう

参加者数
公開講演会…206名（AB合計）
公開講座…216名
◎リピーターの増加 ← 地元への定着

展望・今後の課題

- ・継続実施の強い要望（受講者アンケート・行政）
→ 財源の確保が急がれる
- ・生徒が講師役 = 生徒の「学びの場」に
→ さらなる拡充も視野に入りたい

文京ラグビースクール活動支援 ～小学生へのラグビー普及活動の一環として～

附属高等学校 教諭 山田 研也

1 概要

文京区周辺の小中学生を対象に、2013年4月より開校する「文京ラグビースクール」の活動を、本学ラグビー部、附属高校ラグビー部およびそのOB会により支援する。東京都内でのグラウンド確保が難しい中、文京区内に広大な敷地を有する附属学校のグラウンド及び日本選手権優勝の実績を誇る本学ラグビー部の人材を有効に活用し、この地区におけるラグビーの普及に貢献することを目的とする。

2 内容

【活動支援体制】

- 運営** 文京ラグビースクール事務局（理事会）
全10名－理事長、副理事長3名、理事6名
- 指導** 筑波大学附属高校OB、小石川高校OB、
東京大学OB、日本IBMOB、保護者他

【活動実績】

1. 練習（のべ1,097名）

回数	日程	場所	参加数
1	3月31日(日)	筑波大学附属高校	22
2	4月5日(金)	小石川運動場	12
3	4月14日(日)	筑波大学附属高校	29
4	5月3日(祝)	小石川運動場	35
5	5月5日(日)	筑波大学附属高校	32
6	5月19日(日)	筑波大学附属高校	50
7	6月9日(日)	筑波大学附属高校	36
8	6月23日(日)	筑波大学附属高校	31
9	7月7日(日)	筑波大学附属高校	33
10	7月21日(日)	筑波大学附属高校	33
11	7月27日(土)	辰巳の森海浜公園	15
12	8月4日(日)	辰巳の森海浜公園	15
13	8月25日(日)	筑波大学附属高校	27
14	9月7日(土)	小石川運動場	32
15	9月8日(日)	筑波大学附属高校	32
16	9月22日(日)	筑波大学附属高校	30
17	9月29日(日)	筑波大学附属高校	33
18	10月13日(日)	筑波大学附属高校	30
19	10月27日(日)	筑波大学附属高校	34

20	11月4日(日)	小石川運動場	38
21	11月10日(日)	筑波大学附属高校	36
22	11月24日(日)	辰巳の森海浜公園	31
23	11月30日(土)	小石川運動場	31
24	12月8日(日)	小石川運動場	41
25	12月15日(日)	筑波大学附属高校	40
26	12月23日(日)	小石川運動場	38
27	12月29日(日)	筑波大学附属高校	22
28	1月5日(日)	小石川運動場	26
29	1月19日(日)	筑波大学附属高校	28
30	1月26日(日)	筑波大学附属高校	41
31	2月2日(日)	辰巳の森海浜公園	28
32	2月23日(日)	筑波大学附属高校	41
33	3月9日(日)	世田谷区ラグビー場	21
34	3月23日(日)	筑波大学附属高校	44
35	3月29日(日)	小石川運動場	30

2. 夏合宿 2013年7月13－15日（於：菅平）
12名が参加
3. 秩父宮ラグビー場／国立競技場観戦ツアー 4回実施
（6月15日、6月23日、9月21日、12月1日）



【生徒参加状況】低学年を中心に42名が正式入校
幼児クラスは公開型で実施し、毎回約10名が参加

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1
人数	8	10	13	4	3	2	2

3 今後の展望

文京区で初めてのラグビースクールを開校したが、毎回30名を超える参加者を得て「ラグビーを通じたこどもの健全育成」の場を提供することができた。子ども達の成長に合わせ、練習内容の質を高めていくとともに、参加人数の拡大、練習環境の改善を図っていく。

【ポスター】

平成25年度社会貢献プロジェクト

文京ラグビースクール活動支援 ～小学生へのラグビー普及活動の一環として～

代表者：山田研也（附属高等学校教諭）

分担者：古川拓生（体育系講師、筑波大学ラグビー部監督）、鎌倉芳信（附属高等学校教諭）、鈴木亨（附属高等学校教諭）

文京ラグビースクール活動報告

2013年4月開校

【体制】

運営：文京ラグビースクール事務局(理事会) 全10名 - 理事長、副理事長3名、理事6名
指導：日本IBM OB、筑波大附属高校OB、小石川高校OB、東大OB、保護者の皆さん他

【活動実績】

1. 練習 毎回30-50名が参加 (のべ1,097名)
2013年4月～3月 全35回 (荒天による中止4回)
- ・筑波大学附属高校グラウンド 21回
 - ・小石川運動場(人工芝) 9回
 - ・辰巳の森海浜公園ラグビー場(天然芝) 4回
 - ・世田谷区ラグビー場 1回
2. 夏合宿 2013年7月13～15日(於：菅平) 12名が参加
3. 秩父宮ラグビー場／国立競技場観戦ツアー 4回実施
(6月15日、6月23日、9月21日、12月1日)
4. その他イベント
12月29日 忘年親子運動会、3月23日 納会



【生徒参加状況】

低学年を中心に42名が正式入校

幼児クラスは公開型で実施し、毎回約10名が参加

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1
人数	8	10	13	4	3	2	2



【課題】

- 芝のグラウンド確保
- 練習内容の体系化・整備
- 体制整備(会計、勧誘他)、役割分担

【評価】

文京区で初めてのラグビースクールを開校しましたが、毎回30名を超える参加者を得て「ラグビーを通じたこどもの健全育成」の場を提供することができているものと評価しています。こどもたちの成長に合わせ、練習内容の質を高めていくとともに、参加人数の拡大、練習環境の改善を図るものとします。



2013 Bunkyo Rugby School

つくさか地域食育支援プロジェクト

附属坂戸高等学校 副校長 小林美智子

【ポスター】

1 概要

近年、多くの小中学校で食育の基本となる農業体験学習が行われているが、専門性のある教員が常駐しない小中学校では、その成果を十分に得ることができない状況が見られる。そこで本プロジェクトでは、本校のこれまでの農業教育活動の実績を原資に、近隣の小中学校における農業体験学習の指導や、本校をフィールドとした農業体験授業の実施、また給食食材の提供や職員研修などを行って、各校における様々な食育活動の充実に貢献しようとするものである。



本校生によるダイコン栽培指導（南小学校2年生）

2 内容

2.1 小中学校での活動

- (1) 中学校菜園での野菜栽培へ指導助言
4月～11月 於：市立若宮中学校菜園
- (2) 小学校2年生 夏野菜栽培学習への指導助言
4月～7月 於：市立南小学校菜園
- (3) 小学校5年生 野菜栽培学習への指導助言
5月～12月 於：市立坂戸小学校菜園
- (4) 小学校2年生 ミントマト鉢栽培への指導助言
5月～7月 於：市立坂戸小学校菜園
- (5) 小学校への出前授業の実施
5月28日 於：市立坂戸小学校
- (6) 小学校2年生 ダイコン栽培学習への指導助言
9月～12月 於：市立南小学校菜園

2.2 本校での活動

- (1) 小学校3年生 春の農場観察会（理科）の実施
4月22日 南小学校3年生 60人
- (2) 小学校2年生 農場探索学習の実施
6月22日 南小学校2年生 80名
- (3) 小学校教職員 農業体験研修の指導
8月2日 坂戸小学校教職員 25名
- (4) 小学生の食育体験学習会の指導（坂戸市主催）
8月3日 坂戸市内の小学生 20名
- (5) 中学校給食委員会 播種・収穫体験の実施
8月5日・12月10・12日 坂戸中学校 10名
- (6) 小学校5年生 農業体験学習（総合的学習）の実施
10月15・22日 南小学校5年生 120名
- (7) 小学校2年生 収穫体験学習の実施
10月30日 南小学校2年生 80名
- (8) 視覚特別支援学生 農業・調理体験学習の実施
11月5日 附属特別支援学校生 20名
- (9) 特別支援学生との秋冬野菜栽培学習の実施
9月～12月 市内3校の特別支援クラス 40名

2.3 給食食材の提供

本校農場で生産した野菜を給食食材として提供した

期 間 10月～12月

対 象 坂戸中学校・南小学校・坂戸小学校

品 目 ハクサイ・ダイコン・キャベツ
ブロッコリー・ニンジン・カブ 他

数 量 合計約600個、800kg・延べ37回

3 今後の展望

取り組み4年目になる本プロジェクトは、今年度も提携先の各校から高い評価を得ることができた。その一方で、多忙を極める小中学校教員との連携に苦労することも多くあった。特に年度末から年度当初の時期において、引継ぎや切り替えを如何にスムーズに運べるかが、今後の大きな課題になると思われる。

つくさか地域食育支援プロジェクト

附属坂戸高等学校 小林美智子（副校長）・黒岩健一（実習助手）・浪木陽介（教諭）・嶋田昌夫（教諭）・白石充（実習助手）

1. 事業の概要

本プロジェクトは、筑波大学附属坂戸高等学校におけるこれまでの農業教育の実績を原資として、坂戸市内の小中学校で行われている食育活動を支援しようとするものである。近年、小中学校では食育の取り組みが浸透し、多くの学校で、食育の基本となる農業体験学習が行われている。しかし、専門性のある教員が常駐しない小中学校では、農業体験学習の成果を十分に得ることができない状況が見られる。そこで本プロジェクトでは、小中学校における様々な食育活動を支援することを目的に、坂戸市教育委員会を通じて、近隣の小中学校への農業体験学習の指導・助言や、本校をフィールドとした農業体験授業の実施、また給食食材の提供や職員研修などを行っている。

※「つくさか地域食育支援プロジェクト」の「つくさか」とは、本校の愛称であり、校内のみならず、地域からも親しまれ込めて「つくさか」と呼ばれている。

2. 実施内容及び成果

2.1 小中学校での活動

小中学校内での野菜栽培学習へ指導助言を行った。各校指導者は計画段階から打合せを重ね、栽培品目の検討や栽培方法の指導、野菜苗や資材の提供・貸与などを行い、栽培期間中も定期的に各校を巡回して、栽培状況のチェックや管理方法などについて指導助言を行った。また、巡回中には直接小学生へ指導する機会もあった。

- ① 中学校菜園での野菜栽培へ指導助言【4月～11月 若宮中学校】
- ② 小学校2年生 夏野菜栽培学習への指導助言【4月～7月 南小学校】
- ③ 小学校5年生 野菜栽培学習への指導助言【5月～12月 坂戸小学校】
- ④ 小学校2年生 ミントマト鉢栽培への指導助言【5月～7月 坂戸小学校】
- ⑤ 小学校5年生への出前授業の実施【5月28日 坂戸小学校】
- ⑥ 小学校2年生 ダイコン栽培学習への指導助言【9月～12月 南小学校】



2.2 本校での活動

本校農場をフィールドとして、小中学生を対象とした農業体験学習を実施した。事前に充分な打合せを行った上で、小中学校側のニーズに合わせたプログラムを提供した。また、小中学校の職員研修や食育体験講座（坂戸市と共催）も実施した。

- ① 小学校2年生 農場探索学習の実施【6月28日 南小学校80名】
- ② 小学校教職員 農業体験研修の実施【8月2日 坂戸小学校教職員25名】



- ④ 小学生の食育体験学習の実施（坂戸市と共催）【8月3日 市内の小学生20名】
- ⑤ 中学校給食委員会 収穫体験の実施【8月5日・12月10・12日 坂戸中学校10名】
- ⑥ 小学校5年生 農業体験学習の実施【10月15・22日 南小学校120名】



- ⑦ 小学校2年生 野菜収穫体験学習の実施【10月30日 南小学校80名】
- ⑧ 中学校給食委員会 給食用野菜の収穫体験を実施【12月10・12日 坂戸中学校10名】
- ⑨ 視覚特別支援学生 農業・調理体験学習の実施【11月5日 附属特別支援学校生20名】
- ⑩ 中学校特別支援学級上の秋を野菜栽培学習の実施【9月～12月 市内3校の特別支援クラス40名】

2.3 給食食材の提供

各小中学校の家庭教師と連携をとりながら、提供可能な品目や時期を検討し、本校農場において、本校生がたものが園内で適切に栽培し出荷した。各小中学校では、校内に整備された野菜が置かれるなどして、本校産のとれたての地元野菜であることが周知され、給食を通じた食育活動の一助となることができた。

期 間 10月～12月 / 対象：坂戸中学校・南小学校・坂戸小学校
品 目 ハクサイ・ダイコン・キャベツ・ブロッコリー・ニンジン・カブ 他
数量：合計約600個、800kg・延べ37回

給食食材の提供では、坂戸中学校の給食委員会の主催による、種まき・観察・収穫の学習も実施した。8月にブロッコリー・ハクサイ・キャベツの種まきを行い、その後の生育状況の観察を経て、12月には収穫・調整の作業を行い、自らの手で中学校へ持ち帰って、給食の食材とした。



3. 子ども達の反応

提携先の各校では、それぞれの学習のねらいに応じた検証が行われており、小中学生たちの意識の変化や、成長の様子を伺うことができた。



【2019年6月28日農場探索学習を終えて「坂戸市立南小学校2年生」】



【2019年度総合的学習の時間 成果発表「坂戸市立坂戸小学校5年生」】

4. 今後の展望

取り組み4年目になる本プロジェクトは、今年度も提携先の各校から高い評価を得ることができた。その一方で、多忙を極める小中学校教員との連携に苦労する場面も多かった。特に年度末から年度当初の時期において、引継ぎや切り替えを如何にスムーズに運べる

かが、今後の大きな課題になると思われる。給食食材の提供の面では、供給量に限界があるため、先方の要望に応えられない面も出てきているが、青ナスやブロッコリーなど、地域性のある品目で対応できたので、今後には供給の質的な向上にも注力して行きたい。

みんなラボ病院プロジェクト —みんなラボ研究員チームによる大学病院の使いやすさ調査研究—

人間系 教授 原田 悦子

1 概要

本プロジェクトでは筑波大学附属病院の協力のもと、高齢者の視点から見た「使いやすさ」という観点から大学病院の問題を検討し、その改善提案を行うグループ活動を行った。実施したのは筑波大学 CURE みんなラボ(みんなの使いやすさラボ)に登録する高齢者グループであり、みんなラボスタッフと共に、大学病院への実地調査や調査結果を行い、そこから出てきた分析結果を基に、「改善策」を大学病院に対して提案した。

2 内容

リサーチユニット CURE みんなラボ(代表 原田悦子)では、みんなの使いやすさラボ(略称: みんなラボ)に「使いやすさに関する調査研究協力を目的として」登録者を募り、現在 200 名の地域高齢者の登録を得ている。本プロジェクトでは、その中から希望をした高齢者グループ7名(66~74 歳、男性4名、女性3名)をみんなラボ研究員チームとし、全 10 回の研究会と報告会(1 回につき約2時間)を行った。スケジュールは、

- 第1回 自己紹介、見学ツアー
- 第2回 病院見学ツアー(外来患者の視点から)
- 第3回 第2回見学ツアーのまとめ(KJ 法)
- 第4回 病院見学ツアー(再来患者の視点から)
- 第5回 第4回見学ツアーのまとめ(KJ 法)
- 第6回 これまでの意見まとめ
- 第7回 病院関係者インタビューと食堂見学
- 第8回~第10回 報告書づくり
- 第11回 成果報告会

であった。研究員チームのメンバー全員が、それぞれ分担して資料、報告書をつくり、病院の問題点と提言について発表を行った。

調査の結果、病院の問題点として、①食堂の問題(メニューの改善、テレビ設置、爪楊枝が裸で出ていて不衛生)、②血圧計の荷物置き場の問題、③予約センターの労働環境が悪い(スペースがない、電話のできる静かな環境が必要)、④待合室の問題(スペースが狭い、暗い)、⑤受付・会計の窓口の混雑、⑥掲示物の整理



- の必要性、⑦動線の問題が挙げられた。
- 報告会では、病院関係者(副院長、総務部関係者など)や地域の一般高齢者(研究員チーム以外の高齢者)の出席も得て、分析の経緯とこれらの問題点の指摘を行い、病院に対して以下の提言が行われた。
- (1)改善のために、病院スタッフと外部協力者が一緒に QC(品質管理)活動をしてはどうか。
 - (2)病院新聞やチラシなどを用いて、ユーザー(患者)への広報をしっかりとってはどうか。
 - (3)病院用システムのオープン化(電子カルテ、医師紹介システム、意見収集システム等)をしてはどうか。
 - (4)待合室にテーブルやプランター、飾り付け、図書室、気軽に他の患者と情報交換できるサロン等を設け、待ち時間を楽しく有効に使えるようにしてはどうか。
- これらの提言に対し、病院側からは、出来ることから改善していきたいという返答があり、まずは血圧計の荷物置き場が設置された。

3 今後の展望

本プロジェクトでの活動にも明らかのように、つくば地域に居住する高齢者は一般に、学習や研究活動に対する意識が高い。本プロジェクトでは、こうした特性を生かし、ユニバーサル・デザインの原理に基づいた、大学病院の使いやすさに向けた提案ができたと考えられる。今後は、交通機関や商業施設などの使いやすさ研究グループをつくり、生活者視点での「使いやすさ」を追究していくと共に、高齢者自身が使いやすさを研究し、社会に貢献するという、新しいコミュニティ活動の形を全国に提案していきたいと考える。

【ポスター】



地域住民の要介護化予防支援体系の構築

体育系 教授 田中喜代次

【ポスター】

1 概要

筑波大学と連携協定を締結し、研究グループの一つとして取り組んでいる茨城県大子町にて、「茨城県大子町健康づくり計画」を進めており、地域住民による要介護化予防支援体系の確立を目指している。「茨城県大子町健康づくり計画」は4ヵ年計画であり、本年は第3期として、住民による健康教室の展開、講演会、研修会などをおこなった。本年度は、最終年度を見越し、地域住民にも活動を広めるために、アドバイザーのみならず地域住民も含めた講演会を開催した。

2 内容

『平成25年度 大子町・筑波大学連携事業 健康づくり講演会 「大子町民の健康幸福に向けて」』と題し、講演会を開催した。最終年度を前に、今年度は、住民が主体的に活動できるようになるための準備段階として、講演会を開催した。この講演会は住民主導のもので、我々はサポート役である。講演会の目的は、①アドバイザーのスキルアップ、②地域住民にも活動を知ってもらい、活動を発展させていくことである。当日のスケジュールは右記の通りである。

田中喜代次教授の全体講演の後、アドバイザーグループ、一般住民グループに分かれて、実技やレクチャーをおこなった。参加者は72名であった。

平成25年度 大子町・筑波大学連携事業 健康づくり講演会 「大子町民の健康幸福に向けて」
日時：平成25年7月29日（月） 場所：文化福祉会館「まいん」交流ホール 住所：茨城県久慈郡大子町大字72-2-1 TEL：0295-72-2005 ※ナビタイムによると、筑波大学から現時までは約2時間です。
担当：見越さん（大子町の担当者） 田中先生、小澤さん、藪下さん、大須賀さん
参加者：一般住民の皆様（約30名）、大子健康づくりアドバイザー（約40名）
【当日スケジュール（既に住民の皆様にはチラシでお知らせしております）】 受付開始：12：30～ 開 会：12：50 講 演：13：00～14：10（田中先生） ミニ講話※：14：20～15：30（藪下さん、大須賀さん、小澤さん） 個別健康相談：15：40～16：20（全員）
※ミニ講話のセッションは、フロアを2分し、一般住民グループとアドバイザーグループとに分かれておこなう。
■一般住民グループ（担当：藪下さん） 14：20～15：30 運動体験（準備運動、頭の体操、レクなど）
■アドバイザーグループ（担当：大須賀さん） 14：20～15：00 講話の仕方をレクチャー 15：00～15：30 運動指導のポイントのレクチャーや新しい運動内容の提供

■アドバイザーグループ

- ①講話の仕方のレクチャー
- ②運動指導のポイントのレクチャー
- ③新しい運動内容の提供



■一般住民グループ 運動体験

- ①アイスブレイキング・準備運動
- ②バランス・筋トレ・敏捷性レクリエーション
- ③お土産筋トレ



■参加者の感想

- ・アドバイザー：スキルアップに繋がったと思う
- ・住民：新しい運動を知れた。また参加したい！

3 今後の展望

講演会を開催したことで、今まで活動を知らなかった住民に興味を持ってもらえた。次年度以降も継続し、住民による自立支援体系の構築につなげていきたい。

平成25年度 社会貢献プロジェクト

～地域住民の要介護化予防支援体系の構築～

田中喜代次（体育系・教授）
大越 倫博（体育系・准教授）
藪下 典子、根本みゆき（体育系・研究員）
小澤多賢子（スポーツ医学・博士課程）

大子町

大子町人口 20,884名
男性 9,871名 女性 11,013名
高齢者人口（65歳以上）7,252名
高齢化率：35.5%（県内1位）

茨城県大子町健康づくり計画

第1期：要介護化予防養成カリキュラム（認知機能低下予防を含む）の提供
第2期：指導者の育成（だいい健康づくりアドバイザー、現在53名）
第3期：住民による健康教室の展開、自立への意識付け（今年度）
第4期：住民による要介護化予防支援体系の確立

今年度の主な活動

①アドバイザーのスキルアップ研修会、兼一般住民へ向けた講演会の開催
➢ これまでに養成されたアドバイザー、および一般住民住民を対象に、『平成25年度 大子町・筑波大学連携事業 健康づくり講演会 「大子町民の健康幸福に向けて」』と題し、講演会を開催した。
②住民による健康教室の展開
➢ 住民主導の健康教室のサポートをおこなった

講演会スケジュール

平成25年度 大子町・筑波大学連携事業
健康づくり講演会
「大子町民の健康幸福に向けて」

日時：平成25年7月29日（月）
場所：文化福祉会館「まいん」交流ホール
住所：茨城県久慈郡大子町大字72-2-1
TEL：0295-72-2005
※ナビタイムによると、筑波大学から現時までは約2時間です。

担当：見越さん（大子町の担当者）
田中先生、小澤さん、藪下さん、大須賀さん

参加者：一般住民の皆様（約30名）、大子健康づくりアドバイザー（約40名）

【当日スケジュール（既に住民の皆様にはチラシでお知らせしております）】
受付開始：12：30～
開 会：12：50
講 演：13：00～14：10（田中先生）
ミニ講話※：14：20～15：30（藪下さん、大須賀さん、小澤さん）
個別健康相談：15：40～16：20（全員）

※ミニ講話のセッションは、フロアを2分し、一般住民グループとアドバイザーグループとに分かれておこなう。

■一般住民グループ（担当：藪下さん）
14：20～15：30 運動体験（準備運動、頭の体操、レクなど）

■アドバイザーグループ（担当：大須賀さん）
14：20～15：00 講話の仕方をレクチャー
15：00～15：30 運動指導のポイントのレクチャーや新しい運動内容の提供

講演会の目的

①アドバイザーのスキルアップ
②地域住民にも活動を知ってもらい、活動を発展させていくこと

最終年度を前に、住民が主体的に活動できるようになるための準備段階として、講演会を開催した。この講演会は住民主導のもので、我々はサポート役である

参加者の特徴

■対象：アドバイザー、大子町一般住民
■参加人数：72名
■年齢：40～60歳台
■アドバイザーの特徴：食生活改善推進員、シルバーリハビリ体操指導士、運動指導者、民生委員、保育士など、すでにボランティア活動をおこなっている人やボランティア活動に興味がある人

講演会の内容

田中喜代次教授の全体講演の後、アドバイザーグループ、一般住民グループに分かれて、実技やレクチャーをおこなった。

■アドバイザーグループ：レクチャー
①講話の仕方のレクチャー
②運動指導のポイントのレクチャー
③新しい運動内容の提供

■一般住民グループ：運動体験
①アイスブレイキング・準備運動
②バランス・筋トレ・敏捷性レクリエーション
③お土産筋トレ

参加者の感想

■アドバイザーの感想

スキルアップにつながったと思う
新しい運動が知れて良かった、今度実践してみようと思う
講話の仕方のポイントが良く分かった
また来年も開催して欲しい

■一般住民の感想

自分もアドバイザー講習を受けたいと思った、大子町のために頑張りたい
新しい運動を知れてとても良かった
このような取り組みを初めて知った、また参加したい

今後の展望

講演会を開催したことで、今まで活動を知らなかった住民に興味を持ってもらえた。また、アドバイザー講習への参加希望もあり、住民への動機付けには十分な成果を残せたと考える。さらに、アドバイザーの皆様も新たな知識や技術の習得をし、より良い教室運営が期待できる。次年度以降もこのような講演会を継続し、住民による自立支援体系の構築につなげていきたい。

高齢者運動支援リーダーを中心とした健康づくりネットワークの醸成

体育系 准教授 大藏 倫博

【ポスター】

1 概要

本プロジェクトは、今後さらに進行する少子高齢化を見据えて、自治体や健康運動指導士などではなく、地域に在住する高齢者運動支援リーダー（以下、リーダーとする）を活動の中心（主役）に据えた健康づくりネットワークの醸成を目的とした。目的の達成に向けて、リーダーを養成するためのテキストの作成、リーダー養成会の開催、リーダー同士を結びつける「いばらき健康・運動リーダーサミット2013」の開催などの活動をおこなった。

2 内容

①リーダー養成研修テキストの作成

リーダーを体系的に養成していくためには、統一された教材が必要である。そこで、図1の通り「運動支援リーダー養成研修テキスト」を作成した。



図1 リーダー養成研修テキストの表紙(左)と中身(右)

②リーダー養成研修会の開催

リーダー養成研修会は1回2時間、全5回のプログラムとなっており、修了者にはリーダー資格が与えられる。本プロジェクト期間中に常総市（2013年7月）、つくば市、阿見町、古河市、坂東市（2014年1・2月）にてリーダー養成研修会を開催した。研修会の開催にあたって、NPO法人スクウェアステップ協会、筑波大学発ベンチャー株式会社 THF と連携しておこなった。

③いばらき健康・運動リーダーサミット2013の開催

本イベントは、前述のリーダー養成研修会で養成されたリーダー、自治体職員や大学関係者、健康づくりや運動を通じた地域活性化に興味のある地域住民らが集い、それぞれの立場から現在の活動内容の紹介と課題について発表し、それに対して意見交換をおこなった。成果の要点を以下にまとめた。

- ・各地域で活動していたリーダー同士や被災地で活動する運動実践者が知り合い、互いの活動について情報共有をおこなった。
- ・参加者から、(シルバーリハビリ体操やスクウェアステップの発表を見て)「活動の様子を見られてよかった」、「刺激をたくさん貰えたので、これからも頑張っていきたい」という声が聞かれた。
- ・シンポジストではなく一般参加者として訪れる周辺地域の自治体職員もおられた。本イベントで得られた情報を持ち帰って自身の地域にも広めていけることが望まれる。



写真1 プロジェクト代表者挨拶
(筑波大学体育系准教授 大藏倫博)

3 今後の展望

これまで取り組んできた「リーダーの養成」、「リーダー同士の交流の促進」、「スキルアップ研修の充実」等の活動を継続し、健康づくり運動ネットワークの醸成、そしてネットワークの拡大を目指していく。

筑波大学 University of Tsukuba 平成25年度社会貢献プロジェクト

高齢者運動支援リーダーを中心とした健康づくりネットワークの醸成

1. 事業の背景・目的

本プロジェクトは、今後さらに進行する少子高齢化を見据えて、自治体や健康運動指導士などではなく、地域に在住する高齢者運動支援リーダー（以下、リーダーとする）を活動の中心（主役）に据えた健康づくりネットワークの醸成を目的とした。

2. 事業の成果

目的の達成に向けて、以下の活動をおこなった。

- ① リーダーを養成するためのテキストの作成
- ② リーダー養成研修会の開催
- ③ リーダー同士を結びつける「いばらき健康・運動リーダーサミット2013」の開催

① リーダー養成研修テキストの作成

リーダーを体系的に養成していくためには、統一の教材が必要である。そこで、下図の「運動支援リーダー養成研修テキスト」を作成した。

運動支援リーダー養成研修テキストの表紙と中身

② リーダー養成研修会の開催

リーダー養成研修会は1回2時間、全5回のプログラムとなっており、修了者にはリーダー資格が与えられる。本プロジェクト期間中に常総市（2013年7月）、つくば市、阿見町、古河市、坂東市（2014年1・2月）にてリーダー養成研修会を開催した。研修会の開催は、NPO法人スクウェアステップ協会、筑波大学発ベンチャー株式会社 THF と連携しておこなった。

プロジェクト代表者挨拶(大藏倫博)

シルバーリハビリ体操の実演

③ いばらき健康・運動リーダーサミット2013の開催

リーダー養成研修会で養成されたリーダー、自治体職員や大学関係者、健康づくりや運動を通じた地域活性化に興味のある地域住民らが集い、それぞれの立場から現在の活動内容の紹介と課題について発表し、意見交換をおこなった。

【開催日】平成25年11月14日（木） 【参加人数】550名
【会場】筑波大学 大学会館講堂
【内容】

- ・講演 筑波大学体育系教授 田中喜代次
「いくつになっても輝ける健康寿命社会の醸成に向けて」
- ・シンポジウム 自治体・運動サークル等の代表者5名
「健康・運動リーダーが担う地域の健康づくりについて一現状と課題」
- ・発表 株式会社THF 小澤多賀子
つくば健康福祉大学の構想について
- ・社会貢献事例紹介 筑波大学大学院 北山志
健康運動実践装置を内蔵する家庭用体重計の開発

3. 今後の展望

これまで取り組んできた

- ・リーダーの養成
- ・リーダー同士の交流の促進
- ・スキルアップ研修の充実

等の活動を継続し、健康づくり運動ネットワークの醸成とネットワークの拡大を目指していく。

ばらんすあっぷ大作戦 ～デジタルデバイスを活用した小中学生への食育～

体育系 准教授 麻見 直美

【ポスター】

1 概要

成長期の子どもにおける不適切な食習慣は、健全な発育発達を妨げることや成人期における慢性疾患リスクを高める。そのため、生涯の健康維持・増進のためには、早期に望ましい食習慣を身につけ、食の自立を図ることが重要である。本プロジェクトでは、茨城県内でも肥満児の増加が深刻化している大子町を活動地域として、小中学生を対象に食育活動を実施した。小中学生が自身の食生活を把握することにより、食に対する意識の向上や望ましい食習慣の獲得に寄与することを目的とした。

2 内容

◆実施内容

大子町の小中学校全11校で、児童生徒が自身の普段の食事を振り返る「食生活チェック」を実施した。また、その食生活チェックを活用した「出張授業」を実施した。なお本プロジェクトは、分担者である大学院生（神家、角谷）が主体的に運営を行った。

◆食生活チェック

小学校5・6年生、中学1・2年生の児童生徒を対象に「食生活チェック」を実施した。食生活チェックは、ばらんすあっぷシート（下図）を用いて、自身の最近の食生活を振り返り、“なにを”“どのくらい”食べたかをチェックするものである。児童生徒が記入した内容から筑波大学運動栄養学研究室が個人の食生活

バランスを評価し、その評価結果シートを作成した。この食生活チェックと結果シートの返却を4回実施した。

◆出張授業

ばらんすあっぷシートとその評価結果を用いた食育出張授業を実施した。出張授業は希望のあった学校のみで実施した（平成25年度はだいご小学校にて実施）。



食育出張授業の内容

実施日	対象学年	授業内容（タイトル）
平成25年7月5日	5年生	自分の食事バランスを知ろう！
10月11日	6年生	くだものBINGO
平成26年1月30日	5・6年生	1年間で食事はどのように変わったのか？

3 今後の展望

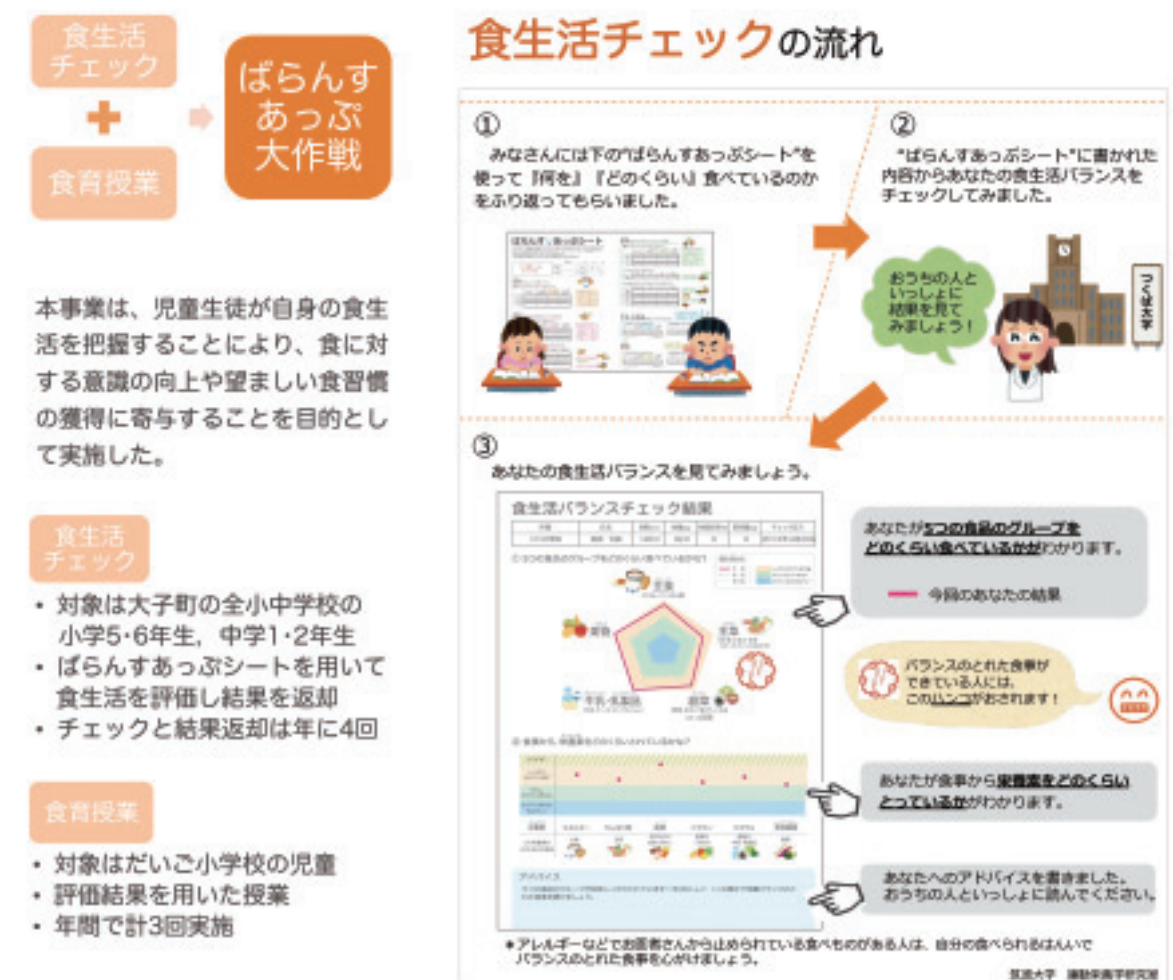
“ばらんすあっぷ大作戦”では、「食生活チェック」によって子どもたち一人ひとりが自身の食生活について関心を持ち、それぞれの問題点を見つけることができた。さらに、食生活チェックを活用した食育出張授業の実施により、“自分の食事バランスをより良くするためにはどうすればいいか”について、家族と話す機会が増えたという子どもたちの声もあった。今後はこの“ばらんすあっぷ大作戦”を大子町に留まらず他の地域にも広げていきたい。

※体育系運動栄養学（麻見）研究室では、茨城県神栖市においても「食生活チェック」を主とした食育活動“神栖市ばらんすあっぷ大作戦！”を実施した（平成25年度神栖市まちづくり推進事業の一環として実施）。

平成25年度社会貢献プロジェクト ばらんすあっぷ大作戦！

代表者：麻見 直美（体育系、准教授）

分担者：神家 さおり、角谷 雄哉（人間総合科学研究科、博士後期課程）



食育授業の様子



※体育系運動栄養学（麻見）研究室では、茨城県神栖市においても「食生活チェック」を主とした食育活動“神栖市ばらんすあっぷ大作戦！”を実施した（平成25年度神栖市まちづくり推進事業の一環として実施）

小学生低学年児童とその保護者向けの「命」をテーマとした教材製作とその普及

医学医療系 教授 大河内信弘

【ポスター】

1 概要

「命」について、友達、仲間、親子、教師と児童等でともに話し合い、考えられることを目的とした教材となる絵本を、平成24年度に作成した。そして、平成25年度は、その絵本の普及活動を行った。まず、茨城県内の公共施設等に無料で提供した。さらに、絵本の作者による講演会と原画展を開催するとともに、読書感想文コンクールも開催し、命について共に考えあう機会を多く設けた。また、財団法人いばらき腎バンク（現：公益財団法人いばらき腎臓財団）と協同し、DVD版を製作し、普及活動を行った。

2 内容

①実施内容

- ・茨城県内の公立図書館や公民館等65施設に絵本を無償で配布した。
- ・絵本の作者を招き、『いのちについて考える絵本の原画展とトークショー』を開催した。参加者は、茨城県内の小学生やその親子ら37名で、みな熱心に作者の言葉を聴いていた。そして、講演会に引き続きおこなった、トークショーでは、絵本について、生きることについて、参加者から多くの質問が上がり、作者らがそれらに丁寧に答えていた。イベント終了後行ったアンケート調査では「いのちのつながりに、共感し、感動し、涙がこぼれました。」「人生は有限。有限の人生のなかでいかに生きるか考えました。」等の感想を得た。



講演会の様子

イベントの様子は、ケーブルテレビにて、つくば市内に配信された。



読書感想文コンクールの案内

- ・読書感想文コンクールを開催し、茨城県内の全ての公立小学校や図書館等に開催通知を配布し、広く感想文を募集した。
- ・絵本の内容を動画に編集し、音声をつけたDVD版を作成した。



製作したDVDとコンテンツ

②成果

絵本を配布するだけでなく、講演会や読書感想文コンクールなどを開催したので、絵本を通していのちについて考える時間を様々な形で提供できた。子どもも大人もいのちについてそれぞれの考えを語りあえることができた。

③地方自治体との連携

講演会等の実施やDVDの制作において、財団法人いばらき腎バンク（現：公益財団法人いばらき腎臓財団）と協同しておこなった。

3 今後の展望

引き続き、絵本の普及活動を進めるとともに、DVDの普及もおこなう。それによって、より多くの人の目に触れることで、いのちについて考える場づくりとなることが期待できる。

平成25年度社会貢献プロジェクト 小学生低学年児童とその保護者向けの 「命」をテーマとした教材製作とその普及

代表者：大河内信弘（医学医療系）
分担者：楠本 敏薄（病院総務部総務課） 千原 耐智路（医学群医学類）
平井 理心（病院総務部医事課）

概要

「命」について、友達、仲間、親子、教師と児童等でともに話し合い、考えられることを目的とした教材となる絵本を、平成24年度に作成した。そして、平成25年度は、その絵本の普及活動を行った。まず、茨城県内の公共施設等に無料で提供した。さらに、絵本の作者による講演会と原画展を開催するとともに、読書感想文コンクールも開催し、命について共に考えあう機会を多く設けた。また、DVD版を製作し、普及活動を行った。



～内容～
捨てられた子猫が女の子に拾われ、女の子の家で、女の子と犬とともに成長していく。大好きな犬との別れと別れ。ケガをした結果、動けなくなってしまった自分。それでも、人とのつながりのなかで、どんな姿、どんな自分でもいかに認められ、自分自身のありのままの姿を受け入れる。自分の存在を肯定していく猫の成長とその幸せを描いている。（Amazonより引用）

実施内容及び成果

●いのちについて考える絵本の原画展とトークショー（2013年12月1日開催）



トークショーの様子



絵本作者による講演の様子

参加者37名。

「いのちのつながりに、共感し、感動し、涙がこぼれました。」「人生は有限。有限の人生のなかでいかに生きるか考えました。」等の感想を得た。

●読書感想文コンクール



読書感想文コンクール募集ポスター

●DVDの制作



製作したDVDとコンテンツ

地域社会等との連携

イベントの開催およびDVD制作にあたり、「財団法人いばらき腎バンク」と協働した。
＜財団法人いばらき腎バンク＞（平成26年4月1日より「公益財団法人いばらき腎臓財団」に名称変更）
平成元年（1986）年、腎不全の患者さんからの寄付をきっかけに、腎臓提供希望者のための登録制度を実施する機関として設立。現在、移植推進事業、臓器提供者家族支援事業のほか、茨城県内の学校などに講師を派遣して「いのちの学習会」を開催。その学習会の教材として、筑波大学の学生とともにDVD「話そう大切な人」とを制作。精力的な活動を続けている。

今後の展望

引き続き、絵本の普及活動を進めるとともに、DVDの普及もおこなう。それによって、より多くの人の目に触れることで、いのちについて考える場づくりとなることが期待できる。

医療職および一般市民に対する新国際標準蘇生（ガイドライン 2010）教育体制強化の支援

医学医療系 准教授 高橋 伸二

【ポスター】

1 概要

筑波大学社会貢献プロジェクトのもと、NPO 法人茨城 ACLS 協会を支援し、医療職、一般市民に対する蘇生講習会を展開してきた。国際標準である蘇生ガイドラインを基に作成された BLS・ACLS 実技コースを茨城県各地で開催した。2013 年度の茨城トレーニングサイトでの受講者数は 1,393 人で、全国第 1 位となった。例年 5 月に行っている看護師対象の講演会、蘇生講習会は今年度も県内から多くの看護師が参加した。今年度（2013 年度）で茨城トレーニングサイトは開設 10 周年を迎え、茨城県の研修医教育、消防防災教育に協力しさらなる発展を遂げている。茨城県に対して AED（自動体外式除細動器）の寄付も行った。社会貢献プロジェクトでは、筑波大学から人的派遣と研修場所の提供を行っている。

2 事業成果の概要

筑波大学社会貢献プロジェクトの支援により、県内の医療従事者の受講機会が増加し、心肺蘇生に高度な知識と技術をもった医療人を確実に増やし、地域医療に貢献している。関係各所から筑波大学の支援に対して高い評価を受けることができた。

茨城県は首都圏にありながら、まだまだ医師数が少ないという問題点を抱えている。県医療対策課では多くの若い医師を獲得するために初期研修医に対して蘇生講習会の受講補助を行っている。本プロジェクトはこの蘇生講習会の開催を支援し、年間一次救命処置講習会 4 回、二次救命処置講習会 2 回開催した。

さらに、2013 年度は一般市民への蘇生教育普及の準備段階として、県内インストラクターに対して、ファーストエイドコースのインストラクターアップデートを開催した。また、小児救急のレベルアップのため病院内外での小児の緊急事態に対する救命処置、特に小児の病態の評価を中心とした医療従事者を対象とした PEARS コースの開催を開始した。（コース開催数）

2013 年 4 月から 2014 年 3 月までに BLS41 回、

コース名	受講者数 2012	*受講者数 2013
HS-AED	163	196
BLS（一次救命処置）	842	839
ACLS（二次救命処置）	176	213
ACLS-EP（上級者）	33	35
PALS	24	47
その他	13	65
合計	1251	1393

ACLS13 回 PALS/PEARS 5 回、HS-AED コース 9 回を開催した。

3 地方自治体等との連携

平成 25 年度も各団体と連携しコースを開催した。

- 1) 茨城県庁医療対策課：茨城県内の初期臨床研修医・後期臨床研修医・救急指導医を対象に実施した。
- 2) 茨城県庁消防防災課・茨城県立消防学校：茨城県内の救急救命士向けの ACLS、救急隊員・消防職員向けの BLS、初任科生に対して AED コース 6 回を実施した。
- 3) 茨城県医師会：医師会会員向けのコースを 3 回開催した。
- 4) 茨城県看護協会：恒例となったナイチンゲールプロジェクトは、県の各地から多くの看護師が参加し、蘇生教育を受けるとともに病院を超えた交流の場を提供した。
- 5) 茨城県内地域メディカルコントロール協議会：茨城県内の救急医療協議会と連携し、地域密着型で開催した。
- 6) 一般市民普及活動：県内の婦人消防団員（防火クラブ）対象に講習会を行った。

4 今後の展望

本プロジェクトによる研修会指導者・修了者が茨城県の救急医療を担い、そのネットワークは県の救急医療を支えている。継続した活動と更なる講習会の開催を企画していく。

今後はさらに、現在の医療機関の医師、看護師の蘇生スキルのレベル向上をはかるばかりではなく、一般市民救助者の教育にも取り組んでいきたい。

平成 25 年度社会貢献プロジェクト

医療職と一般市民に対する国際標準蘇生教育

代表者：高橋伸二（医学医療系・准教授）

分担者：水谷太郎（医学医療系・教授）、河野了（医学医療系・講師）、坂根正孝（医学医療系・准教授）

活動地域：茨城県つくば市

【概要】筑波大学社会貢献プロジェクトのもと、NPO 法人茨城 ACLS 協会を支援し、医療職、一般市民に対する蘇生講習会を展開してきた。国際標準である蘇生ガイドラインを基に作成された BLS・ACLS 実技コースを茨城県各地で開催した。2013 年度の受講生総数は 1,393 人で 3 年間で 4,000 人を超えた（全国第 1 位）、例年行っている看護師対象の講演会、蘇生講習会は今年度も県内各所から大勢が参加した。2013 年度で茨城 ACLS 協会は開設 10 周年を迎え、さらなる発展を遂げている。筑波大学として当サイトとともに茨城県の研修医教育、消防防災教育に人的派遣、研修場所を提供している。

【内容】筑波大学社会貢献プロジェクトの支援により、県内の医療従事者（医師、看護師、救急救命士など）の受講機会が増加し、心肺蘇生に高度な知識と技術をもった医療人を確実に増やし、地域医療に貢献している。本年度も関係各所から本学の支援に対して高い評価を受けることができた。

5 月には恒例となったナイチンゲールプロジェクト（茨城県看護協会と本プロジェクトが共同で行ったイベント）は、茨城県の各地多くの看護師が参加し、蘇生教育を受けるとともに病院を超えた交流の場を提供した。

茨城県の抱える医療人不足は看護師ばかりではない。首都圏にありながら、まだまだ医師数が少ないという問題点を抱えている。県医療対策課では多くの若い医師を獲得するために初期研修医に対して蘇生講習会の受講補助を行っている。本プロジェクトはこの研修医に対する蘇生講習会の開催を支援し、一次救命処置講習会 4 回、二次救命処置講習会 2 回で年間の研修医に講習を行った。

さらに、2013 年度は一般市民への蘇生教育普及の準備段階として、県内インストラクターに対して、ファーストエイドコースのインストラクターアップデートを開催した。また、小児救急のレベルアップのため小児病院内外での小児の緊急事態に対する救命処置、特に小児の病態の評価を中心とした医療従事者を対象とした PEARS コースの開催を開始した。BLS を 41 回、ACLS を 13 回、PALS/PEARS を 5 回、HS-AED コースを 9 回開催した。

EP は上級者コース、その他にはインストラクター養成コースを含み、茨城トレーニングサイトのインストラクター数は医師、看護師、救命士など合計 108 人在籍している。

【地方自治体等との連携】

1. 茨城県庁医療対策課：茨城県内の初期臨床研修医・後期臨床研修医・救急指導医などを対象とした研修会を実施
2. 茨城県庁消防防災課・茨城県立消防学校：茨城県内の救急救命士向けの二次救命処置、救急隊員・消防職員向け一次救命処置だけでなく、新規採用された県内消防職員に対する初期教育を実施、地域病院前救急活動の質の向上に寄与
3. 茨城県医師会：茨城県医師会会員向けの講習を 3 回開催
4. 茨城県看護協会：茨城県看護協会との共催で、昨年を上回る最大の蘇生実技講習会を開催
5. 一般市民普及活動：県内の婦人消防団員（防火クラブ）対象講習会を開催
6. 茨城県内地域メディカルコントロール協議会共催コース（域密着型）



【今後の展望】本プロジェクトによる研修会指導者・修了者が茨城県の救急医療を担い、そのネットワークは県の救急医療を支えている。継続した活動と更なる講習会の開催を企画していく。さらに一般市民救助者の教育にも取り組んでいきたい。

発達障害児を養育中の家族のエンパワメントを促進するための取り組み

医学医療系 准教授 涌水 理恵

【ポスター】

1 概要

本研究は、発達障害児の「子育て」に困難感を抱く保護者に、家族の養育力を強化（家族をエンパワメント）するため、「前向き子育てプログラム（以下、トリプルP）」のグループトリプルP（毎週1回、合計8回のプログラム）を計55名に行った。54例は6か月後までのアウトカムを縦断的に追跡できたため、longitudinal studyとしてrepeated measures ANOVAを用いて、本研究の介入プログラムの有効性の検証を行った。

その結果、家族エンパワメントの向上だけでなく保護者の精神状態や自己肯定感、児への接し方、児の問題行動にも長期的な改善効果が得られた。とくに家族エンパワメントについては、the Family Empowerment Scale scoresの全てのサブスケールにおいて有意な介入効果が確認できた。

本研究により、就学前および就学中の発達障害児を養育中の保護者に対し、トリプルPをベースにした集団でのプログラム介入および情報提供を施行することは、保護者・児・家族の全エレメンツにとって有効であることが示唆された。

2 内容

介入はつくば市と水戸市ほかで週1回、8週間（全8回）行い、前半4回と最終回（全5回）は対象に直接会場に来ていただきグループワークのセッションを行い、後半5-7回（全3回）は電話でのセッションを行った。グループワークは親のみの参加になるため、前半4回と最終回（全5回）は託児を設置した。未就学児の親のみならず、就学児の親でも下の兄弟がいる場合には、利用を許可した。託児に関しては、大体4～5名の保育者を手配した。

介入前後の評価ツールとして、Family Empowerment Scale 日本語版（家族エンパワメントを把握する34項目）、Parenting Scale（子育ての特徴を把握する30項目）、Strength and Difficulties Questionnaire（児の問題行動の状況を

把握する25項目）、Parental Experiment Survey（親として児の行動、子育てをどう感じるかを把握する11項目）、Depression Anxiety Stress Scale（親の抑うつ・不安・ストレスを把握する42項目）を使用した。

6か月後までのデータをフォローできた54名の保護者の心理状態や養育への知覚、児の行動、家族エンパワメントの各アウトカムの介入前後の経時的変化をTableに示す。

Table. Results of repeated measures ANOVA on children, caregivers, and family outcomes (N=54)									
Scale	Score range	Time				Effect (time effect)			
		Pre Mean (SD)	Post Mean (SD)	3 months after Mean (SD)	6 months after Mean (SD)	p ¹	p-value	effect sizes	
SDQ									
Emotional symptoms	0-10	2.68 (2.32)	1.98 (1.85)	1.87 (1.87)	2.03 (1.97)	4.77	*0.003	0.081	
Conduct problems	0-10	3.46 (2.19)	2.89 (1.83)	2.47 (1.87)	2.79 (2.12)	2.79	*0.042	0.049	
Hyperactivity	0-10	6.00 (2.85)	5.11 (2.29)	5.04 (2.33)	5.34 (2.17)	2.09	*0.109	0.037	
Peer problems	0-10	4.84 (2.45)	4.19 (2.10)	3.84 (2.38)	4.30 (2.70)	2.28	*0.084	0.040	
Difficult behavior	0-40	17.38 (5.88)	14.17 (5.10)**	13.22 (6.00)**	14.55 (5.95)*	6.92	*0.001	0.108	
Prosocial behavior	0-10	4.07 (2.98)	4.50 (2.85)	4.87 (2.83)	4.89 (2.36)	1.31	*0.272	0.024	
PS									
Latency	1-7	2.79 (0.49)	2.29 (0.84)**	2.22 (0.72)**	2.23 (0.64)**	12.16	<0.001	0.184	
Over-reactivity	1-7	3.78 (1.17)	2.75 (1.21)**	2.84 (1.14)**	3.12 (1.19)*	10.38	<0.001	0.161	
Verbosity	1-7	3.65 (0.98)	2.65 (0.84)**	2.81 (1.01)**	2.91 (0.96)**	13.63	<0.001	0.202	
Total	1-7	3.27 (0.62)	2.50 (0.72)**	2.54 (0.78)**	2.63 (0.70)**	17.08	<0.001	0.240	
DASS									
Depression	0-42	8.25 (8.33)	4.72 (8.84)*	4.00 (6.17)**	6.58 (7.32)	4.23	*0.007	0.100	
Anxiety	0-42	5.51 (5.00)	3.74 (3.57)	3.39 (3.55)*	5.50 (5.33)	3.61	*0.022	0.085	
Sleeps	0-42	12.45 (7.43)	7.98 (5.85)	7.51 (6.72)	11.39 (8.82)	5.52	*0.001	0.127	
Total	0-126	26.22 (18.33)	16.43 (13.72)*	14.80 (16.86)*	22.97 (20.06)	5.21	*0.002	0.121	
FES									
Parenting is difficult	1-5	3.38 (0.98)	2.60 (0.90)**	2.51 (0.83)**	3.14 (1.07)	14.69	<0.001	0.217	
Parenting is rewarding	1-5	2.70 (0.97)	3.13 (0.80)*	3.27 (1.10)*	2.81 (1.14)	4.34	*0.006	0.076	
Parenting is demanding	1-5	3.43 (1.00)	2.72 (1.10)*	2.85 (1.18)	2.87 (1.11)	5.78	*0.001	0.098	
Parenting is stressful	1-5	3.39 (1.01)	2.63 (1.06)**	2.58 (1.01)**	3.16 (1.13)	8.28	<0.001	0.135	
Parenting is fulfilling	1-5	2.87 (1.12)	3.72 (1.04)	3.88 (0.93)	2.86 (0.78)	10.53	<0.001	0.227	
Parenting is enjoyable	1-5	3.22 (1.21)	2.41 (1.11)**	2.42 (1.02)**	2.78 (1.17)	8.60	<0.001	0.140	
Confidence in parenting	1-5	2.24 (0.90)	2.86 (0.72)**	2.78 (0.84)**	2.74 (0.79)**	9.91	<0.001	0.157	
Support for parenting	1-5	2.67 (0.96)	3.39 (1.04)**	3.11 (0.82)*	2.82 (1.07)	6.61	<0.001	0.111	
Agreement with partner regarding child discipline (n=51)	1-5	2.68 (0.99)	3.08 (1.06)	3.14 (0.89)	3.03 (1.00)	1.07	*0.386	0.021	
Support received from partner (n=51)	1-5	2.80 (1.03)	3.18 (1.09)*	3.18 (1.18)	3.05 (1.18)	1.09	*0.356	0.021	
Happiness with partner (n=51)	0-6	3.12 (1.25)	3.32 (1.24)	3.62 (1.23)	3.83 (1.13)	3.37	*0.020	0.063	
FES									
Family	12-60	37.55 (8.22)	42.07 (7.12)**	41.98 (6.66)**	40.11 (7.06)*	7.65	*0.001	0.128	
Service system	12-60	40.40 (5.28)	43.52 (6.41)**	43.29 (7.40)	43.55 (7.20)	4.10	*0.008	0.072	
Community/political	10-50	25.71 (6.57)	27.85 (6.29)*	27.86 (7.08)	26.88 (6.38)	2.09	*0.104	0.038	
Total	34-110	103.65 (15.45)	113.44 (13.49)**	112.97 (13.78)*	111.74 (18.50)	5.03	*0.002	0.087	
ANOVA adjusted for the baseline score at each measurement time.									
*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001.									
PS = Parenting Stress; DASS = Depression Anxiety Stress; FES = Family Environment Scale; ANOVA = Analysis of Variance; SD = standard deviation.									

いずれのアウトカムも児の性別や居住地域による介入効果の差はなかった。主たる養育者が2か月間で計8回の子育てトレーニングプログラムを受講したことにより、養育者の心理状態や子育てに対する知覚はポジティブに変化した。それにより児の行動も落ち着き、家族のエンパワメントも有意に上昇したと考察される。

3 今後の展望

本取り組みはH26年度も引き続き本学の社会貢献プロジェクトの登録課題となっているので、今後も介入を継続していきたい。

平成 25 年度社会貢献プロジェクト 発達障害児を養育中の家族のエンパワメントを促進するための取り組み

涌水理恵(筑波大学医学医療系・准教授)
宮本儀也(筑波大学人間系・教授)
藤岡寛(つくば国際大学医療保健学部・准教授)
家島厚(茨城県立福祉医療センター・センター長)

1. 背景

エンパワメントという概念は米国で1980年代、英国では1990年代より保健社会学分野で盛んに用いられてきた。その意味は、障害児とその家族がより内発的な力を持ち、自らの生活を自らコントロールできること、また、できるようになるプロセス、と要約される。

基盤に困難を有する児を養育する親と家族を支援する子育てプログラムには「前向き子育てプログラム（以下、トリプルP）」や「Nobody's Perfect プログラム」、「ペアレント・トレーニング」等がある。

日本では1999年、障害者介護等支援サービス指針の中でエンパワメントという概念が示され、障害児と家族に対する「全体としての家族(family as a whole)」という考え方が普及し、彼らの生活の質(QOL)を向上させるための様々な条件整備がなされてきた。

しかし個人・家族・地域社会のダイナミズムのなかで家族を一単位として捉え、そのエンパワメントに焦点を当てた研究は非常に少ない(1983～2013：医学中央雑誌)。

2. 目的

本研究では発達障害児を養育中の主たる保護者を対象に、オーストラリアで開発され、世界15カ国以上で翻訳・実施されている親向けの子育て学習プログラム「トリプルP」(毎週1回、合計8回)を基盤とし、家族エンパワメントを高めるための「ペアレント・トレーニング」を実施する。

介入前後の評価ツールとしてFamily Empowerment Scale 日本語版をはじめとする計5つの尺度を使用して介入効果を測定し、介入評価を行う。

3. 実施内容

介入はつくば市と水戸市ほかで週1回、8週間（全8回）行い、前半4回と最終回（全5回）は対象に直接会場に来ていただきグループワークのセッションを行い、後半5-7回（全3回）は電話でのセッションを行った。グループワークは親のみの参加になるため、前半4回と最終回（全5回）は託児を設置した。未就学児の親のみならず、就学児の親でも下の兄弟がいる場合には、利用を許可した。託児に関しては、大体4～5名の保育者を手配した。

介入前後の評価ツールとして、Family Empowerment Scale 日本語版（家族エンパワメントを把握する34項目）、Parenting Scale（子育ての特徴を把握する30項目）、Strength and Difficulties Questionnaire（児の問題行動の状況を把握する25項目）、Parental Experiment Survey（親として児の行動、子育てをどう感じるかを把握する11項目）、Depression Anxiety Stress Scale（親の抑うつ・不安・ストレスを把握する42項目）を使用した。

表1 グループトリプルP（毎週1回、合計8回のプログラム）			
セッション	内容	ワーク形式	時間
第1回	「前向きな子育て」とはどのような子育てかについて知り、子どもの行動の捉え方について話し合う		2時間
第2回	子どもと良好な関係を築く、子どもの発達を促すための、30のスキルを学ぶ	講義・グループワーク・ロールプレイ	2時間
第3回	対象が難しい子どもの行動が起きやすい場面を想定し、その行動が起きないように促すための計画的な行動を学ぶ		2時間
第4回	次の4回のセッションで学ぶスキルを家庭でうまく活用できるように話し合い、保護者自身がスキルを習得し、互いに励ましあう子育てをしていけるようサポートする	自宅での電話相談	毎週20分程度
第5回	子どもの行動の捉え方に変化について話し合い、プログラムで学んだスキルの練習を行う	講義・グループワーク・相談	2時間

・前半4回は必ずオラワークブックを使って、後半4回はワークブックを使わず行う
・第1回～第7回は個別の電話相談で、保護者の都合のよい時間帯にアットリナーが電話をかけ、家庭での子育てについて応じる

Table. Results of repeated measures ANOVA on children, caregivers, and family outcomes (N=54)									
Scale	Score range	Time				Effect (time effect)			
		Pre Mean (SD)	Post Mean (SD)	3 months after Mean (SD)	6 months after Mean (SD)	p ¹	p-value	effect sizes	
SDQ									
Emotional symptoms	0-10	2.68 (2.32)	1.98 (1.85)	1.87 (1.87)	2.03 (1.97)	4.77	*0.003	0.081	
Conduct problems	0-10	3.46 (2.19)	2.89 (1.83)	2.47 (1.87)*	2.79 (2.12)	2.79	*0.042	0.049	
Hyperactivity	0-10	6.00 (2.85)	5.11 (2.29)	5.04 (2.33)	5.34 (2.17)	2.09	*0.109	0.037	
Peer problems	0-10	4.84 (2.45)	4.19 (2.10)	3.84 (2.38)	4.30 (2.70)	2.28	*0.084	0.040	
Difficult behavior	0-40	17.38 (5.88)	14.17 (5.10)**	13.22 (6.00)**	14.55 (5.95)*	6.92	*0.001	0.108	
Prosocial behavior	0-10	4.07 (2.98)	4.50 (2.85)	4.87 (2.83)	4.89 (2.36)	1.31	*0.272	0.024	
PS									
Latency	1-7	2.79 (0.49)	2.29 (0.84)**	2.22 (0.72)**	2.23 (0.64)**	12.16	<0.001	0.184	
Over-reactivity	1-7	3.78 (1.17)	2.75 (1.21)**	2.84 (1.14)**	3.12 (1.19)*	10.38	<0.001	0.161	
Verbosity	1-7	3.65 (0.98)	2.65 (0.84)**	2.81 (1.01)**	2.91 (0.96)**	13.63	<0.001	0.202	
Total	1-7	3.27 (0.62)	2.50 (0.72)**	2.54 (0.78)**	2.63 (0.70)**	17.08	<0.001	0.240	
DASS									
Depression	0-42	8.25 (8.33)	4.72 (8.84)*	4.00 (6.17)**	6.58 (7.32)	4.23	*0.007	0.100	
Anxiety	0-42	5.51 (5.00)	3.74 (3.57)	3.39 (3.55)*	5.50 (5.33)	3.61	*0.022	0.085	
Sleeps	0-42	12.45 (7.43)	7.98 (5.85)	7.51 (6.72)	11.39 (8.82)	5.52	*0.001	0.127	
Total	0-126	26.22 (18.33)	16.43 (13.72)*	14.80 (16.86)*	22.97 (20.04)	5.21	*0.002	0.121	
FES									
Parenting is difficult	1-5	3.38 (0.98)	2.60 (0.90)**	2.51 (0.83)**	3.14 (1.07)	14.69	<0.001	0.217	
Parenting is rewarding	1-5	2.70 (0.97)	3.13 (0.80)*	3.27 (1.10)*	2.81 (1.14)	4.34	*0.006	0.076	
Parenting is demanding	1-5	3.43 (1.00)	2.72 (1.10)*	2.85 (1.18)	2.87 (1.11)	5.78	*0.001	0.098	
Parenting is stressful	1-5	3.38 (1.01)	2.63 (1.06)**	2.58 (1.01)**	3.16 (1.13)	8.28	<0.001	0.135	
Parenting is fulfilling	1-5	2.87 (1.12)	3.72 (1.04)	3.88 (0.93)	2.86 (0.78)	10.53	<0.001	0.227	
Parenting is enjoyable	1-5	3.22 (1.21)	2.41 (1.11)**	2.42 (1.02)**	2.78 (1.17)	8.60	<0.001	0.140	
Confidence in parenting	1-5	2.24 (0.90)	2.86 (0.72)**	2.78 (0.84)**	2.74 (0.79)**	9.91	<0.001	0.157	
Support for parenting	1-5	2.67 (0.96)	3.39 (1.04)**	3.11 (0.82)*	2.82 (1.07)	6.61	<0.001	0.111	
Agreement with partner regarding child discipline (n=51)	1-5	2.68 (0.99)	3.08 (1.06)	3.14 (0.89)	3.03 (1.00)	1.07	*0.386	0.021	
Support received from partner (n=51)	1-5	2.80 (1.03)	3.18 (1.09)*	3.18 (1.18)	3.05 (1.18)	1.09	*0.356	0.021	
Happiness with partner (n=51)	0-6	3.12 (1.29)	3.32 (1.24)	3.62 (1.23)	3.83 (1.13)	3.37	*0.020	0.063	
FES									
Family	12-60	37.55 (8.22)	42.07 (7.12)**	41.98 (6.66)**	40.11 (7.06)*	7.65	*0.001	0.128	
Service system	12-60	40.40 (5.28)	43.52 (6.41)**	43.29 (7.40)	43.55 (7.20)	4.10	*0.008	0.072	
Community/political	10-50	25.71 (6.57)	27.85 (6.29)*	27.86 (7.08)	26.88 (6.38)	2.08	*0.104	0.038	
Total	34-110	103.65 (15.45)	113.44 (13.49)**	112.97 (13.78)*	111.74 (18.50)	5.03	*0.002	0.087	

Adjusted significance for the baseline score in each measure									
*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001									
SD is given in square root measure. ANOVA adjusted for each baseline score									
ANCOVA, analysis of variance; SD, standard deviation									

ANOVA adjusted for the baseline score at each measurement time.
*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001.
F statistic in repeated measures ANOVA adjusted for each baseline score.
ANOVA, analysis of variance; SD, standard deviation.

急病時の子どもが医療機関を直ちに受診すべきか否かの判断を支援する携帯電話サイトの公開

図書館情報メディア系 教授 岩澤まり子

【ポスター】

1 概要

近年、小児救急診療の切迫が大きな社会問題になっている。その主な原因は、時間外診療における軽症小児患者の急増である。このため、図書館情報メディア系と医学医療系（小児科）は共同研究を行ない、子どもの急病の際に使用する受診判断支援システムを携帯電話サイトとして実験公開した。公開実験の結果、本携帯電話サイトの有用性と可能性が高く評価され、公開提供の要望が寄せられた。この要望に応えるため、本申請により、本携帯電話サイトの公開を継続した。

2 内容（実施内容・成果・地方自治体との連携等）

本申請により、開発した携帯電話サイトを次のURL (<http://kodomo-q.slis.tsukuba.ac.jp/>) において継続して公開した。トップページを図1に示す。

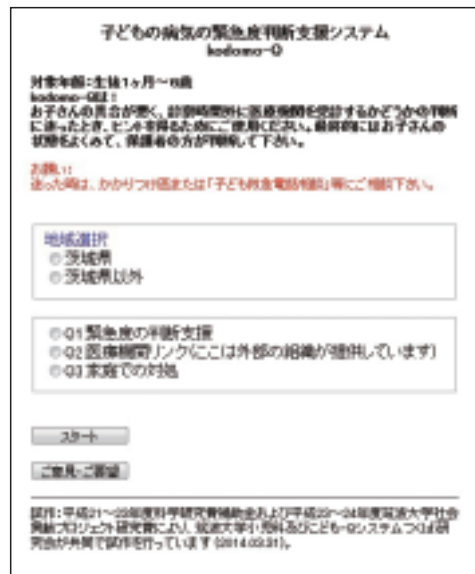


図1 トップページ

Q1の緊急度の判断支援を利用することにより、子どもの病状を適切に把握し、救急受診の必要性を家庭で判断できるようになる。利用者は急いでいることが多いため回答者数は少ない（n=25）が、サイトの評価についての回答を集計した結果を、表1に示す。

「参考に行動した」「役にたつ」「また使いたい」との評価が多く認められた。また「使いにくい」との意

表1 利用者による評価

質問内容	人数	質問内容	人数
参考に行動した	9	使いやすい	5
役にたつ	11	使いにくい	2
役にたたない	1	見やすい	2
また使いたい	13	見にくい	0
もう使わない	0		

見も認められたため、さらなる改善を目指したい。

緊急度の判断支援を補完するために、Q3の家庭での対処ページを実験公開した。スタートページを図2に示す。

症状を選択することにより、食事や水分補給、入浴、解熱や保温等についての情報を得ることができる。本ページは、つくば市保健所の乳幼児健診担当者に協力を頂き、作成した。また、筑波メディカルセンター病院小児科へは、本携帯電話サイトによる緊急度判断の妥当性検証を依頼した。本携帯電話サイトについて、MEDINFO2013（国際医療情報会議）にて発表を行なった（2013年8月）。

3 今後の展望

筑波メディカルセンター病院小児科の受診者を対象として本サイトの紹介を続け、利用者の増大を図るとともに、本サイトの視認性を高める方法についても検討する。本サイトにより相談相手のいない孤立した子育て中の家族の不安が解消し、救急外来への軽症な小児患者の集中が緩和され、小児科医の激務が解消されることが期待できる。

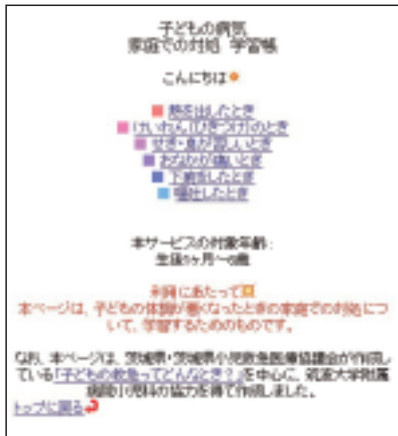


図2 家庭での対処のページ

平成25年度社会貢献プロジェクト

急病時の子どもが医療機関を直ちに受診すべきか否かの判断を支援する携帯電話サイトの公開

岩澤まり子(図書館情報メディア系・教授)
須磨崎亮(医学医療系・教授)

1. 概要

近年、小児救急診療の切迫が大きな社会問題になっている。その主な原因は、時間外診療における軽症小児患者の急増である。このため、図書館情報メディア系と医学医療系（小児科）は共同研究を行ない、子どもの急病の際に使用する受診判断支援システムを携帯電話サイトとして実験公開した。トップページを図1に示す。公開実験の結果、本携帯電話サイトの有用性と可能性が高く評価されたため、本申請により、本携帯電話サイトの公開を継続した。

図1. トップページ
(<http://kodomo-q.slis.tsukuba.ac.jp/>)

2. 実施内容及び成果

Q1の緊急度の判断支援を利用することにより、子どもの病状を適切に把握し、救急受診の必要性を家庭で判断できるようになる。利用者は急いでいることが多いため回答者数は少ない（n=25）が、サイトの評価についての回答を集計した結果を、表1に示す。

表1. 利用者による評価

質問内容	人数	質問内容	人数
参考に行動した	9	使いやすい	5
役にたつ	11	使いにくい	2
役にたたない	1	見やすい	2
また使いたい	13	見にくい	0
もう使わない	0		

「参考に行動した」「役にたつ」「また使いたい」との評価が多く認められた。また「使いにくい」との意見も認められたため、さらなる改善を目指したい。緊急度の判断支援を補完するために、Q3の家庭での対処ページを実験公開した。スタートページを図2に、「熱を出したとき」のページを図3に示す。



図2. 「熱を出したとき」ページ

家庭での対処スタートページから症状を選択することにより、食事や水分補給、入浴、解熱や保温等についての情報を得ることができる。本ページは、つくば市保健所の乳幼児健診担当者に協力頂き、作成した。本携帯電話サイトについて、MEDINFO2013（国際医療情報会議）にて発表を行なった（2013年8月）。

3. 今後の展望

筑波メディカルセンター病院小児科の受診者を対象として本サイトの紹介を続け、利用者の増大を図るとともに、本サイトの視認性を高める方法についても検討する。本携帯電話サイトにアクセスすることにより、子どもの病状を適切に把握し、救急受診の必要性を家庭で判断できる。すなわち、相談相手のいない孤立した子育て中の家族の不安が解消し、救急外来への軽症な小児患者の集中が緩和されて、小児科医の激務が解消されることになり、社会問題化している小児救急医療体制の問題を情報通信技術によって解決できると期待できる。救急受診の関するアドバイスが得られれば、軽症患者の時間外受診が抑制され、小児救急医療の窮状は一変する可能性があり、筑波大学発の社会貢献として大きな反響が期待できる。

視覚に障害のある乳幼児と家族等への子育て支援事業 ～育児学級ミニ講座～

附属視覚特別支援学校 副校長 星 祐子

【ポスター】

1 概要

視覚に障害のある0歳児から2歳児までの乳幼児とその家族・関係機関等を対象に以下の支援事業を展開した。

○週1回の定期的な育児学級

グループ活動、見えや発達についての相談・支援、育児に関する相談

○ミニ講座の開設

テーマを設定して講座を開設

子育て、障害理解・支援等に関する情報発信

○地域の保育園等への訪問相談の実施

○教育相談・育児学級紹介リーフレットの作成・活用

ミニ講座においては、地域の保育士、保健師、看護師、乳幼児施設職員など乳幼児期から療育・支援に係る専門職の方々に参加いただき、好評を得ている。講座の内容に応じて、大学教員、玩具協会等の団体の協力を得て、実施している。



育児学級ミニ講座の様子

2 内容（実施内容・成果・地方自治体との連携等）

○育児学級

0歳・1歳児グループ 27回実施 のべ261名参加

2歳児グループ 27回実施 のべ93名参加



育児学級の様子

○地域の保育園等への訪問相談

0歳児から2歳児保育への訪問相談及び3歳児入園に向けて幼稚園、保育園への訪問相談を実施した。

○リーフレットの作成・活用

医療・福祉・保健関係の方を対象にした教育相談・育児学級紹介のリーフレットを作成し、活用を図ってきたが、眼科医からの紹介により0歳児からの超早期の相談が増えてきている。



○ミニ講座

10回実施 のべ392名参加

参加者 保護者、保育園・療育センター保育士、保健師、乳幼児施設職員 その他

テーマ 「からだを動かして遊ぼう」
「視覚に障害のあるお子さんの子育て」
「手や指を使ってたくさん遊ぼう」
「視覚に障害のあるお子さんの見え方」等

3 今後の展望

子育て支援については社会の中で取り組んでいくべき内容であるが、特に障害のあるお子さんとその保護者・関係者への支援は超早期段階から求められていることを実感している。今後も多様な社会的ニーズに応えていきたい。

平成 25 年度社会貢献プロジェクト

視覚に障害のある乳幼児と家族等への子育て支援事業 ～育児学級ミニ講座～

星 祐子（附属視覚特別支援学校・副校長）

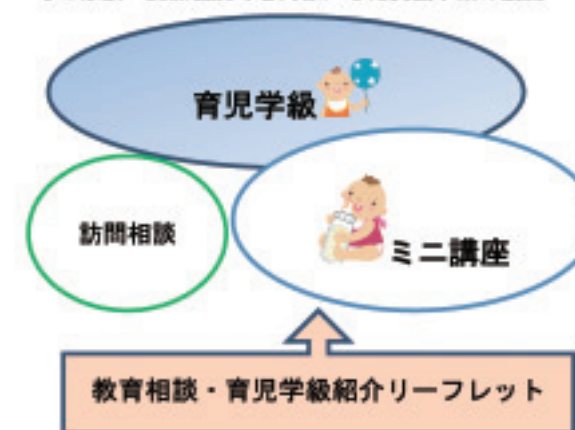
高見 節子・杉本 真美・佐々木 麻実（附属視覚特別支援学校）

1. 事業概要

視覚に障害のある0歳児から2歳児までの乳幼児とその家族・関係機関等を対象にした支援事業の展開

ミニ講座テーマ：

「からだを動かして遊ぼう」
「視覚に障害のあるお子さんの子育て」
「手や指を使ってたくさん遊ぼう」
「視覚に障害のあるお子さんの見え方」等



○地域の保育園等への訪問相談

0歳児から2歳児保育への訪問相談及び3歳児入園に向けて幼稚園、保育園への訪問相談の実施

2. 事業内容

○育児学級

0歳・1歳児グループ 27回実施 のべ261名参加

2歳児グループ 27回実施 のべ93名参加



○リーフレットの作成・活用

医療・福祉・保健関係の方を対象にした教育相談・育児学級紹介のリーフレットを作成・活用



○ミニ講座

10回実施 のべ392名参加

参加者：保護者、保育園・療育センター保育士、保健師、乳幼児施設職員 その他

3. 今後の課題

○多様なニーズに応える包括的な乳幼支援の取り組み

○関係機関との更なる連携

視覚障害アスリートに対する鍼灸マッサージによる競技支援

人間系 教授 宮本 俊和

【ポスター】

1 概要

視覚障害スポーツ（ブラインドスポーツ）は、パラリンピックで多くのメダルを獲得して来たが、競技支援体制はオリンピックに比べ不十分である。そのため、本プロジェクトでは、視覚障害パラリンピアンと競技指導者から現在抱えている課題を聴取するとともに、鍼灸マッサージの競技支援のあり方を検討した。

2 内容

「パラリンピックにおける競技支援-視覚障害スポーツの競技支援の課題と鍼灸マッサージ-」シンポジウムを平成26年3月9日13時30分から16時に東京キャンパス文京校舎で、①水泳およびゴールボール競技指導者、②日本パラリンピアンズ協会会長、③柔道選手、④陸上競技選手をシンポジストとし討議をおこなった。その結果は以下のとおりである。



講座名	回数(回)	延べ人数(人)
シンポジウム：「パラリンピックにおける競技支援-視覚障害スポーツの競技支援の課題と鍼灸マッサージ-」	1	70

1) パラリンピック選手育成 指導者側から見た問題点・課題

水泳は世界のレベルアップが著しく、今までのような学校のクラブ活動の延長では勝てない。ゴールボールは社会人中心に構成され、練習場所に通える範囲での就職でないと選手を続けにくい。両方とも、個人の経済面での負担が大きく、練習場までの移動と安全の確保、障害特性に理解ある指導者や施設整備の充実が必須である。

2) パラリンピアン競技支援の現状とブラインドスポーツの課題

選手が競技環境を確保するには、指導者やボランティア育成、情報を提供するサポート体制が必須である。視覚障害者アスリートの外傷・障害予防やパフォーマンス向上には、視覚特別支援学校や大学との連携が必要である。

3) 柔道選手の立場からの競技支援の課題

海外勢の実力が向上し、メダル獲得が厳しくなっているが、視覚障害者柔道が海外で十分に普及したことが大きな理由である。新しい選手の発掘と競技力向上が、他の視覚障害者スポーツと共通する問題である。

4) 陸上競技選手の立場と理療科教員の立場からの競技支援の課題

視覚障害者陸上競技選手は、練習場所・時間・伴走者の確保が充実しているべきである。盲学校理療科で鍼灸マッサージの競技支援を学ぶ態勢が整えられれば、障害と障害者スポーツへの認知度の高い人材による競技支援が可能ではないか。

3 地方自治体等との連携

視覚障害スポーツ関係者との連携を進めるためにシンポジウムを開催し、全国の盲学校および視覚障害者スポーツ関連団体等に報告書を配布した。

4 今後の展望

視覚障害アスリートの練習環境や指導者育成には、パラリンピアンとの連携と地域スポーツとの連携が重要である。鍼灸マッサージによる競技支援では、スタッフ養成のための、講習会を実施する。

今後、スポーツ医学、障害科学、附属視覚特別支援学校、パラリンピアンズ協会との連携を推進する。



筑波大学
University of Tsukuba

平成25年度 社会貢献プロジェクト

視覚障害アスリートに対する鍼灸マッサージによる競技支援

宮本俊和（理療科教員養成施設・教授）、和田恒彦（理療科教員養成施設・准教授）、徳竹忠司（理療科教員養成施設・講師）、清田淳（理療科教員養成施設・講師）、佐藤卓弥（人間総合科学研究科・博士課程3年）

概要

パラリンピックの中でも、視覚障害スポーツ（ブラインドスポーツ）は、多くのメダルを獲得して来た。しかし、ブラインドスポーツの競技支援は、オリンピックに比べ不十分である。本プロジェクトでは、視覚障害パラリンピアンと競技指導者から現在抱えている課題を聴取するとともに、鍼灸マッサージによる競技支援のあり方を検討した。



実施内容及び成果

「パラリンピックにおける競技支援-視覚障害スポーツの競技支援の課題と鍼灸マッサージ-」シンポジウム
上記のテーマで、平成26年3月9日13時30分から16時に東京キャンパス文京校舎で、①水泳およびゴールボール競技指導者、②日本パラリンピアンズ協会会長、③柔道選手、④陸上競技選手をシンポジストとし討議をおこなった。その結果は以下のとおりである。

●パラリンピック選手育成 指導者側から見た問題点・課題



水泳は世界のレベルアップが著しく、今までのような学校のクラブ活動の延長では勝てない。ゴールボールは社会人中心に構成され、練習場所に通える範囲での就職でないと選手を続けにくい。両方とも、個人の経済面での負担が大きく、練習場までの移動と安全の確保、障害特性に理解ある指導者や施設整備の充実が必須である。



●パラリンピアン競技支援の現状とブラインドスポーツの課題

選手が競技環境を確保するには、指導者やボランティアの育成および情報を提供するサポート体制が必須である。視覚障害があるアスリートの外傷・障害予防やパフォーマンス向上には、視覚特別支援学校や大学との連携が必要である。

●柔道選手の立場からの競技支援の課題

海外勢の実力が向上し、メダル獲得が厳しくなっているが、視覚障害者柔道が海外で十分に普及したことが大きな理由である。新しい選手の発掘と競技力向上が、他の視覚障害者スポーツと共通する問題である。



●陸上競技選手の立場と理療科教員の立場からの競技支援の課題

視覚障害者陸上競技選手は、練習場所・時間・伴走者の確保が充実しているべきである。盲学校理療科で鍼灸マッサージの競技支援を学ぶ態勢が整えられれば、障害と障害者スポーツへの認知度の高い人材による競技支援が可能ではないか。

地方自治体との連携

視覚障害スポーツ関係者との連携を進めるためにシンポジウムを開催し、全国の盲学校および視覚障害者スポーツ関連団体等に報告書を配布した

今後の展望

視覚障害アスリートの練習環境や指導者育成には、パラリンピアンとの連携と地域スポーツとの連携が重要である。鍼灸マッサージによる競技支援では、スタッフ養成のための、講習会を実施する。

その他

今後、スポーツ医学、障害科学、附属視覚特別支援学校、パラリンピアンズ協会との連携を推進する。

希死回生 ～学生によるつくば地域自殺予防プロジェクト～

人間学群 心理学類4年 高橋あすみ

1 概要

我々は自殺問題の誤解と偏見を解き、筑波大学内の自殺予防対策の環境づくりに貢献することを目的とした学生団体である。設立から啓発活動を柱に活動してきた。今回、社会貢献プロジェクトの一環として、啓発活動にとどまらず、自殺予防について知る機会、自らのメンタルヘルスについて考える機会を広く提供するため、①セルフ・ケアのセミナー、②映画上映会、③愚痴言い合いの会の3つのイベントを企画・実行した。

2 内容

①「七転び八起き～こころとからだのセルフケア～」

(6月開催)

「最近ちょっと疲れた」「やる気が出ない」という学生を募集し、体育系教授で臨床心理士の坂入洋右教授を講師として招き、リラクゼーションの実践講座形式をとった。講座のあとは、参加者同士で交流できる場を設け、好評を得られた。



坂入先生による講義の様子

②「Saving 10,000 ～自殺者1万人を救う戦い～上映会 in つくば」(10月開催)

『“Saving 10,000”～自殺者1万人を救う戦い～』は、アイルランド人レネ・ダイグナンさんの作成した日本の自殺問題のドキュメンタリー映画である。そこで、映画の上映とレネさんによるご講演のイベントを実施。また、アンケートでは「我々一人一人が問題意識を持つ必要がある」「(自殺は)日本人全体で共有すべき問題」「一緒に考えたい、何か自分にできるこ

とをしたい」など、自殺が個人の問題ではなく、社会全体の問題として捉える良い機会になった。等の感想を多くいただいた。



質疑応答の様子

③「院生リアル～あつまる、しゃべる、つながる～」(2月開催)

学群生に比べ閉鎖的な環境にある大学院生を対象に、研究室の「中身」を語り合うことで、わかりあい、ストレス発散をし、専攻以外の友達作りの機会を提供した。自分の研究室はまだまだだと思ったという感想が多くあった。



フリートーク中の様子

3 今後の展望

今回、広報が十分とは言えず、それぞれ参加者数を予定通り集められなかったが、参加者の満足度は高く、①③のようなセルフ・ケアや、居場所づくりの活動、②のような参加側が気軽な啓発活動が有効であることが示唆された。今後も同企画を実施し、自殺予防につながる活動を継続していきたい。

【ポスター】

平成25年度社会貢献プロジェクト

希死回生～学生によるつくば地域自殺予防プロジェクト～

代表者：高橋あすみ(心理学類4年、希死回生～自殺予防のための啓発活動～プランナー)

日本では自殺が大きな社会問題で、自殺が身近にある人も少なくありません。しかし「死にたいという人は本当は死なない」「自殺する人の意志は弱い」という誤解や偏見が、日本には強く根付いている状況です。誤解と偏見の解消は、今後自殺予防対策を進めていく上で欠かせません。そのために、自殺問題への関心や正しい知識を持ってもらう機会が必要となります。また、自分自身のメンタルヘルスを維持、増進できるような試みも自殺予防になくはなりません。今回はこのような背景から、筑波大学のT-ACTシステムを使って発足した「希死回生」の学生で、3つのイベントを企画・実施しました。

6月開催

七転び八起き～こころとからだのセルフケア～

「最近ちょっと疲れた」「やる気が出ない」という学生を対象にした、リラクゼーションの実践講座を実施しました。体育系教授で臨床心理士の坂入洋右教授を講師として招き、1時間の間に、坂入先生からストレスとは何か?ということや、どうしたら心身健康でいられるかなど、また呼吸法のように実際に自分でできるリラクゼーションを教わりました。講座のあとは、集まった人と「自分の息抜き法等」を話し合ったり、お茶菓子を食べたりしながら、参加者同士で交流できる場を設けました。また、自殺予防の啓発資料も配布しました。今回約15名の方が参加してくださり、「楽しかった」「役に立った」など好評でした。今後はもっと多くの方にもセルフ・ケアを身に付ける機会を提供したいと思います。



“Saving 10,000”～自殺者1万人を救う戦い～上映会 in つくば

10月開催



映画『“Saving 10,000”～自殺者1万人を救う戦い～』制作者のレネ・ダイグナンさんをお招きし、映画の上映とレネさんによるご講演のイベントを企画・実施しました。40人以上の方から申込みをいただき、当日は36人の学内外の方が参加してくれました。映画は1時間弱で、鑑賞後にレネさんのご講演を1時間行いました。レネさんの情熱的な訴えかけに対して、質疑応答も活発に行われました。アンケートには2/3の人が回答してくれ、「我々一人一人が問題意識を持つ必要がある」「(自殺は)日本人全体で共有すべき問題」「一緒に考えたい、何か自分にできることをしたい」「自殺対策のための戦いとは、自殺者の内面で起きているであろうことのみならず、自殺に人を追い込む環境や状況について知り、自分の頭で自分ができる行動を考えることであると気づかされました。」など、自殺が個人の問題ではなく、社会全体の問題として捉える良い機会になった。というような感想を多くいただきました。組織としての達成度も高く、非常に有意義なイベントとなりました。

2月開催

院生リアル～あつまる、しゃべる、つながる～

大学院生を対象に、「愚痴を言い合う会」として実施しました。学群生に比べ閉鎖的な環境にある大学院生さんに、研究室の「中身」を語り合うことで、わかりあい、ストレス発散をし、専攻以外の友達作りの機会を提供するということを目的としていました。9名の院生さんが参加し、希死回生のメンバーと合わせて約15名で2時間半楽しみました。希死回生のメンバーはメディエーターとしてトークに交じったり、話を聴くなどしましたが、プログラム後半には参加者同士で楽しく語り合う場面が見られました。参加者の話す内容は、研究はもとより、研究室という狭い人間関係、特に指導教員のエピソードを話される方が多かったです。また、就職活動について心配している方もいました。会の終盤は、考案した「院生の主張」(★)というゲームを実施し、非常に盛り上がりました。全体を通して、自分の研究室はまだマシだから頑張れる、と思った方が多かったようなので、その頑張りを支えられるように、このような企画を定期的に行っていければと思います。★研究室での仰天エピソードを語ってもらい、他の院生さんに「わかるわかる」or「マジで?」の評価をもらう。「マジで?」評価を最も多く得られた方に、これからも院生生活無理せず頑張ってください、という意味を込めてリラクゼーショングッズをプレゼントしました。



ゆめ花火

医学群 医学類6年 加藤愛香里

【ポスター】

1 事業の概要

筑波大学附属病院に入院している子どもたちが「夢の花火」をテーマに描いた絵を、筑波大学学園祭後夜祭で実際の「ゆめ花火」として打ち上げる企画である。打ち上げ日の2013年11月4日は、花火の絵を描いた患児、および附属病院において診療中の患児とその家族を招待し、花火を筑波大学内の教室で鑑賞した。

2 内容

13家族43名の参加者に集まっていただき、他に医師3名、看護師3名、保育士3名にご参加いただいた。また多数の学生団体と協力して行った本企画は、総勢20名の学生が集まった。

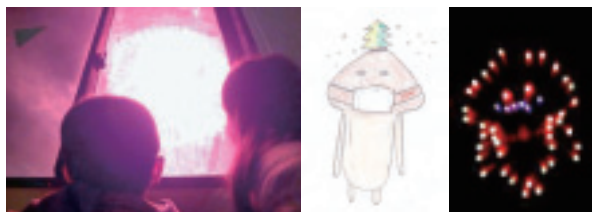
◆企画の詳細

当日は18時15～30分に外来に集合し、子どもたちは「キラボン」という名の工作を行った。絵を描けば完成し、光って身につけられるものだ。

外来から、花火鑑賞教室まで移動するためのバスには学生スタッフで飾り付けを施した。参加者はバスで移動し、ちょっとしたお出かけのような気分を味わった。

予め飾り付けておいた教室に着き、全員での記念撮影を行った。病院長の五十嵐先生からお話をいただき、打ち上がる花火の原案（子どもたちの絵）の紹介を、紙芝居のようにお話形式で行った。自分の絵が紹介されると、子どもたちは嬉しそうにしていた。

20時10分から5分間、全53発のゆめ花火の打ち上げがあり、鑑賞した。ハート、ト音記号などのかわいいモチーフから、電車やクジラ、なめこなど、一風変わったイラストまで、様々な子どもたちの絵が夜空に打ち上がった。また学園祭のフィナーレ花火も鑑賞した。近くで見る花火は、音、大きさ共に迫力があり、子どもたちは歓声をあげていた。



花火だ！

原画「花粉症なめこ」と実際の花火

鑑賞後はバルーンアートをプレゼントとして配布し、バスで帰院し、解散した。

◆子どもたちの感想

満足度をフェイススケールにて表してもらったところ、全ての参加組が一番笑顔の顔に丸をつけていた。「自分でかいた絵が花火になってうれしかった」「予想以上に花火がすごくて感動的だった」「すばらしいイベントでした」「こんなに嬉しいことは久しぶりでした」「来年もぜひ継続してください」など多数のご意見をいただいた。

◆地方自治体との連携

筑波大学附属病院との連携を図り、闘病中の子どもたちに夢と希望を与えるイベントを行うことができた。

また附属病院内でも小児病棟の医師、看護師、保育士をはじめとする多職種の方々の連携をいただいた。さらに病院総務課、周産期キャリアサポート室には安全な運営を実現する上で多大なるご協力をいただいた。

ゆめ花火の広報のみでなく、小児病棟の子どもたちの療養環境への問題提起を盛り込んだリーフレットを病院内各所に設置し、病院を訪れる市民に病を抱える子どもたちへ目を向けてもらう機会を提供することができた。またリーフレットを見てゆめ花火をご支援くださる温かい声も多くいただくことができた。

花火当日は学園祭に参加していた多くの学生、また近隣住民の方に花火を鑑賞し、楽しんでいただくことができた。

3 今後の展望

ゆめ花火は、闘病中の子どもたちに夢と希望を与えたいという想いから集まった、筑波大学医療系有志団体「つくばけやきっず」が企画、実行した。つくばけやきっずとして、来年以降のゆめ花火の継続及び、その他様々な企画を行っていこうと考えている。現在、新しいメンバーを加え、より幅広い活動を行う準備段階にある。

また、社会貢献プロジェクト採用段階で指摘いただいた、今後の資金に関しては、病院内外での活動周知・募金活動やファンレイジングイベントを行うなど、学生自らが集められるよう努力していく次第である。

平成25年度社会貢献プロジェクト

ゆめ花火

つくばけやきっず
医学群医学類6年 加藤 愛香里



◆ゆめ花火とは？
筑波大学附属病院に入院している子どもたちが「夢の花火」をテーマに描いた絵を、筑波大学学園祭後夜祭で実際の『ゆめ花火』として打ち上げる企画です。打ち上げ日の2013年11月4日は、花火の絵を描いた患児、および附属病院において診療中の患児とその家族を招待し、花火を筑波大学内の教室で鑑賞しました。13組43名にご参加いただきました。

◆当日の流れ

花火鑑賞前に、子どもたちは「キラボン」という名の工作を行った。絵を描けば完成し、光って身につけられるものです。

外来から、花火鑑賞教室まで移動するためのバスには学生スタッフで飾り付けを施しました。参加者はバスで移動し、ちょっとしたお出かけのような気分を味わいました。

予め飾り付けておいた教室に着き、全員での記念撮影を行いました。病院長の五十嵐先生からお話をいただき、打ち上がる花火の原案（子どもたちの絵）の紹介を、紙芝居のようにお話形式で行いました。自分の絵が紹介されると、子どもたちは嬉しそうにしていました。



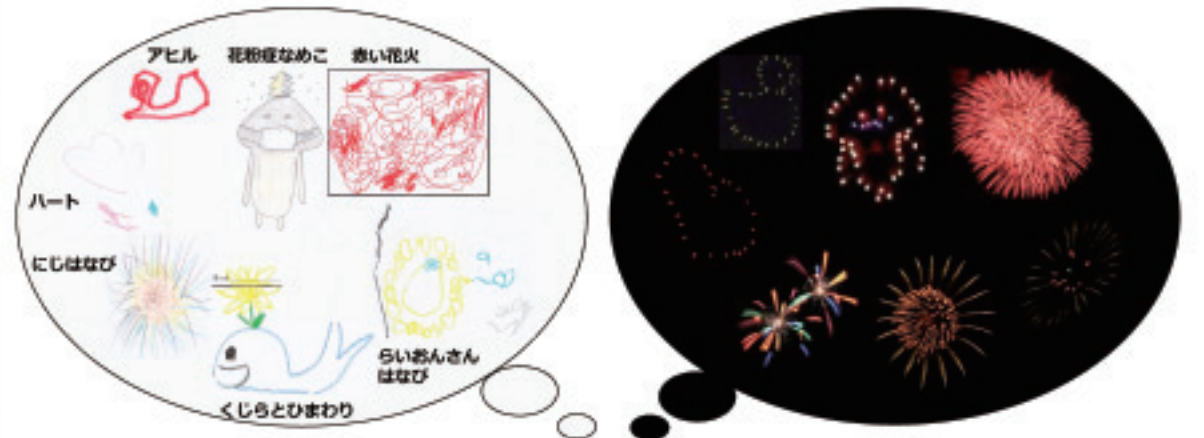
20時10分から5分間、全53発のゆめ花火の打ち上げがあり、鑑賞しました。ハート、ト音記号などのかわいいモチーフから、電車やクジラ、なめこなど、一風変わったイラストまで、様々な子どもたちの絵が夜空に打ち上がりました。また学園祭のフィナーレ花火も鑑賞しました。近くで見る花火は、音、大きさ共に迫力があり、子どもたちは歓声をあげていました。

鑑賞後はバルーンアートをプレゼントとして配布しました。男の子は剣のアートを振り回して喜んでいました。

バスで帰院し、解散しました。



◆打ち上がった花火の紹介（左：子どもたちの絵とタイトル 右：それに対応した花火）



◆子どもたち/保護者の感想（終了後アンケートより）

□アンケート1.お子さまにお聞きします。
ゆめ花火の満足度はどれくらいですか？1つ丸をつけてください。



→全ての参加者に、満足度の最も高い評価をいただきました。

□アンケート5.全体を通して感想をお願いします。

- ・楽しくすごせました。ありがとうございました
- ・自分でかいた絵が花火になってうれしかった。
- ・とても楽しい時間をありがとうございました。こんなにうれしい事は久しぶりでした。
- ・すばらしいイベントでした。ぜひ続けてください。
- ・予想以上に花火がすごくて感動的だった。
- ・子どもも親もとても楽しめました。ありがとうございました！！
- ・子どもが美しく笑顔で過ごしている姿を見れば本当にうれしく思います。
- ・運命に預かっていただいた皆様へ心から感謝申し上げます。ありがとうございました。子どもは笑顔が一番、大人は入浴中のおもちゃに会えてはじめてからおわりまでテンション高く楽しめました。ありがとうございました。また来年も参加したいなあ
- ・学生のみなさんお疲れ様でした。今年初めての参加でしたが、とても楽しかったです。
- ・とても楽しかったです。ありがとうございました。
- ・花火がすごくキレイで来年もつづけて欲しいです。大きな花火でびっくりしました。
- ・楽しかったです●おつかれさまでした！
- ・良かったです（病院内にお子さんの家で「ありがとう。たのしかったです。」）
- ・すごく子どもたちがうれしそうでした自分の書いた花火が上がるなんて、一生の宝物のような経験だったと思います。本当にありがとうございました。どうかこれからも毎年子どもたちの夢をかなえてあげてください。
- ・想像以上によかったです。大変でしたが継続したいと思います。

◆ゆめ花火の評価

「ゆめ花火」は平成25年度下半期T-ACT最優秀賞を受賞いたしました。
筑波大学附属病院のホームページ、筑波大学の広報誌である「Tsukuba Communications」、『Students』、また筑波大学医学同窓会である桐医会の広報誌『桐医会会報』に実施報告を載せていただきました。

◆最後に

私達は、闘病中の小児患者に夢と希望を与えたい、そんな想いから集まった筑波大学医療系学生団体「つくばけやきっず」として活動しています。
昨年度から団体として発足した私達は、社会貢献プロジェクトに採択していただき、花火製作費を補助していただきました。誠にありがとうございました。
今年度は新たなメンバーを加え、より幅広い活動を精力的に行っていく所存です。活動報告はブログやfacebookで行っております。ぜひ「つくばけやきっず」でぜひ検索してみてください。これからもよろしくお願ひいたします！



柔道の再興と学校必修化を支援する「東北 3 県柔道指導キャラバン」

体育系 准教授 増地 克之

1 概要

平成 24 年度から継続して実施している、嘉納治五郎以来の伝統と歴史を誇る本学の柔道方法論研究室教員ならびに卒業生を含む柔道部員が岩手、宮城、福島各県各地に出向き、現地の中核を担う柔道場において、①子ども柔道教室、②現職の体育教員に対する柔道指導法の講習会を本年度も引き続き行なうことにより、復興のための地域活力の向上を図ると共に、学校教育現場が抱える武道必修化に関する不安軽減にも尽力する。

2 内容

東日本大震災発生から 2 年 9 ヶ月が経過した被災 3 県において道場再開が続いており、本事業により復興の後押しが期待できる。派遣選手にはロンドンオリンピックおよび世界選手権出場選手も加わる予定であり、子どもに限らず地域の柔道関係者もその来訪を望んでいるのではないだろうか。また、本学柔道方法論研究部の教員はいずれも国際級の柔道家で指導実績も豊富であるため、本事業を通じ日本柔道の伝統と共に最先端の指導法の伝授が期待されている。加えて参加を予定する柔道部員の多くは、体育専門学群において柔道の指導法を研究しているため、日頃の研究成果の応用・発揮、指導力の研鑽、新たな研究課題の発見など、今後の学業への好循環が期待される。

本事業では、一日目に岩手県大船渡市の「時習館道場」を訪問し、二日目に宮城県気仙沼市の気仙沼柔道スポーツ少年団を訪問した。本事業の内容としては、参加した福見友子（平成 19 年度卒）が背負投および小内刈、小林優希（体育研究科 1 年次）が大内刈、藤田湧平（同 1 年次）が大外刈、川戸湧也（体育専門学群 4 年）が内股、近藤俊（同 4 年）が一本背負投、菅原歩巴（同 4 年）が払腰、佐々木千鶴（同 1 年）が袖釣込腰を紹介し、その後巡回して個別指導を行った。その後行った乱取では子ども達全員が指導者及び選手と 1 本（2 分間）以上乱取を行った。

平成 24 年度に同様の事業を岩手県大船渡市の時習

館道場で行い、周辺の各道場・学校より指導者およそ 20 名、子ども達がおおよそ 100 名の参加であったが、本事業では訪問した道場が増えた事もあり、約 2 倍の 200 名の参加があった。このことから当該地区の柔道の復興に与える影響は昨年度の事業よりも大きいと考えられ、また、多くの指導者の参加が見られた事からも柔道指導法の要点の伝達が行えたと考えられ、学校教育現場が抱える武道必修化に関する不安軽減にも貢献できたものと考えられる。



時習館道場での開会式の様子



福見（H19 年度卒）の背負投の指導

3 今後の展望

今後は同様の事業を継続的に実施することで被災地域の少年柔道の活性化を通しての地域活力の向上、ならびに学校教育現場における柔道指導法の伝授をおこない、柔道をおこなう環境のさらなる復興を目指し、地域の道場を拠点に学校の教育現場におけるより一層の柔道環境の充実をねらう。

【ポスター】

柔道の再興と学校必修化を支援する「東北 3 県柔道指導キャラバン」

被災地域の柔道環境 再興から“充実”へ

代表者：増地 克之（体育系・准教授）
参加者：桐生 習作（体育センター・特任助教）
福見 友子（了徳寺学園職）
小林 優希、藤田 湧平（人間総合科学研究科）
川戸 湧也、近藤 俊、菅原 歩巴、佐々木 千鶴（体育専門学群）

【概要】

東日本大震災で被災した福島・宮城・岩手の 3 県において、発生から 2 年 9 ヶ月が経過し各地で道場の再開が行なわれているが、地域の道場を取り巻く環境は被災以前と比較してまだ十分に復興しているとはいえない現状がある。加えて、学校教育現場においては柔道（武道）の必修化がなされ柔道を専門としない保健体育科の教員においてはその指導法などの各種不安を抱えているという現状もある。そこで、

①少年柔道教室

②保健体育科教員に対する柔道指導法講習会

上記の 2 事業を実施し、該当地域の柔道環境の充実に尽力するものである。



図 1 岩手県大船渡市「時習館」での開会式



図 2 気仙沼柔道スポーツ少年団での指導

【内容と今後の展望】

本事業では柔道部監督を代表に体育専門学群および人間総合科学研究科に所属する柔道部の学生に加え、本学の卒業生でロンドンオリンピックおよび世界選手権出場の福見友子氏を派遣した。

本学柔道方法論研究室における日頃の柔道指導法の研究成果の応用・発揮によって当該地域において最先端の柔道指導法の伝授が可能であり、また学生にとっては新たな研究課題の発見など学業への好循環が期待できる。

本事業では、一日目に岩手県大船渡市の「時習館道場」を訪問し、二日目に宮城県気仙沼市の気仙沼柔道スポーツ少年団を訪問した。本事業の内容としては、参加した福見友子氏が背負投および小内刈、小林優希が大内刈、藤田湧平が大外刈、川戸湧也が内股、近藤俊が一本背負投、菅原歩巴が払腰、佐々木千鶴が袖釣込腰を紹介し、その後巡回して個別指導を行った。その後行った乱取では子ども達全員が指導者及び選手と 1 本（2 分間）以上乱取を行った。

今後は同様の事業を継続的に実施することで被災地域の少年柔道の活性化を通しての地域活力の向上、ならびに学校教育現場における柔道指導法の伝授をおこない、柔道をおこなう環境のさらなる充実を目指し、地域の道場を拠点に学校の教育現場におけるより一層の柔道環境の充実をねらう。



図 3 福見氏の背負投の指導

復興作業およびスポーツ振興を通じた被災地での支援活動

体育系 助教 奈良 隆章

【ポスター】

1 概要

平成25年12月22、23日の2日間にわたり岩手県大船渡市を訪れ、22日は大船渡高校野球部員を対象に合同練習および技術指導を行った。翌23日は大船渡中学校野球部員を対象に野球教室と昼食会を行った。

本プロジェクトは本学体育系増地克之准教授が代表を務める「大船渡・気仙沼震災復興支援活動における小中高生を対象とした柔道教室」と連携して行った。複数のスポーツ種目が同時に教室を開催したことは、スポーツ振興の観点において大変有意義であった。

2 内容

本プロジェクトは、本学体育会硬式野球部による野球を通じたスポーツ振興を主目的として実施された。初日は大船渡高等学校で投手・捕手・内野手・外野手の4グループに分かれて練習を行った。指導内容は打撃・守備に関するものであった。各グループに教員と学生がつき、計3時間の練習を行った。本学硬式野球部員を交えての体力トレーニングも行い、トレーニングの講習を行うと同時に交流もはかることが出来た。

大船渡市は現在もお震災の影響が残っており、グラウンドの状況をはじめ十分な練習環境が整っているとは言い難い。2日目に指導を行った大船渡中学校も例外ではなく、校庭の使用ができない状況であった。そのため野球教室では「時間や場所の制約を受ける中でいかに効果的な練習を行うか」というテーマの下、練習方法や取り組む姿勢について指導を行った。新たな練習方法を伝えられたことはもとより、学生野球最高峰でプレーする大学野球選手の姿を目に焼き付けてもらえたことは今後の発展に向けて大きな成果であったと言える。

本事業は、大船渡中学校および大船渡高等学校の教員、保護者の皆様と連携を図ることによって実施することができた。また本増寺（大船渡市内）の僧侶である木村文律氏には会場準備やスケジュール調整等でご尽力いただいた。

3 今後の展望

本年3月にも大船渡高等学校野球部と合同練習を行うなど交流が続いている（於：筑波大学）。被災地の早期復興に微力ながらも貢献できるよう、野球を通じた支援活動を続けていきたい。今後は活動範囲の拡大や活動頻度の増加を視野に入れている。

また、本学硬式野球部は過去に宮城県亘理郡山元町でがれき撤去等の作業をした経験がある。野球の指導という枠にとらわれず、様々な形で被災地での支援活動を行っていきたい。



大船渡高校野球部部員との集合写真



大船渡中学校野球部部員との集合写真

平成25年度社会貢献プロジェクト

復興作業およびスポーツ振興を通じた被災地での支援活動

奈良 隆章（体育系・助教）、川村 卓（体育系・准教授）

1. 概要

平成25年12月22、23日の2日間にわたり岩手県大船渡市を訪れ、22日は大船渡高校野球部員を対象に合同練習および技術指導を行った。翌23日は大船渡中学校野球部員を対象に野球教室と昼食会を行った。

本プロジェクトは本学体育系増地克之准教授が代表を務める「大船渡・気仙沼震災復興支援活動における小中高生を対象とした柔道教室」と連携して行った。複数のスポーツ種目が同時に教室を開催したことは、スポーツ振興の観点において大変有意義であった。

2. 内容

本プロジェクトは、本学体育会硬式野球部による野球を通じたスポーツ振興を主目的として実施された。

初日は大船渡高等学校で投手・捕手・内野手・外野手の4グループに分かれて練習を行った。指導内容は打撃・守備に関するものであった。各グループに教員と学生がつき、計3時間の練習を行った。本学硬式野球部員を交えての体力トレーニングも行い、トレーニングの講習を行うと同時に交流もはかることが出来た。

大船渡市は現在もお震災の影響が残っており、グラウンドの状況をはじめ十分な練習環境が整っているとは言い難い。2日目に指導を行った大船渡中学校も例外ではなく、校庭の使用ができない状況であった。そのため野球教室では「時間や場所の制約を受ける中でいかに効果的な練習を行うか」というテーマの下、練習方法や取り組む姿勢について指導を行った。新たな練習方法を伝えられたことはもとより、学生野球最高峰でプレーする大学野球選手の姿を目に焼き付けてもらえたことは今後の発展に向けて大きな成果であったと言える。

本事業は、大船渡中学校および大船渡高等学校の教員、保護者の皆様と連携を図ることによって実施することができた。また本増寺（大船渡市内）の僧侶である木村文律氏には会場準備やスケジュール調整等でご尽力いただいた。

3. 今後の展望

本年3月にも大船渡高等学校野球部と合同練習を行うなど交流が続いている（於：筑波大学）。被災地の早期復興に微力ながらも貢献できるよう、野球を通じた支援活動を続けていきたい。今後は活動範囲の拡大や活動頻度の増加を視野に入れている。

また、本学硬式野球部は過去に宮城県亘理郡山元町でがれき撤去等の作業をした経験がある。野球の指導という枠にとらわれず、様々な形で被災地での支援活動を行っていきたい。



図1 大船渡高校野球部部員との集合写真



図2 大船渡中学校野球部部員との集合写真

社会貢献活動ポスター展示発表会2014

平成 26 年 7 月 15 日、筑波大学総合研究棟 A 棟 1 階において、第 3 回社会貢献活動報告会を開催いたしました。この報告会は、つくば・地域連携推進室及び室内に設けられたつくばエコシティ推進グループが、平成 25 年度に行われた社会貢献プロジェクトの各課題を対象に、学内外への活動発信と活動間の交流活性化のために実施したものです。今年度で 3 回目を迎える本報告会は、当日、90 名を超える参加者が各々の取り組みについて説明し、参加者同士で活発な意見交換が行われました。

報告会の後、「つくば・地域連携推進賞」及び「つくばエコシティ推進賞」の表彰を行いました。

<筑波大学社会貢献・地域連携 HP>
<http://scpj.tsukuba.ac.jp/>



「つくば・地域連携推進賞」最優秀賞は、医学群医学類 6 年加藤愛香里さんグループの「ゆめ花火」、「つくばエコシティ推進賞」は、人間系の上田孝典准教授グループの「児童生徒による『わたしの学校・地域』紹介 CM 製作プロジェクトー大子町からの発信ー」が選ばれました。

なお、贈呈した楯は、杉間伐材を利用し、環境負荷低減に寄与しています。

今後も、このような交流の機会を継続し、本学の教育研究成果を活用した社会貢献活動の活性化を図っていきたいと考えています。

つくば・地域連携推進賞・つくばエコシティ推進賞 2014 受賞者

受 賞 名		課 題 名	所 属 等	職位等	氏 名
つくば・地域連携推進賞	最 優 秀 賞	ゆめ花火	医学群 医学類	6 年	加藤愛香里
	優 秀 賞	国際都市つくばの新しい国際化施策ー一定住外国籍児童に対する「職育」プログラムー	人文社会系	准教授	明石 純一
	優 秀 賞	高齢者運動支援リーダーを中心とした健康づくりネットワークの醸成	体育系	准教授	大藏 倫博
	優 秀 賞	高校生アトライター大賞：芸術による高大連携事業	芸術系	教 授	岡崎 昭夫
つくばエコシティ推進賞		児童生徒による「わたしの学校・地域」紹介 CM 製作プロジェクトー大子町からの発信ー	人間系	准教授	上田 孝典
つくば・地域連携推進賞	特 別 賞	東日本大震災津波被災地域における民俗資料・文化財の調査及び保存活動	人文社会系	教 授	古家 信平
	特 別 賞	茨城県内の高校交流による数理モデルを用いた地域課題解決提案	システム情報系	教 授	吉瀬 章子
	特 別 賞	学生によるサイエンスコミュニケーションの実践ー筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUTー	生命環境系	助 教	Matthew C. Wood
	特 別 賞	「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの実践展開 2013	生命環境系	助 教	丸尾 文昭
	特 別 賞	柔道の再興と学校必修化を支援する「東北 3 県柔道指導キャラバン」	体育系	准教授	増地 克之
	特 別 賞	復興作業およびスポーツ振興を通じた被災地での支援活動	体育系	助 教	奈良 隆章



<楯は、間伐材を使用しております。>



地域と大学つなぐ

社会貢献プロジェクト 10周年

地域との連携強化したい



井上 勘 教授

社会貢献
経緯と課題

筑波大学は、1962年に創立された以来、社会貢献活動を積極的に推進してきました。特に、地域との連携強化を重視し、さまざまなプロジェクトを実施してきました。その経緯と課題について、井上教授はこう述べています。

「社会貢献プロジェクトは、大学の社会的責任を果たすための重要な取り組みです。特に、地域との連携強化は、大学の存在意義を高めるために不可欠です。しかし、そのためには、大学側だけでなく、地域側からの理解と協力が不可欠です。また、プロジェクトの持続性や効果の測定も課題の一つです。」

井上教授は、筑波大学の社会貢献プロジェクトが、地域社会の発展に貢献していることを強調しています。特に、学生が地域と触れ合い、社会貢献の意識を高めることが、大学の使命の一つであると述べています。

理科の面白さ教える

小学生へ
科学版

「理科の面白さ教える」で実験を行う小学生

筑波大学の理科教師が、小学生を対象に「理科の面白さ教える」というプロジェクトを実施しています。このプロジェクトは、小学生に理科の楽しさを伝え、科学の基礎知識を身につけてもらうことを目的としています。

プロジェクトは、筑波大学の理科教師が、小学生を対象に実験や観察を行い、理科の面白さを伝えるという形式で行われます。特に、身近な現象から理科の原理を説明し、実験を通じて理解を深めることが特徴です。

このプロジェクトを通じて、小学生は理科の面白さを学び、科学の基礎知識を身につけることができます。また、理科教師の指導の下で実験を行うことで、科学的な思考力や観察力も鍛えられるでしょう。

「理科の面白さ教える」プロジェクトは、筑波大学の理科教師が、小学生を対象に実験や観察を行い、理科の面白さを伝えるという形式で行われます。このプロジェクトは、小学生に理科の楽しさを伝え、科学の基礎知識を身につけてもらうことを目的としています。

プロジェクトは、筑波大学の理科教師が、小学生を対象に実験や観察を行い、理科の面白さを伝えるという形式で行われます。特に、身近な現象から理科の原理を説明し、実験を通じて理解を深めることが特徴です。

このプロジェクトを通じて、小学生は理科の面白さを学び、科学の基礎知識を身につけることができます。また、理科教師の指導の下で実験を行うことで、科学的な思考力や観察力も鍛えられるでしょう。

社会貢献
プロジェクト

実験のやり方を説明する小林高志郎先生（右）

短編映画作りで地域見つめ直す



映画制作の打ち合わせをする高校生と中学生たち

筑波大学の高校生と中学生が、地域を題材にした短編映画を作っています。このプロジェクトは、地域を題材にした短編映画を作ることによって、地域をよりよく知り、地域を愛する心を育てることを目的としています。

プロジェクトは、筑波大学の高校生と中学生が、地域を題材にした短編映画を作ることによって、地域をよりよく知り、地域を愛する心を育てることを目的としています。特に、地域の歴史や文化をテーマにした映画を作ることが特徴です。

このプロジェクトを通じて、高校生と中学生は、地域をよりよく知り、地域を愛する心を育てることができます。また、映画制作を通じて、コミュニケーション能力やチームワークも鍛えられるでしょう。

中学生と
町おこし

筑波大学の中学生が、地域を題材にした短編映画を作っています。このプロジェクトは、地域を題材にした短編映画を作ることによって、地域をよりよく知り、地域を愛する心を育てることを目的としています。

プロジェクトは、筑波大学の中学生が、地域を題材にした短編映画を作ることによって、地域をよりよく知り、地域を愛する心を育てることを目的としています。特に、地域の歴史や文化をテーマにした映画を作ることが特徴です。

このプロジェクトを通じて、中学生は、地域をよりよく知り、地域を愛する心を育てることができます。また、映画制作を通じて、コミュニケーション能力やチームワークも鍛えられるでしょう。

平成26年度
主な社会貢献プロジェクト活動

- 《科学版》
 - ・夏休み自由研究お助け隊
 - ・スーパーサイエンスリーグによる未来の科学者の育成～卓越した児童・生徒をさらに伸ばす試み～
- 《国際》
 - ・国際都市つくばの新しい国際化施策一定在外国難民に対する「難民」プログラム
- 《健康》
 - ・「健康青年」が「健康少年」を育てる！つくば2014 学生が地域の子ども達に贈る体験型健康教育
- 《文化・地域活性化》
 - ・つくばが地域食育支援プロジェクト
 - ・筑波大学芸術文化活動による「夏休みアート・デザイン展」の開催
- 《健康・スポーツ》
 - ・地域住民の健康増進を目的とした健康講座の開催
- 《国際・福祉》
 - ・科学的視点に基づく育児支援専門家の養成
 - ・「守国」を用いて地域の人々に英語を一つづつ市の病院、学校を中心に～
- 《復興・再生支援》
 - ・東日本大震災被災地におけるつとめコミュニティ復興支援活動
 - ・東部の復興と学校必修化を支援する「東部3県復興支援キャラバン」

本学の社会貢献活動は、筑波大学新聞に第314号から毎号紹介されています。下記 URL からご覧ください。
筑波大学新聞 第314号(平成26年5月19日発行) 編集:筑波大学新聞編集部 発行:筑波大学
<https://www.tsukuba.ac.jp/public/newspaper/shinbunindex.html>

筑波大学 社会貢献プロジェクト 2013－14

発行月 平成 26 年 9 月
お問い合わせ 筑波大学企画室
〒 305 - 8577
茨城県つくば市天王台 1 - 1 - 1
Tel 029 - 853 - 2052, 2767
E-mail ut.scpj@un.tsukuba.ac.jp
URL : <http://scpj.tsukuba.ac.jp/>
印刷 いばらき印刷株式会社





筑波大学

University of Tsukuba